

浅羽町立浅羽東小学校建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

古 新 田 II

遺 物 編

1993

静岡県浅羽町教育委員会

浅羽町立浅羽東小学校建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

古 新 田 II

遺 物 編

1993

静岡県浅羽町教育委員会

序 文

浅羽町は浅羽北小学校の大規模校解消の為、分離新設の方針を打ち出し、数候補地の中から最終的に本地を決定した。

昭和63年11月に埋蔵文化財確認調査を実施したところ、かなり広範囲に遺跡が分布していることが確認された。これをうけ、発掘調査を平成元年3月に開始し、平成2年3月をもって完了した。

発掘調査が進むにつれ、古墳時代の「ロ」字状配置建物群や左右対称の大型建物を含む豪族居館跡等が発掘され予測した以上の遺跡であることが判明されるとともに、現在ブームになっている豪族居館への関心のさきがけとなったと思われる。

この為、県教育委員会を含め、関係者と保存についての協議を行った。この遺跡の活用の方法として平成3年10月に開館した浅羽町郷土資料館に宮本長二郎先生監修の古新田遺跡復元模型(1/60)や、出土遺物を多数展示し、かつ跡地に建設した校舎の一棟に、古墳時代の生活の様子を児童にもわかりやすい壁画として残すことにした。

これらの資料は町民の歴史への生きた教材として利用するとともに、文化財保護の啓蒙に役立つものと確信をしている。

「文化財の保護と開発」古くて新しい言葉である。歴史を否定的に捉えるのではなく、地域住民の歴史に対する理解を深めるとともに文化遺産を生かしつつ、活用したまちづくりを進める事が大切ではないかと思われる。

おわりに、本書の発刊にあたり、日本考古学協会員柴田 稔氏・発掘に従事して下さった作業員・地権者各位並びに格別のご協力とご指導を賜った関係諸氏に対し、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

静岡県浅羽町教育委員会

教育長 岡 本 幸 夫

例 言

1. 本書は、古新田遺跡の発掘調査報告書（遺物編）である。
2. 本遺跡は、浅羽町浅羽に所在し、浅羽町立東小学校の新設工事に伴い、1988年11月1日から同年11月30日まで確認調査を行い、1989年3月1日から1990年3月31日まで本調査を実施した。その後、1990年4月1日から1993年3月31日まで、断続的に出土遺物、遺構実測図と写真の整理作業を実施した。なお、1992年3月31日に遺構編を発行しており、本書では、その際に用いた遺構番号、略称や記号などを基本的には踏襲している。

3. 調査の体制は下記の通りである。

調査主体者 浅羽町教育委員会 教育長 岡本幸夫

調査担当者 柴田 稔・柴田 睦

4. 発掘調査および本書の発行に係わる事務は浅羽町教育委員会社会教育課が担当した。
5. 本書の編集・写真撮影・挿図作成は柴田 稔、柴田 睦が共同で行ったが、弥生土器・土師器は主として柴田 睦が担当し、須恵器その他は主として柴田 稔が担当した。
6. 本遺跡で発見された古墳時代の建物の復元は宮本長二郎氏にお願ひし、御報告をいただいたので巻末に別編として掲載した。
7. 遺構の略称および遺物の略号は下記の通りであるが、略号については表現の都合上、一部変更している場合がある。

H—孤立柱建物跡	● —弥生土器・土師器
J—竪穴住居跡	○・す—須恵器
D—土坑	▲ —石製模造品
K—溝状遺構	S —礫
	■ —炭化材

8. 表内の計測値の単位については、玉類は「mm」、土器は「cm」で、推定値については「()」を付した。その他のものについては、単位を表内に示した。
9. 本遺跡の調査に当たっては、次の機関・個人に有益な御助言・御指導を賜った。記して感謝したい。

法政大学考古学研究室 国学院大学考古学研究室 静岡県教育委員会県史編さん室 静岡県埋蔵文化財調査研究所 静岡県教育委員会文化課 静岡県考古学会

石野博信 伊藤玄三 小笠原好彦 宮本長二郎 安倍義平 市原壽文 田辺昭三 鈴木靖民
向坂鋼二 辰巳和弘 萩元 勝 中井貞夫 橋本博文 鈴木敏弘 小林重義 大谷 猛 実川順一
車崎正彦 小川貴司 南 秀雄 酒寄雅志 岡村勝行 横山 洋 杉本 良 高崎直也 穂積裕昌
加藤芳朗 小倉淳一（敬称略・順不同）

古新田Ⅱ(遺物編)

目 次

I 調査の経過	1
II 周辺の環境	2
III 縄文時代の遺物の概要	5
IV 弥生時代の遺物の概要	6
1) 遺物出土状況	6
2) 出土遺物の概要	6
V 古墳時代の遺物の概要	9
1) 遺物の出土状況	9
土師器の出土状況	9
5世紀代の須恵器の出土状況	10
6世紀以降の須恵器・陶器の出土状況	18
石製模造品の出土状況	20
その他遺物の出土状況	21
2) 出土遺物の概要	22
5世紀代の須恵器	22
6世紀以降の須恵器	22
土師器の概要	32
石製模造品	47
その他の出土遺物	64
VI 奈良時代以降の遺物	64
VII 考察	
1) 古新田遺跡における弥生時代の集落景観	98
2) 古新田遺跡出土須恵器からみた遠江地方の須恵器について	104
別編1 古新田遺跡建物遺構の復元的考察 宮本長二郎	117

挿 図 目 次

第1図	古新田遺跡位置図	2
第2図	正保年間の横須賀港周辺絵図	4
第3図	1-1 H実測図 (下は基礎石・根巻き石の状況)	65
第4図	2-4 H実測図 (下は基礎石・根巻き石の状況)	66
第5図	1-1 J (上)、2-2 J (下) 遺物出土状況	67
第6図	2-5 J (左上)、2-7 J (右上)、3-1 J (下) 遺物出土状況	68
第7図	3-5 J 遺物出土状況	69
第8図	4-1 J 遺物出土状況	70
第9図	4-3 J 遺物出土状況	71
第10図	1-8 D (左上)、2-6・7 D (上中)、2-8 D (右上)、2-9 D (中左) 2-10・11 D (中右)、2-17 D (下左)、2-19 D (下右) 遺物出土状況	72
第11図	2-1 D (上)、3-1 D (下) 実測図	73
第12図	3-2 D (上)、3-11 D (下) 遺物出土状況	74
第13図	3-10 D 中～上層遺物出土状況	別添折込み
第14図	3-10 D 下層遺物出土状況	別添折込み
第15図	3-12 D 遺物出土状況	75
第16図	4-6 D (上)、4-10 D (下) 遺物出土状況	76
第17図	4-1 D (左上)、4-2 D a (左下)、4-2 D b (右上)、4-仮13 D (右下) 遺物出土状況	別添折込み
第18図	4-3 D 遺物出土状況	77
第19図	4-3 D 石製模造品出土状況	78
第20図	4-仮1 D (上中)、4-仮3 D (下右)、4-仮4 D (上左)、4-仮8・9 D (下左) 4-仮17 D (上右) 遺物出土状況	別添折込み
第21図	弥生土器実測図	79
第22図	土師器実測図 (Na.1)	80
第23図	土師器実測図 (Na.2)	81
第24図	土師器実測図 (Na.3)	82
第25図	土師器実測図 (Na.4)	83
第26図	土師器実測図 (Na.5)	84
第27図	土師器実測図 (Na.6)	85
第28図	土師器実測図 (Na.7)	86
第29図	土師器実測図 (Na.8)	87
第30図	土師器実測図 (Na.9)	88
第31図	土師器実測図 (Na.10)	89
第32図	須恵器実測図 (Na.1)	90
第33図	須恵器実測図 (Na.2)	91
第34図	須恵器実測図 (Na.3)	92
第35図	須恵器実測図・拓影 (Na.1)	93

第36図	須恵・陶器実測図	93
第37図	須恵器実測図・拓影 (No. 2)	94
第38図	須恵器実測図・拓影 (No. 3)	95
第39図	石製模造品実測図	96
第40図	土製品実測図	97
第41図	鉄製品実測図	97

挿図目次

表-1	弥生土器観察表	7~8
表-2	柱穴出土須恵器一覧 (No. 1)	11
表-3	柱穴出土須恵器一覧 (No. 2)	12
表-4	同一図体出土須恵器の分散状況	12
表-5	各遺構その他出土須恵器一覧 (表土・攪乱)	13
表-6	各遺構その他出土須恵器一覧 (表土・攪乱・竪穴住居跡)	14
表-7	各遺構その他出土須恵器一覧 (5世紀・土坑)	15
表-8	各遺構その他出土須恵器一覧 (5世紀・土坑)	16
表-9	各遺構その他出土須恵器一覧 (5世紀・土坑)	17
表-10	各遺構その他出土須恵器一覧 (5世紀・土坑)	18
表-11	6世紀以降の須恵器・陶器などの出土状況	18~20
表-12	各遺構出土石製模造品・玉類の数量	21
表-13	須恵器観察表	23~32
表-14	土師器観察表	33~47
表-15	白玉計測値統計グラフ (4-3 D出土)	48
表-16	白玉計測値 (4-3 D No. 1)	49
表-17	白玉計測値 (4-3 D No. 2)	50
表-18	白玉計測値 (4-3 D No. 3)	51
表-19	白玉計測値 (4-3 D No. 4)	52
表-20	白玉計測値 (4-3 D No. 5)	53
表-21	白玉計測値 (4-3 D No. 6)	54
表-22	白玉計測値 (4-3 D No. 7)	55
表-23	白玉計測値 (4-3 D No. 8)	56
表-24	白玉計測値 (4-3 D No. 9)	57
表-25	白玉計測値 (4-3 D No. 10)	58
表-26	白玉計測値 (4-3 D No. 11)	59
表-27	白玉計測値 (4-3 D No. 12)	60
表-28	白玉計測値 (4-3 D No. 13)	61
表-29	白玉計測値 (4-3 D No. 14)	62
表-30	白玉計測値 (4-3 D No. 15)	63

I 調査の経過

古新田遺跡は、浅羽町立東小学校建設に伴う埋蔵文化確認調査で発見されたものである。

確認までの経過は次のようである。

1987年3月15日 分布調査 この調査は、柴田稔が担当して4箇所の候補地を踏査した。いずれの候補地も遺跡が所在したが、この時点では、古新田遺跡の存在は予測できなかった。

1988年11月1～30日 確認調査 調査の内容と結果は、『古新田』Iに掲載したが、この時点で建設予定地の東半分が相当有力な遺跡であることが判明した。

1989年3月1日～1990年3月31日 本格調査 この調査では、古新田遺跡の建物群の年代決定が最大の問題点となった。『古新田』Iや本書に掲載されているように、結論的には5世紀代を主体とした建物群であるとしたが、この結論に達するまでには相当の時間を必要とした。これは、何人かの研究者から、奈良時代前後の遺跡でないことを証明しない限り、5世紀の建物群として認知できないという厳しい意見が出されたことや、類例が発見できなかったためである。特に、前者の意見には想像以上の配慮が必要とされた。このために、重要な遺跡であるとの認識の下で遺跡保存に関する協議が開始されたのは、1989年9月であった。しかし、この時点では、遺跡の現状保存は諸事情から困難な状況となっていた。

1990年4月～1991年3月 図面整理と調査概報の発行

1991年4月～1992年3月 遺構編（『古新田』I）の発行と遺物整理

1992年4月～1993年3月 遺物整理と遺物編（『古新田』II）の発行

以上のような経過で、古新田遺跡の調査と報告作業は終了した。また、本編ともいべきまとめの作業は、遺構編で遺構について、遺物編で遺物について行っているが、弥生時代の遺構については、本書でまとめている。

II 周辺の環境

『古新田』I、『団子塚遺跡』I、『権現山遺跡』などの周辺の環境を記すなかで、本遺跡周辺の遺跡の分布状況などの歴史的環境や、浅羽平地を中心とした地理的環境は再三記してあるので、ここでは、浅羽平地の残映であり、現代の浅羽平地を象徴するものの一つである弁財天川について記す。

(1) 弁財天川のあらまし

袋井市史によると、弁財天川は、大きくは弁財天川本流と、三沢川から構成され、前者は全長9.6km、後者は10.9kmである。（袋井市史）

三沢川は、袋井市三沢付近を流れ、浅羽町大野で本流に合流する河川であり、小笠丘陵の水を集めている。この川は、丘陵内では相当上流まで砂礫で構成される谷底平野（氾濫原）をもっており、ふだんはほとんど川水を持たず、砂礫層の下に伏流しているが、大雨になると急激に水量が増加し、谷底平野の砂礫を水田地帯へと押し出してくる。袋井市山崎から大須賀町石津に至る県道は、よく観察すると小石混じりの微高地の上を通過しているが、これは、三沢川的作用で形成された自然堤防であり、入江池（『古新田』I参照）成立の原因になっている。

一方、弁財天川本流は、『磐田郡誌』では、「東浅羽村梅山より発して弁財天口に至りて海に入



第1図 古新田遺跡位置図

以上のように理解すると、現時点では弁財天川が絵図面などに明瞭に表現される上限や、名称が付けられた時期などは把握できないが、新田開発に伴って、徐々に流路が決定され江戸時代後半に現在のような河川になったと考えることができる。

(3) 弁財天川の位置付け

弁財天川周辺の地理的環境から、弁財天川周辺は、海岸線に添って続く数条の砂堤と、原野谷川が形成した南北に長い自然堤防によって造られた天然の輪中ということができた。そして、初期の弁財天川は、その輪中の水を集めて排水する川であるのと同時に、調整池的要素、用水的要素も少なからず持ち合わせている川といえる。

しかし、弁財天川は、新田開発に伴って成立していった傾向が強く、この時点で調整池的機能は失われたといえるが、近年の水田地帯への客土によって低海拔の水田も減少し、用水的機能も失われていった。

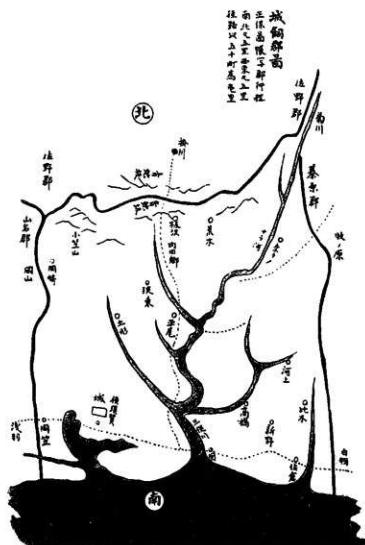
一方、新田開発は、遊水の減少につながり、かんばつの原因を作るこ

とになった。「袋井市史」の調査を見ると、浅羽平地は、上流地域に比較して降水量が少なく、原野谷川の溢水と小笠山塊の伏流水が利用できる低地である利点から稲作が可能であったわけで、豊年であっても、作付けした全ての水田から収獲できる万作であった年はないのが歴史的事実とみなくてはならない。これを万作にするために農業用水が完備されたわけであるが、この農業用水の完備は、上流の悪水用水化して再利用した時期と比較すれば、平地に流入する水量を膨大なものとし、工業用水、家庭水道と共に、浅羽平地に流入する水量を日常的に増加させている。いうまでもなく弁財天川に要求される排水能力は、多機能を持ったその成立時点とは比較にならないものになっている。このために、現在では江之端などの各所に排水機場を設けて、強制排水が可能な状態に改良されている。

また、小笠山の開発も弁財天川の排水能力の強化を要求するものである。

江戸時代の横須賀藩は、山奉行、山番人を置いて森林の涵養に努力していたが、明治に入って、林政の乱れから伐採・開墾が盛んになり、山は荒廃し水害を起こすことになった。このため、明治22(1889)年には広い範囲を御料林とし、昭和22(1947)年からは国有林化して水源の涵養に勤める他に、河川改修も進められている。

以上のように、弁財天川本流は、せいぜい200年程度以前に成立した河川であり、長い時間をかけ



第2図 正保年間横須賀港周辺絵図(磐田郡誌引用)

て自然との調和のなかで成立したというよりは、近世末期の敷農政策に伴い、自然を征服のごとく成立した河川であるといえる。このことは、常に自然からの強力な挑戦を受けている（『歴史の研究』挑戦と応戦参照）河川ということに他ならない。

弁財天川のような特徴は、今の蒲川（磐田市）、沼川（沼津市）など、低地帯を流れる河川に共通して見られるものであるが、弁財天川の流域は、八郎潟や有明海と同様に潟が埋積して成立した低地帯であることを忘れてはならない。

参 考 文 献

- 大庭正八 「袋井市史」通史編「第1編 袋井史域の自然環境」 袋井市 1983
『大須賀町誌』 大須賀町 1980
『磐田郡史』 磐田郡役所郡教育会編纂 1922 名著出版復刻 1971
『静岡県史』 静岡県編纂 1936 名著出版復刻 1972
多田文男 『地理学評論』19-12「遠州灘沿岸横須賀付近の海岸地形」 1943
加藤芳朗 『磐田の自然』「土地条件編」 磐田市史編纂委員会 1979
柴田 稔 『青木、馬場第1・第2遺跡』「第1章 遺跡の立地と環境」 浅羽町教育委員会 1982
原田 和 『浅羽風土記』 浅羽町教育委員会 1957年初版
原田 和 『遠江資料集』 美哉堂書店 1960
加藤芳朗 『大畑貝塚』「第4章大畑遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地」 袋井市教育委員会 1881
『元禄大保明治遠江国石高表』 磐田市史編纂委員会 1983
井関弘太郎 『沖積平野』 東大出版会 1983
アーノルド・J・トインビー 『歴史の研究』「歴史の研究」刊行会翻訳 経済往来社 1977
柴田 稔 『団子塚遺跡』I「II 周辺の環境」 浅羽町教育委員会 1992
柴田 稔 『古新田遺跡』I「II 周辺の環境」 浅羽町教育委員会 1992
柴田 稔 『権現山遺跡』「III 周辺の環境」 浅羽町教育委員会 1987
柴田 稔 『井戸ヶ谷遺跡』「3 周辺の位置および環境」 大須賀町教育委員会 1985

III 縄文時代の遺物の概要

弥生時代や古墳時代の遺構から、少量の縄文時代に属する石鏃と剥片が発見された。しかし、縄文時代の遺構や土器は発見されていないことから、遺跡の周辺部的な傾向とみることができる。

当遺跡からも縄文時代の遺物が採集されているという事実だけを報告する。

IV 弥生時代の遺物の概要

(1) 遺物出土状況

竪穴住居跡

弥生時代後期の竪穴住居跡には、1-1J a、1-6J、2-2J a、2-5J、2-7-9J、2-11J、3-5J aや3-6Jの10軒がある。これらの住居跡の内、焼失家屋と考えられるものには、1-1J a、2-2J a、2-5J、2-7J、3-5J aの5軒があり、その内、完形に近い土器がまとまって多く出土したもの(1-1J a、2-7J)と土器片がわずかに出土したもの((2-5J、3-5J a(2-5Jについては攪乱が著しく不明な点も多い))の二者がある(2-2J aについては、北壁際からはほぼ完形の壺が1点出土しており前者に含まれる可能性もあるが、古墳時代の竪穴住居跡と重複しており、遺物については、ほとんど不明である)。

前者の例としては、1-1J aからは、床面上から壺4点、台付甕3点と上層からではあるが、高坏が1点出土している。また、周溝内より土器と共に拳大の礫が出土している。2-7Jからは、床面上から小型の壺2点、台付甕片1点と高坏2点が出土している。長く伸びている排水溝内からも比較的多くの土器が出土しており、ほぼ完形の壺の破片が下層から上層にかけて散在していたり、北端部の火を焚いた付近では、中層から甕や壺片が同様に散在していた。通常の竪穴住居跡内より出土する器形の土器が住居跡内からよりも排水溝内から出土している点は興味深い。

後者の例としては、2-5Jからは多量の炭化材と共に壺片が、3-5J aからは周溝内より台付甕片が出土している。

その他の竪穴住居跡については、土器片がわずかに出土しているものがほとんどである。

土坑

調査区の東側に拡がっている浅い小型の靴底形の土坑の多くが、出土遺物や形態の類似から弥生時代後期に属するものと考えられる。これらの内、遺物が出土しているものの多くは、下-中層から土器片と小型の礫が少量発見されている。また、下層や底面から焼土が確認されている例(1-8D、2-9Dや2-17D)もある。やや、長く深い例ではあるが、1-8Dからは比較的多くの遺物が出土しており、壺、台付甕や高坏の破片が拳大の礫と共に出土している。

(2) 出土遺物の概要

弥生土器

出土した器種としては、壺、台付甕や高坏などがある。

壺の形態的特徴としては、頸部は比較的太く、胴部は下位に稜を有する無花果形を成すものが多く、大・中・小型のものがある。

大型のものとしては、21-2-7があり、口縁部内面にはS字状結節縄文が、肩部には有段櫛刺突羽状文が施文され、頸部外面は横ナデされ、胴部外面上半にはハケメが残り、下半はヘラミガキされているものなどがある。7は棒状浮文が貼付された複合口縁であるが、胎土が他のものとはやや異質で、搬入品の可能性がある。

中型のものとしては、21-1があり、口縁部は大きく内弯して開き、頸部は太く、肩部には櫛刺突羽状文が施文されている。

小型のものとしては、21-8・9があり、大・中型の器形と比較すると寸足らずな形態である。9は肩部に櫛刺突羽状文が施文され、胴部は丁寧なヘラミガキされている。

台付甕としては、21-11・12があり、11は土圧による変形や摩滅により、不明な点が多いが、胴部

は球形胴に近く、おそらく外面はハケメにより仕上げられていたものと考えられる。

高坏としては、21-10があり、脚柱上部外面に羽状文が2段に施文され、裾部は段が大きく突出することがなく、長く、やや外反気味に開いている。

これらの土器に認められる形態、文様や調整痕などの特徴は、菊川式土器の比較的新しい段階に認められる要素が多く、また、それらの要素が各土器にほぼ認められることや出土した遺構の在り方などから、これらの土器は比較的短期間に使用されたものと考えられる。

表-1 弥生土器観察表

図版番号	出土遺構	器種	計測値	形態・手法の特徴	色調・胎土	備考
21-1	2-2Ja	壺	口 16.0 胴 15.5 底 7.3 高 18.4	口縁部は内弯気味に大きく開き、 胴部は無花果形を呈しているが、 下位の稜は弱い。肩部は櫛刺突羽 状文が施文され、その上に3個1 単位の円形浮文が4ヶ所に貼付さ れている。	浅黄橙色 微細黒雲母○	
21-2	1-1Ja	壺	胴 21.6 底 6.9	肩部に段を持ち、胴部は無花果形 で、下位に明瞭な稜を持つ。肩部 外面には櫛刺突羽状文が施文さ れ、胴部外面上半は斜位ハケメ、 下位は横位ヘラミガキ。	浅黄橙色。小礫○ 微細黒雲母△	
21-3	2-7J (排水溝内)	壺	口 17.8	やや外弯気味に開く折り返し口縁 で、外面は斜位ハケメ。	黄橙色。粗砂○ 橙色粒子○	回転実測
21-4	2-7J (排水溝内)	壺	胴 23.8 底 7.7	胴部は無花果形。頸部外面はハケ メ→横位ナデ、内面に粘土組織。 肩部には段櫛刺突羽状文。胴部外 面は上位に斜位ハケメ、下位に横 位ヘラミガキ。底面に木葉痕が残 る。	浅黄橙色。粗砂○ 微細黒雲母△	一部回転実 測
21-5	2-6D	壺	口 18.8	口縁部はやや外弯気味に開き、端 部は折り返され、水平に外反。内 面には縄文が施文され、上端には S字状結節縄文が走る。折り返し 部はハケ状工具によるキザミ。	橙色。小礫○ 微細黒雲母△	
21-6	2-5J	壺	口 18.0	口縁部はやや外弯気味に開き、端 部は折り返され、水平に外反、内 面には羽状縄文を施文。	にぶい黄橙色 粗砂○ 微細黒雲母△	回転実測

21-7	2-7 J (排水構内)	壺	---	やや内弯気味に開く複合口縁で、 外面には棒状浮文を貼付。	浅黄褐色。小礫○ 灰色粘土粒子○	口縁部小破 片
21-8	2-7 J	壺	胴 9.8 底 5.4	比較的小型。胴部はソロバン玉 形。	にぶい橙色 粗砂○ 微細黒雲母△	
21-9	1-8 D	壺	胴(12.8)	比較的小型。胴部はなだらかで、 外面には櫛刺突羽状文が施文さ れ、胴部外面はハケメ→横位ヘラ ミガキで、下位に襷を持つ。	明黄褐色 粗砂○ 微細黒雲母○	
21-10	1-8 D	高 坏	高(12.9)	脚柱部は直線的に開き、外面はヘ ラ刺突羽状文。底部は段を持って 外反し、外面に斜位ハケメ。	明黄褐色。小礫○ 微細黒雲母○	
21-11	1-1 Ja	台付甕	口(11.5) 胴 12.6 底 8.2 高(15.6)	上圧によりかなり変形している。 口縁部は短く、「く」字状に開 く。胴部は球形胴に近く、内面に ハケメ。台部はやや内弯気味に開 く。	赤褐色。小礫○ 微細黒雲母△	
21-12	1-8 D	台付甕	底 9.0	台部はやや内弯気味に開く。	明黄褐色。粗砂○	
*土圧によりかなり変形しているものが多く、形態についてはかなり推定している。また、調整痕については摩減しているものが多く、不明な点が多い。胎土については、比較的多く認められた岩石や鉱物のみを記し、相対的に多く観察されたものには○を、少ないものには△を付けている。						

V 古墳時代の遺物の概要

(1) 遺物の出土状況

土師器の出土状況

調査区内からは多量の土師器が出土している。しかし、出土した土師器の残存状況が非常に悪く、器厚の厚く残りの良い、器種の認定が容易なものが、比較的目に付く結果となった。そのため、高環などは、坏部と脚部の接合部から出土点数を把握することが可能であるが、薄手の土器については、正確なその出土点数を把握するまでにはいたっていない。とくに、坏については、確実に認定できたものは数点に過ぎない。ここでは、これらの点を踏まえた上で、記述を進めてゆく。また、3-10D上層や3-13Dから奈良時代の土師器が出土しているが、ここでは、古墳時代中期に属する土師器のみ取り上げている。

掘立柱建物跡の柱穴内からは、少量ではあるが土師器が出土している。とくに多い例としては、群倉域とされる1-1~3H、2-1~5Hからの出土が顕著で、2-2・3Hからは高環脚部などが出土している。中でも、比較的大型の総柱建物である1-1Hや2-4Hから多く出土している。その他、2-22Hから高環脚部が出土しているが、ほとんどは細片がわずかに出土した程度である。

竪穴住居跡内からもそれほど多くは出土していないが、なかには2-2Jのように多量に覆土内より出土している例がある。これは、住居廃絶後の窪地を土坑として利用したものと考えられる。

住居跡の床面および各施設から出土した土師器は、土坑内出土例と比較すると少量であり、まとまった量が出土した住居跡はない。出土状況として特徴的なものを挙げれば、1-4J、2-6Jや3-2Jcからは炉跡の付近より甕の破片が出土しており、4-1Jの貯蔵穴内からは、完形の甕が2点出土している。1-2Jaの貯蔵穴(1-6D)からは高環や坏が出土している。2-3Jaの柱穴内からは、2点の高環の坏部が重なって底面から出土している。

土坑内からは、小型の土坑や一部の例(3-8Dなど)を除き、多量に出土している。出土した土師器は、手握土器や小型埴などの小型の土器やわずかな例を除き、ほとんどは破片の状態で出土している。出土状況としては、底面から上層までまんべんなく出土する例と、面的にまとまって出土している例がある。前者の例としては、4区の南側の土坑群、3-2・10Dや4-3Dなどの比較的大型で深い例に多い。後者の例としては1-3D、2-1・3D、3-1・11・12D、4-1・7Dなどがあり、周辺に散在する小型の浅い例に多い。これらは、短期間に廃棄されたものであろう。また、2-1D、3-11・12Dや4-1Dなどは中層からまとまって出土しており、土坑掘削後、ある程度時間が経過した後には廃棄されたものと考えられる。

出土した器種としては、相対的には高環の量が非常に多く、次いで甕が多い。甕については、台部や平底の底部破片の出土が少なく、ほとんどは丸底であろう。また、壺の出土量もわずかである。その他、小型埴、甕、坏などが出土している。

各土坑内で器種の出土比率に偏りが認められるものとしては、高環の多い例として1-1・3D、2-1Dや3-2Dなどがあり、甕の多い例としては、1-2D、3-1・11・12Dや4-1Dなどがある。

様々な器種が比較的多く出土した例としては、3-10Dや4-2Dなどがある。4-2Dからは比較的古い様相を示す土器が出土しており、それらと共に、多くの小型埴が出土している。3-10Dからは小型埴の出土量はわずかで、当遺構では唯一、手握土器などの小型の土器が少量出土している。出土した土師器の形態的な変化から、4-2D→3-10Dという時間的推移が考えられ、その器種構成

の変化などは注目される。

5世紀代の須恵器の出土状況

掘立柱建物跡

古墳時代中期に属する掘立柱建物跡は70棟前後が調査されている。また、奈良時代に属する例は3棟、弥生時代に属する例は1数棟発見されている。しかし、これらの柱穴から出土した須恵器は意外に少ない。

遺物の取り上げの段階で、所在が不明確になったものもないではないが、明確に柱穴内から出土したものは100点強である。

これらの内で、奈良時代に属する2例を除くと、時期の判断できるものはすべて5世紀代に属すると考えて良いであろうが、いずれも細片である。

これらは、表-2・3にまとめられたが、71点は第32～38図に示した。図に示さなかったものは、いずれも極細片である。

須恵器を出土する掘立柱建物跡には、極端な偏りが見られる。

特に、2-4Hからは、総出土数の半数が出土している。また、1・2区に分布する「ロ」字状配置の建物群からの出土した量は、全建物跡出土量の80%近くに達している。

これに対して、3区の「コ」字状配置の建物群からは、まったく出土していない。また、4区の「コ」字状配置の建物群でも、4-5Hから2点発見されただけである。

同一遺構でも、柱穴によって出土量に極端な違いが見られる例がある。

2-4Hは、各柱穴共にほぼ共通の保存状態であるが、表で見ると、1-1P、1-10P、1-8P、2-1P、3-1Pからは出土していない。これは、建物に対しては、東側の列と南側の列に当たり、建物を「L」字状に囲む形になる。また、多量に出土したのは、2-8P、3-10P、3-8Pであるが、後二者からは石製模造品も出土している。

2-4Hでは、同一個体と思われる破片が複数の柱穴から出土している。37・8・12・21・22～25・29・32・38-2・5・6・10・15は、直接接合はできないが、同一個体とみて良いであろう。また、37-30・38-11も同一個体の可能性がある。

このような傾向が、4-2Hなど、他の掘立柱建物跡でも指摘できるのかも知れないが、出土総数が少ないために明確ではない。

また、4-8Hの1-2Pから出土した甕は、約15m北側にある4-3J覆土に同一個体の破片2点が出土し、異なった遺構から同一個体が出土することも指摘できる。

土坑

土師器や石製模造品と混在して出土する。これらの内でも3-10Dがもっとも多く、3-1Dからは出土していない。また、4-1Dからは2片が出土したに過ぎない。しかし、掘立柱建物の柱穴と同様に、須恵器出土の有無で時期の前後を検証できる状況ではない。

表-4は出土須恵器の接合関係であるが、(2)の高環のように位置の離れた複数の土坑から同一個体が出土している例がある。また、(1)の甕のように竪穴住居内出土のものと接合できる例もある。これらは、遺跡の性格や遺構の性格を表しているものであろう。接合関係は、3・4区の遺物に限定され、1・2区の遺物あるいは1・2区の遺物と3・4区の遺物とが接合できた例はない。しかし、これは遺物の出土量によるもので、遺跡の性格を表すものではないと思われる。

竪穴住居跡

竪穴住居跡からも少なからず須恵器が出土しているが、これらの大半は住居跡の覆土から出土した

表-2 柱穴出土須臾器一覧 (No.1)

番号	注記	出土遺構	器種	排図
1	1219	1-14P (1-1H)	甕	37-7
2	1219	1-14P (1-1H)	甕	37-8
3	1554	1-4P (1-2H)	甕	37-1
4	1554	1-4P (1-2H)	甕	37-3
5	1215	1-6P (1-2H)	蓋	37-5
6	1213	1-7P (1-2H)	坏	37-2
7	1213	1-7P (1-2H)	坏	37-4
8	1211	1-13P (1-2H)	甕	37-10
9	1211	1-13P (1-2H)	坏	37-6
10	1211	1-13P (1-2H)	坏	
11	1216	1-17P (1-1H)	坏	37-9
12		1-33P (1-1H)	蓋	32-17
13	1050	1-5H 3-ハP	埴口縁	37-12
14	1050	1-5H 3-ハP	埴口縁	
15	1051	1-5H 3-ハP	甕	37-11
16	1099	2-3H 3-ハP	甕	37-13
17	1225	2-4P覆土		
18	1225	2-4P覆土	高坏	
19	1225	2-4P覆土	甕	
20	740	2-4H 3-ニP	坏	37-14
21	740	2-4H 3-ニP	坏	37-15
22	740	2-4H 3-ニP	蓋	32-7
23	905	2-4H 3-ハP	甕	38-7
24	1055	2-4H 3-ハP	坏	37-17
25	1055	2-4H 3-ハP	蓋	37-16
26	1055	2-4H 3-ハP		
27	1055	2-4H 3-ニP	蓋	37-20
28	1055	2-4H 3-ハP		
29	1055	2-4H 3-ハP	甕	38-5
30	1055	2-4H 3-ハP	甕	38-9
31	1055	2-4H 3-ハP	?	
32	1056	2-4H 3-ハP		37-27
33	1056	2-4H 3-ハP	甕	38-8
34	1065	2-4H 3-ハP	坏	37-18
35	1056	2-4H 3-ハP	坏	37-19
36	743	2-4H 3-ロP	甕	38-10
37	743	2-4H 3-ロP		37-31
38	743	2-4H 3-ロP	甕	38-4

番号	注記	出土遺構	器種	排図
39	743	2-4H 3-ロP	甕	38-6
40	748	2-4H 3-ロP		37-26
41	748	2-4H 3-ロP	甕	38-11
42	748	2-4H 3-ロP	坏	
43	748	2-4H 3-ロP		
44	1057	2-4H 3-ロP	蓋	37-33
45	860	2-4H 3-ニP	甕	38-12
46	860	2-4H 3-ニP	甕	38-13
47	741	2-4H 3-ハP	甕	37-21
48	741	2-4H 3-ハP	甕	37-22
49	741	2-4H 3-ハP	甕	37-24
50	741	2-4H 3-ハP	甕	37-25
51	741	2-4H 3-ハP	甕	38-2
52	751	2-4H 3-ハP	甕	37-23
53	751	2-4H 3-ハP	甕	37-28
54	751	2-4H 3-ハP	甕	37-32
55	751	2-4H 3-ハP	坏	
56	876	2-4H 3-ハP	坏	
57	876	2-4H 3-ハP	蓋	38-3
58	876	2-4H 3-ハP	蓋	
59	876	2-4H 3-ハP	坏	
60	876	2-4H 3-ハP	坏	
61	876	2-4H 3-ハP	坏	
62	876	2-4H 3-ハP	坏	
63	915	2-4H 3-ハP発見面	坏	
64	915	2-4H 3-ハP発見面	甕	37-30
65	1058	2-4H 3-ハP	甕	37-29
66	1058	2-4H 3-ハP	甕	38-1
67	742	2-4H 3-ロP	甕	38-14
68	742	2-4H 3-ロP	甕	38-15
69	747	2-4H 1-ニP	甕	38-16
70	902	2-4H付近	坏	
71	902	2-4H付近	坏	
72	902	2-4H付近	坏	
73	902	2-4H付近	坏	
74	902	2-4H付近	甕	38-17
75	902	2-4H付近	甕	
76	749	2-5H 3-ホP	坏	

表-3 柱穴出土須臾器一覧 (No2)

番号	注記	出土遺構	器種	挿図
77	746	2-5H 2-ホP		38-19
78	746	2-5H 2-ホP		38-20
79	746	2-5H 1-ハP	坏	38-18
80	903	2-5H 2-ホP	甕	
81	1850	3-14H 南西隅柱穴	甕	38-21
82	1826	3-20H ビット	甕	38-22
83	1826	3-20H ビット	甕	38-23
84	1826	3-20H ビット	甕	38-24
85	740	4-2H P1	身	
86	879	4-2H P1	坏	38-27
87	879	4-2H P1	蓋	38-26
88	1056	4-2H P2	坏	
89	1056	4-2H P2	身	

番号	注記	出土遺構	器種	挿図
90	1057	4-2H P3	坏	
91	875	4-2H P3	甕	
92	877	4-2H P4	甕	
93	876	4-2H P6	蓋	38-28
94	876	4-2H P6	坏	38-30
95	876	4-2H P6	坏	38-31
96	876	4-2H P6	坏	38-29
97	876	4-2H P6	蓋	
98	1834	4-5H P5	器台	38-32
99	1834	4-5H P5	甕	38-33
100	1829	4-8H P3	坏	38-35
101	1827	4-8H P6	甕	38-34
102	1830	4-12H P2	蓋	38-36

表-4 同一個体須臾器の分散状況

(1) 甕 (33図14)

出土遺構	注記	接合関係
3-2Dす1	1202	┌──┐ ├──┤ ├──┤ ├──┤ └──┘
3-2Dす6	1207	
3-4Dす1	1732	
3-4Dす2	1733	
3-4D b 覆土	1736	
3-1J北部	1052	┌──┐ ├──┤ └──┘
3-2J	974	
3-4Dす3	1734	
3-4Dす4	1735	

※接合関係で実線で結んだものは直接接合できるもの。破線で結んだものは同一個体と思われるもの。

(2) 高坏 (33図5)

出土遺構	注記	接合関係
4-仮3Dす2	1822	┌──┐ ├──┤ ├──┤ └──┘
4-仮1D		
4-6Dす2	1379	
4-6Dす3	1394	
3-10Dす5	1559	

(3) 高坏 (33図4)

出土遺構	注記	接合関係
3-10Dす12	1566	┌──┐ ├──┤ ├──┤ └──┘
4-仮1Dす8		
4-仮1Dす6		
4区南半土坑群		
4区南半土坑群		

(4) 甕 (35図14)

出土遺構	注記	接合関係
3-1Jす1	1199	┌──┐ ├──┤ ├──┤ ├──┤ └──┘
3-1Jす4・5・6・7	1208	
3-2Jす覆土	969	
3-2Jす7	1723	
3-4D b 覆土	1736	
3-2J	974	┌──┐ ├──┤ └──┘
3-2Jす13	1722	

(5) 坏蓋 (32図3)

出土遺構	注記	接合関係
4-7Dす1	1788	┌──┐ ├──┤ └──┘
4-7D a	1153	
4-3J覆土	1138	

もので、住居が廃止された後に土坑と同様な使われ方をした結果とみる事ができる。したがって表-4の接合関係の内で竪穴住居跡から出土したものが即座に竪穴住居との関連に係わるものではない。ただし、4-1J出土の甕は床面に密着しており、住居跡の時期を表し得るものと考えられる。

表-5 各遺構その他出土須臾器一覧(表土・攪乱)

番号	注記	出土遺構	器種	押図
1	01	2T表土	身	
2	01	2T表土	坏	
3	01	2T表土	甕	
4	02	古新田表土	甕	
5	04	古新田表土	蓋	
6	04	古新田表土	坏	
7	04	古新田表土	甕	
8	05	古新田表土	坏	
9	05	古新田表土	甕	
10	05	古新田表土	甕	
11	05	古新田表土	坏	
12	05	古新田表土	甕	
13	06	古新田表土	甕	
14	06	古新田表土	甕	
15	07	古新田表土	甕	
16	08	古新田表土	甕	
17	13	古新田表土	甕	
18	16	古新田表土	甕	
19	16	古新田表土	甕	
20	16	古新田表土	甕	
21	16	古新田表土	甕	
22	16	古新田表土	甕	
23	17	古新田表土	身	
24	17	古新田表土	坏	
25	17	古新田表土	身	
26	752	1・2区道路攪乱	甕	
27	752	1・2区道路攪乱	甕	
28	752	1・2区道路攪乱	甕	
29	752	1・2区道路攪乱	甕	
30	861	1・2区道路攪乱	坏	32-18
31	861	1・2区道路攪乱	甕	
32	861	1・2区道路攪乱	甕	
33	861	1・2区道路攪乱	甕	
34	861	1・2区道路攪乱	甕	
35	861	1・2区道路攪乱	甕	
36	861	1・2区道路攪乱	甕	
37	861	1・2区道路攪乱	甕	
38	901	1・2区道路攪乱	甕	

番号	注記	出土遺構	器種	押図
39	901	1・2区道路攪乱	甕	
40	901	1・2区道路攪乱	甕	
41	1147	1・2区道路攪乱	甕	
42	1225	1区東半攪乱	甕	
43	1225	1区東半攪乱	甕	
44	1225	1区東半攪乱	甕	
45	1225	1区東半攪乱	甕	
46	1225	1区東半攪乱	甕	
47	1225	1区東半攪乱	坏	
48	1225	1区東半攪乱	坏	
49	1283	2区表土	身	
50	1841	古新田表土	坏	
51	1841	古新田表土	坏	
52	1841	古新田表土	甕	
53	1841	古新田表土	甕	
54	1841	古新田表土	甕	
55	1841	古新田表土	坏	
56	1841	古新田表土	坏	
57	1841	古新田表土	甕	
58	1841	古新田表土	蓋	
59	1841	古新田表土	甕	
60	1841	古新田表土	坏	
61	1841	古新田表土	坏	
62	1841	古新田表土	坏	
63	1841	古新田表土	坏	
64	1841	古新田表土	身	
65	1841	古新田表土	甕	
66	1841	古新田表土	甕	
67	1841	古新田表土	甕	
68	1841	古新田表土	甕	
69	1841	古新田表土	甕	
70	1841	古新田表土	甕	
71	1841	古新田表土	甕	
72	1841	古新田表土	甕	
73	1841	古新田表土	甕	
74	1841	古新田表土	甕	
75	1841	古新田表土	甕	
76	1841	古新田表土	甕	

表-6 各遺構その他出土須臾器一覧(表土・掘乱・堅穴住居跡)

番号	注記	出土遺構	器種	挿図
77	1841	古新田表土	甕	
78	1841	古新田表土	甕	
79	1841	古新田表土(7C?)	甕	
80	1819	3-3J外東側大溝	甕	
81	1141	4区南半表土	甕	
82	477	4区南半表土	甕	
83	1800	4区表土	坏	
84	1840	4区西側鉄塔脇表土	甕	
85	1843	4区表土	高坏	
86	321	1-1J覆土	坏	
87	321	1-1J覆土	甕	
88	865	1-4J Na4	甕	
89	1530	1-4J覆土	甕	
90	1100	2-1J床直	坏	
91	76	2-2J Na120	甕	
92	82	2-2J Na107	甕	
93	1846	2-2J	甕	
94	1146	2-2J下層	甕	
95	1067	2-3J覆土	坏	
96	1067	2-3J覆土	坏	
97	1067	2-3J覆土	坏	
98	1067	2-3J覆土	鍔口縁	
99	1067	2-3J覆土	甕	
100	321	2-4J覆土	坏	
101	326	2-4J覆土	甕	
102	326	2-4J覆土	坏	
103	755	2-7J上層	坏	
104	755	2-7J上層	甕	
105	755	2-7J上層	坏	
106	755	2-7J上層	坏	
107	755	2-7J上層	甕	
108	755	2-7J上層	甕	
109	755	2-7J上層	甕	
110	1114	2-7J覆土	甕	
111	1052	3-1J北部	甕	
112	1052	3-1J北部	甕	
113	1199	3-1J寸1	甕	
114	1200	3-1J寸2	甕	

番号	注記	出土遺構	器種	挿図
115	974	3-2J	甕	
116	974	3-2J	甕	
117	1853	3-5J Na22		
118	1828	4-1J寸Na?	坏	
119	1123	4-2J覆土	身	
120	971	4-2J覆土	甕	
121	912	4-3J覆土	甕	
122	912	4-3J覆土	甕	
123	1120	4-3J覆土	甕	
124	1120	4-3J覆土	甕	
125	1120	4-3J覆土	甕	
126	1120	4-3J覆土	甕	
127	1118	4-3J覆土	甕	
128	1153	4-3J覆土	坏	
129	1153	4-3J覆土	甕	
130	1153	4-3J覆土	坏	
131	1153	4-3J覆土	坏	
132	1153	4-3J覆土	甕	
133	1121	4-3J南西部覆土	身	
134	912	4-3J覆土	坏	
135	1153	4-3J覆土	坏	
136	1153	4-3J覆土	蓋	
137	1121	4-3J南西部覆土	身	
138	1123	4-3J覆土	坏	
139	1153	4-3J覆土	坏	
140	1153	4-3J覆土	高坏	
141	1153	4-3J覆土	高坏	
142	1153	4-3J覆土	甕	
143	1421	4-3J寸2	甕	
144	1235	1-1D内	甕	
145	48	1-2D覆土	甕	
146	48	1-2D覆土	甕	
147	48	1-2D覆土	甕	
148	48	1-2D覆土	甕	
149	48	1-2D覆土	高坏	
150	48	1-2D覆土	蓋	
151	1541	1-4D	坏	

表-7 各遺構その他出土須臾器一覧(5世紀、土坑)

番号	注記	出土遺構	器種	挿図
152	1816	3-10D中層	身	
153	1816	3-10D中層	坏	
154	1644	3-10D下層	坏	
155	1812	3-10D南側小溝内	高坏	
156	1775	3-13D(7世紀?)	坏	
157	325	4区南半土坑群上層	甕	
158	325	4区南半土坑群上層	甕	
159	1249	3-2D	甕	
160	1249	3-2D	甕	
161	1831	3-20Dす1	高坏	
162	1845	3-4D	甕	
163	1736	3-4D b	甕	
164	1473	3-8Dす1	甕	
165	1556	3-10Dす2	身	
166	1557	3-10Dす3	?	
167	1558	3-10Dす4	甕	
168	1564	3-10Dす10	蓋	
169	1567	3-10Dす13	甕	
170	1569	3-10Dす15	甕	
171	1171	3-10Dす17	甕	
172	1573	3-10Dす19	甕	
173	1574	3-10Dす20	甕	
174	1575	3-10Dす21	坏	
175	1576	3-10DすNo22	坏	
176	1604	3-10Dす23	蓋	
177	1847	3-10Dす24	甕	
178	1839	3-10Dす25	高坏	
179	1818	3-10Dす26	甕	
180	1817	3-10Dす30	施	
181	1645	3-10D上層	坏	32-32
182	1645	3-10D上層	甕口縁	
183	1645	3-10D上層	蓋	
184	1646	3-10D中層	坏	
185	1646	3-10D中層	甕	
186	1646	3-10D中層	坏	
187	1646	3-10D中層	甕	
188	1646	3-10D中層	身	
189	1816	3-10D中層	甕	

番号	注記	出土遺構	器種	挿図
190	325	4区南半土坑群上層	甕	
191	325	4区南半土坑群上層	甕	
192	325	4区南半土坑群上層	把手	
193	325	4区南半土坑群上層	坏	
194	325	4区南半土坑群上層	坏	
195	432	4区南半土坑群	甕	
196	435	4区南半土坑群	甕	
197	437	4区南半土坑群	坏	
198	442	4区南半土坑群	甕	
199	458	4区南半土坑群	坏	
200	460	4区南半土坑群	身	
201	460	4区南半土坑群	甕	
202	461	4区南半土坑群	甕	
203	469	4区南半土坑群	甕	
204	469	4区南半土坑群	甕	
205	478	4区南半土坑群	甕	
206	478	4区南半土坑群	甕	
207	679	4区南半土坑群	甕	
208	902	4区南半土坑群	坏	
209	1800	4区南半土坑群	施	
210	1800	4区南半土坑群	施	
211	1800	4区南半土坑群	甕	
212	1800	4区南半土坑群	甕	
213	1805	4区南半土坑群	高坏	
214	1805	4区南半土坑群	坏	
215	1842	4区南半土坑群	高坏	
216	1842	4区南半土坑群	施	
217	1844	4区南半土坑群	高坏	
218	1320	4区南半土坑群すa	甕	
219	1320	4区南半土坑群すa	甕	
220	470	4区南半土坑群す1	坏	
221	470	4区南半土坑群す1	甕	
222	471	4区南半土坑群す4	甕	
223	475	4区南半土坑群す10	甕	
224	635	4区南半土坑群す13(7c)	甕	
225	603	4区南半土坑群す16	甕	
226	604	4区南半土坑群す17	甕	
227	655	4区南半土坑群す19	甕	

表-8 各遺構その他出土須恵器一覧(5世紀、土坑)

番号	注記	出土遺構	器種	押図
228	605	4区南半土坑群す20	甕	
229	1836	4区南半土坑群す21	甕	
230	1825	4区南半土坑群す22	甕	
231	1824	4区南半土坑群す23	甕	
232	408	4区南半土坑群No24	坏	
233	408	4区南半土坑群す24	甕	
234	408	4区南半土坑群す24	坏	
235	408	4区南半土坑群す24	甕	
236	408	4区南半土坑群No24	甕	
237	408	4区南半土坑群す24	甕	
238	408	4区南半土坑群す24	甕	
239	1811	4区南半土坑群す25	坏	
240	1811	4区南半土坑群す25	甕	
241	1821	4-仮3Dす1	甕	
242	1823	4-仮3Dす3	甕	
243	1322	4-仮9Dす2	甕	
244	1323	4-仮9Dす3	甕	
245	1795	4-仮9D中層	甕	
246	1795	4-仮9D中層	甕	
247	1832	4-仮14Dす1	甕	
248	1832	4-仮14Dす1	甕	
249	1835	4-仮14Dす2	甕	
250	228	4-1D覆土	甕	
251	840	4-1Dす1	甕	
252	393	4-2D上層	甕	
253	474	4-2D表土	身	
254	474	4-2D表土	甕	
255	474	4-2D表土	甕	
256	474	4-2D表土	甕	
257	474	4-2D表土	甕	
258	474	4-2D表土	甕	
259	474	4-2D表土	甕	
260	474	4-2D表土	甕	
261	474	4-2D表土	甕	
262	474	4-2D表土	甕	
263	474	4-2D表土	甕	
264	474	4-2D表土	甕	
265	474	4-2D表土	甕	

番号	注記	出土遺構	器種	押図
266	474	4-2D表土	甕	
267	474	4-2D表土	甕	
268	474	4-2D表土	甕	
269	474	4-2D表土	甕	
270	474	4-2D表土	甕	
271	474	4-2D表土	甕	
272	474	4-2D表土	甕	
273	474	4-2D表土	?	
274	474	4-2D表土	甕	
275	474	4-2D表土	甕	
276	474	4-2D表土	甕	
277	474	4-2D表土	甕	
278	474	4-2D表土	甕	
279	474	4-2D表土	甕	
280	474	4-2D表土	?	
281	474	4-2D表土	甕	
282	474	4-2D表土	甕	
283	474	4-2D表土	身	
284	474	4-2D表土	身	
285	474	4-2D表土	身	
286	474	4-2D表土	身	
287	474	4-2D表土	坏	
288	474	4-2D表土	甕	
289	474	4-2D表土	甕	
290	474	4-2D表土	高坏	
291	474	4-2D表土	甕	
292	474	4-2D表土	甕	
293	474	4-2D表土	甕	
294	474	4-2D表土	甕	
295	474	4-2D表土	甕	
296	474	4-2D表土	甕	
297	474	4-2D表土	甕	
298	474	4-2D表土	甕	
299	474	4-2D表土	甕	
300	474	4-2D表土	甕	
301	474	4-2D表土	甕	
302	474	4-2D表土	甕	
303	474	4-2D表土	甕	

表-9 出土須臾器一覽(5世紀、土坑)

番号	注記	出土遺構	器種	挿図
304	474	4-2D表土	甕	
305	474	4-2D表土	甕	
306	474	4-2D表土	甕	
307	474	4-2D表土	甕	
308	474	4-2D表土	甕	
309	474	4-2D表土	甕	
310	474	4-2D表土	甕	
311	474	4-2D表土	甕	
312	680	4-2D上層	甕	
313	913	4-2D上層	甕	
314	923	4-2D上層	甕	
315	481	4-2D覆土	甕	
316	481	4-2D覆土	甕	
317	481	4-2D覆土	甕	
318	481	4-2D覆土	甕	
319	971	4-2D覆土	坏	
320	230	4-2Dす5	甕	
321	231	4-2Dす6	甕	
322	232	4-2Dす7	甕	
323	233	4-2Dす8	甕	
324	234	4-2Dす9	甕	
325	235	4-2Dす10	甕	
326	236	4-2Dす11	甕	
327	237	4-2Dす12	甕	
328	238	4-2Dす13	甕	
329	239	4-2Dす14	甕	
330	240	4-2Dす15	甕	
331	241	4-2Dす16	甕	
332	242	4-2Dす17	甕	
333	243	4-2Dす18	甕	
334	244	4-2Dす19	甕	
335	246	4-2Dす21	甕	
336	247	4-2Dす22	甕	
337	248	4-2Dす23	甕	
338	278	4-2Dす24	甕	
339	249	4-2Dす24	甕	
340	250	4-2Dす25	甕	
341	513	4-2Dす26	坏	

番号	注記	出土遺構	器種	挿図
342	486	4-2Dす27	甕	
343	486	4-2Dす27	甕	
344	884	4-2Dす29	甕	
345	487	4-2Dす31	甕	
346	488	4-2Dす32	甕	
347	483	4-2Dす33	甕	
348	484	4-2Dす34	甕	
349	489	4-2Dす35	甕	
350	490	4-2Dす36	甕	
351	491	4-2Dす37	甕	
352	678	4-2D	身	
353	1048	4-2D b	甕	
354	833	4-2D b下層	甕	
355	1048	4-2D b下層	坏	
356	855	4-2D南部	坏	
357	855	4-2D南部	甕	
358	855	4-2D南部	甕	
359	855	4-2D南部	甕	
360	972	4-2D外北部	甕	
361	972	4-2D外北部	甕	
362	1125	4-3D上層	甕	
363	1125	4-3D上層	甕	
364	964	4-3D下層	甕	
365	964	4-3D下層	甕	
366	964	4-3D下層	甕	
367	964	4-3D下層	?	
368	964	4-3D下層	甕	
369	964	4-3D下層	甕	
370	964	4-3D下層	身	32-33
371	964	4-3D下層	甕	
372	964	4-3D下層	坏	
373	964	4-3D下層	甕	
374	962	4-3Dす1	甕	
375	918	4-3Dす2	甕	
376	954	4-3Dす25	甕	
377	968	4-3D	身	
378	968	4-3D	高坏	
379	968	4-3D	甕	

表-10 各遺構その他出土須恵器一覧（5世紀、土坑）

番号	注記	出土遺構	器種	押図
380	1125	4-3D覆土	蓋	
381	568	4-4D	坏	
382	568	4-4D	坏	
383	1736	4-4D b覆土	甕	
384	1136	4-4D下層一括	高坏	
385	1316	4-5Dす1	蓋	
386	1137	4-5D覆土	坏	
387	1137	4-5D覆土	蓋	

番号	注記	出土遺構	器種	押図
388	1393	4-6Dす1	甕	
389	836	4-7D覆土	甕	
390	836	4-7D覆土	甕	
391	836	4-7D覆土	身	
392	1851	4-12D Na1	甕	
393	1849	4-12D Na2	甕	
394	1852	4-12D Na3	甕	

6世紀以降の須恵器・陶器の出土状況

6世紀以降の須恵器・陶器は、5世紀時代の遺物に比較すれば極端に少なく、極細片まで含めても70数点が出土したに過ぎない。これらの出土遺構、遺物の状況は表-11に示した。

これらの内には少量ではあるが、遺構の時期を決定する可能性のあるものも含まれている。これは、3-23H、3-7Dなどの出土須恵器である。また、3-10Dからの出土状況は、5世紀の土坑に8世紀の遺構が重複していたのを検出できなかったためである。このほかにも、5世紀の土坑の上層から7世紀以降の遺物が出土した例は多い。これらも遺構の重複あるいは5世紀の遺構内への混入として理解できる。

いずれにせよ、6世紀以降の遺物が少ない点はこの遺跡を理解する上で重要であろう。

表-11 6世紀以降の須恵器・陶器などの出土状況

番号	注記	出土場所	概要	押図
1	無	古新田採集	7世紀後半の坏細片	
2	無	古新田採集	7世紀以降の甕細片	
3	無	古新田採集	7世紀以降の甕破片	
4	無	古新田採集	13世紀の山茶碗(2片)	
5	無	3区採集	7世紀後半の蓋口縁部破片	36-2
6	01	2トレンチ表土	6世紀以降の須恵器片	
7	01	2トレンチ表土	7世紀以降の甕細片	
8	01	2トレンチ表土	7世紀以降の甕細片	
9	01	2トレンチ表土	7世紀以降の甕細片	
10	01	2トレンチ表土	7世紀以降の甕細片	
11	01	2トレンチ表土	13世紀代の山茶碗細片	
12	01	2トレンチ表土	7世紀以降の須恵器細片	
13	04	古新田採集	7世紀以降の須恵器	
14	10	不明	13世紀の山茶碗高台部	
15	325	4区南半土坑群	7世紀以降の須恵器細片	
16	325	4区南半土坑群	7世紀以降の甕体部破片	
17	375	4-2D Na106	7世紀以降の甕体部破片	
18	408	4区 N12 Na28	7世紀後半の蓋破片1/5が残存	36-3

19	408	4区南半土坑群	7世紀以降の甕細片	
20	440	4区南半土坑群	8世紀以降と思われる蓋破片	
21	458	4区南半土坑群	器種不明 7世紀以降と思われる細片	
22	473	4区南半土坑群	7世紀以降の瓶体部破片	
23	474	4-2D表面	7世紀後半の蓋破片	
24	474	4-2D表面	13世紀の山茶碗細片	
25	474	4-2D表面	奈良時代の蓋破片	
26	474	4-2D表面	8世紀以降と思われる甕細片	
27	476	4区N12す14	7世紀以降の甕体部破片	
28	481	4-2D覆土	8世紀後半の蓋口縁部細片	
29	494	4-2Dす150	7世紀代の可能性ある須恵器細片	
30	531	4区南半土坑群	7世紀前半の蓋細片	
31	568	4-4D	器種・時期不明 攪乱内遺物	
32	676	4-2D覆土	7世紀以降の須恵器破片	
33	755	2-2J上層	7世紀以降の須恵器と思われる細片	
34	861	1・2区道路分撈乱	13世紀以降の小皿	
35	861	1・2区道路分撈乱	13世紀以降の小皿	
36	901	1・2区道路分撈乱	7世紀の坏細片	
37	901	1・2区道路分撈乱	器種不明だが底部に糸切りをもつ	
38	901	1・2区道路分撈乱	7世紀以降の蓋細片	
39	901	1・2区道路分撈乱	6世紀以降の甕破片	
40	901	1・2区道路分撈乱	中土陶器細片	
41	901	1・2区道路分撈乱	13世紀山茶碗破片	
42	903	2-5H P2	13世紀の山茶碗破片(遺物の保存状況を見ると、表土内遺物であることから、注記ミスと考えられる。)	
43	964	4-3D下層	時期・器種不明だが7世紀以降であろう。	
44	964	4-3D下層	須恵器破片(5世紀代の可能性もある。)	
45	963	3-2D覆土	8世紀の蓋つまみ破片	36-6
46	974	3-2J	1536と接合できる。	36-1
47	1008	2-1J覆土	7世紀代の坏細片	
48	1125	4-3D覆土上層	灰釉碗破片?	
49	1125	4-3D覆土上層	7世紀後半の蓋細片	
50	1136	4-4D下層一括	灰釉陶器細片	
51	1225	3-9DNa2	8世紀の蓋	36-5
52	1536	3-7Dす1	7世紀後半の蓋破片	
53	1560	3-10Dす2	8世紀の坏 (1645と同一個体) 他に土師器伴出	36-7
54	1561	3-10Dす7	7世紀代の可能性が強い甕破片	
55	1645	3-10D上層	8世紀の坏(古新田1図版60参照)	
56	1645	3-10D上層	7世紀以降の蓋破片	
57	1736	3-4D b 覆土	7世紀以降と思われる。器種不明	
58	1736	3-4D b 覆土	7世紀以降の甕細片	
59	1736	3-4D b 覆土	7世紀以降の須恵器細片	
60	1753	3-12D	7世紀後半以降の瓶細片	
61	1753	3012D	8世紀代と思われる蓋細片	
62	1794	3-5D上層	7世紀以降の瓶細片	

63	1794	3-5D上層	7世紀以降の瓶口頸部破片	
64	1794	3-5D上層	7世紀後半以降の瓶口縁部破片	36-4
65	1800	4区南半土坑群	器種・時期不明	
66	1816	3-10D中層	器種不明だが7世紀後半以降の須恵器破片	
67	1837	3-23H柱穴上面	8世紀代の坏高台部(古新田 I 図版25参照)	36-8
68	1838	2-16D西2mビット内	13世紀の山茶碗(2片)	36-10
69	1841	古新田採集	12世紀以降の山茶碗破片	
70	1841	古新田採集	奈良時代の坏細片	
71	1841	古新田採集	7世紀の坏細片	
72	1841	古新田採集	山茶碗細片	

石製模造品の出土状況

石製模造品は、竪穴住居跡内、土坑内、柱穴内などから出土しているが、量的には土坑内が圧倒的に多い。これらの出土遺構とその数量は表-12に示したが、破片なども多く、実際の数量はこの数以上であろう。

土坑内の出土状況

4-3Dからは2,000個を超える数が出土し、総出土量の80%を越えている。この土坑では、万遍なく出土しているという状況ではあるが、北よりと南よりとの2箇所集中する傾向がある。しかし、局所的な集中や使用時の状況が理解できるような箇所、あるいは置かれた状況などはみられないで、投棄された状況と考えられた。4-3Dと類似した3-2D、3-10D、4-6Dなどからの出土量と比較すると極端に多いのも特徴である。

4区南半の土坑群は、基本的には仮番号の土坑であるが、遺構が錯綜しているために確実に伴う土坑を明確にできないものも多く、一括して4区南半土坑群として取り上げているが、実際には一つの土坑に十数個以上伴うのが通常のものである。4-仮3Dは表では4個出土したことになっているが、平面図と対応した結果では63個が伴うようである。また、西よりの部分には19個の局所的集中がみられる。これらの出土状況は第17・20図などに示してあるので参照して欲しい。

また、3-1・11D、4-1Dなどの小型の土坑での出土量は少ないようである。

竪穴住居跡内の出土状況

竪穴住居内からも一般的な土坑と同程度が出土している。これらの内で、4-3Jは明らかに竪穴の埋積土からの出土であり、土坑と同様な理解をしてよいと思う。同様なことは比較的出土量の多い2-7Jでも指摘できるが、3-1Jの場合には、床面から若干浮いた状況ともいえるが、比較的床面近くから出土していることと、貯蔵穴内からも出土している点から住居に伴うと考えられることも可能である。

掘立柱建物柱穴内の出土状況

2-4・5H、3-1・10・26H、4-4・13Hから出土している。とくに、2-4・5Hからの出土量は多い。

2-5Hに関しては、遺物取り上げの柱穴番号と報告用の整理番号との対応ができなかったために、具体的な位置関係が不明になってしまったが、一つの柱穴から4点出土した例もある。また、2-4Hは、須恵器も他の掘立柱建物と比較すると多量に出土しており注目したいが、土坑の埋土が柱穴の後込めに使われた可能性もあることから、類例の調査が必要と思われる。

その他の出土状況

白玉・勾玉・管玉などの組合せが解る出土状況はなかったが、4-3Dで示されるように、白玉の占める割合が極端に多い特徴があるように思われる。

表-12 各遺構出土石製横造品・玉類の数量

遺構名	白玉	勾玉	管玉	剣	ガラス玉
2-3D	2				
2-7D	1				
2-13D	1				
3-2D	17				
3-3D	2				
3-4D	5				
3-5D	1				1
3-8D	1				
3-9D	2				
3-10D	11	2			
3-18D	1				
3-19D	7				
4-2D	53	1			
4-3D	2243	11	4		1
4-6D	34				
4-7D	1				
4-10D	1				
4-11D	246			1	1
4-12D	1				
4-13D	1				
4-14D	2				
4-15D	2				
4-16D	2				
4-17D	3				
4-18D	1				
4-19D	2				
4-20D	2				
4-21D	3				
4-22D	1				
4-23D	1				
4-24D	1				
4-25D	1				
4-26D	1				
4-27D	1				
4-28D	1				
4-29D	1				
4-30D	1				
4-31D	1				
4-32D	1				
4-33D	1				
4-34D	1				
4-35D	1				
4-36D	1				
4-37D	1				
4-38D	1				
4-39D	1				
4-40D	1				
4-41D	1				
4-42D	1				
4-43D	1				
4-44D	1				
4-45D	1				
4-46D	1				
4-47D	1				
4-48D	1				
4-49D	1				
4-50D	1				
4-51D	1				
4-52D	1				
4-53D	1				
4-54D	1				
4-55D	1				
4-56D	1				
4-57D	1				
4-58D	1				
4-59D	1				
4-60D	1				
4-61D	1				
4-62D	1				
4-63D	1				
4-64D	1				
4-65D	1				
4-66D	1				
4-67D	1				
4-68D	1				
4-69D	1				
4-70D	1				
4-71D	1				
4-72D	1				
4-73D	1				
4-74D	1				
4-75D	1				
4-76D	1				
4-77D	1				
4-78D	1				
4-79D	1				
4-80D	1				
4-81D	1				
4-82D	1				
4-83D	1				
4-84D	1				
4-85D	1				
4-86D	1				
4-87D	1				
4-88D	1				
4-89D	1				
4-90D	1				
4-91D	1				
4-92D	1				
4-93D	1				
4-94D	1				
4-95D	1				
4-96D	1				
4-97D	1				
4-98D	1				
4-99D	1				
4-100D	1				
4-101D	1				
4-102D	1				
4-103D	1				
4-104D	1				
4-105D	1				
4-106D	1				
4-107D	1				
4-108D	1				
4-109D	1				
4-110D	1				
4-111D	1				
4-112D	1				
4-113D	1				
4-114D	1				
4-115D	1				
4-116D	1				
4-117D	1				
4-118D	1				
4-119D	1				
4-120D	1				
4-121D	1				
4-122D	1				
4-123D	1				
4-124D	1				
4-125D	1				
4-126D	1				
4-127D	1				
4-128D	1				
4-129D	1				
4-130D	1				
4-131D	1				
4-132D	1				
4-133D	1				
4-134D	1				
4-135D	1				
4-136D	1				
4-137D	1				
4-138D	1				
4-139D	1				
4-140D	1				
4-141D	1				
4-142D	1				
4-143D	1				
4-144D	1				
4-145D	1				
4-146D	1				
4-147D	1				
4-148D	1				
4-149D	1				
4-150D	1				
4-151D	1				
4-152D	1				
4-153D	1				
4-154D	1				
4-155D	1				
4-156D	1				
4-157D	1				
4-158D	1				
4-159D	1				
4-160D	1				
4-161D	1				
4-162D	1				
4-163D	1				
4-164D	1				
4-165D	1				
4-166D	1				
4-167D	1				
4-168D	1				
4-169D	1				
4-170D	1				
4-171D	1				
4-172D	1				
4-173D	1				
4-174D	1				
4-175D	1				
4-176D	1				
4-177D	1				
4-178D	1				
4-179D	1				
4-180D	1				
4-181D	1				
4-182D	1				
4-183D	1				
4-184D	1				
4-185D	1				
4-186D	1				
4-187D	1				
4-188D	1				
4-189D	1				
4-190D	1				
4-191D	1				
4-192D	1				
4-193D	1				
4-194D	1				
4-195D	1				
4-196D	1				
4-197D	1				
4-198D	1				
4-199D	1				
4-200D	1				
4-201D	1				
4-202D	1				
4-203D	1				
4-204D	1				
4-205D	1				
4-206D	1				
4-207D	1				
4-208D	1				
4-209D	1				
4-210D	1				
4-211D	1				
4-212D	1				
4-213D	1				
4-214D	1				
4-215D	1				
4-216D	1				
4-217D	1				
4-218D	1				
4-219D	1				
4-220D	1				
4-221D	1				
4-222D	1				
4-223D	1				
4-224D	1				
4-225D	1				
4-226D	1				
4-227D	1				
4-228D	1				
4-229D	1				
4-230D	1				
4-231D	1				
4-232D	1				
4-233D	1				
4-234D	1				
4-235D	1				
4-236D	1				
4-237D	1				
4-238D	1				
4-239D	1				
4-240D	1				
4-241D	1				
4-242D	1				
4-243D	1				
4-244D	1				
4-245D	1				
4-246D	1				
4-247D	1				
4-248D	1				
4-249D	1				
4-250D	1				
4-251D	1				
4-252D	1				
4-253D	1				
4-254D	1				
4-255D	1				
4-256D	1				
4-257D	1				
4-258D	1				
4-259D	1				
4-260D	1				
4-261D	1				
4-262D	1				
4-263D	1				
4-264D	1				
4-265D	1				
4-266D	1				
4-267D	1				
4-268D	1				
4-269D	1				
4-270D	1				
4-271D	1				
4-272D	1				
4-273D	1				
4-274D	1				
4-275D	1				
4-276D	1				
4-277D	1				
4-278D	1				
4-279D	1				
4-280D	1				
4-281D	1				
4-282D	1				
4-283D	1				
4-284D	1				
4-285D	1				
4-286D	1				
4-287D	1				
4-288D	1				
4-289D	1				
4-290D	1				
4-291D	1				
4-292D	1				
4-293D	1				
4-294D	1				
4-295D	1				
4-296D	1				
4-297D	1				
4-298D	1				
4-299D	1				
4-300D	1				
4-301D	1				
4-302D	1				
4-303D	1				
4-304D	1				
4-305D	1				
4-306D	1				
4-307D	1				
4-308D	1				
4-309D	1				
4-310D	1				
4-311D	1				
4-312D	1				
4-313D	1				
4-314D	1				
4-315D					

礫 拳大の礫が比較的多く出土している。掘立柱建物跡では、1-1Hと2-4Hの多くの柱穴内から根巻き石が出土し、隅柱穴には柱底下に人頭大の礫（基礎石）が置かれている例が確認されている。土坑内からは、3-4Da、4-2Daや4-仮8Dから、拳大の礫が面的に出土している。これらの礫の多くは、熱を受けて赤化していた。その他、2-4Jからは軽石が出土している。

土製品 3-2・10D、4-3・6Dなどから支脚が出土している。

（2） 出土遺物の概要

古墳時代中期の須恵器

表-2・3・5-10では5世紀代の須恵器の出土位置を整理してあるが、4-2D出土の甕のように同一固体であっても破片別に記したものもあり、個体数は示していない。しかし、5世紀代の破片が500点前後出土しているのは周辺の遺跡には例がない。

これらの概要は「第Ⅵ章（2）」でも記すが、ここでは柱穴出土の須恵器の概要のみを記す。

柱穴内出土須恵器の概要

出土した器種は、甕、坏、高坏、施、器台などがあり、土坑出土の須恵器とはほぼ同じ内容であり、数量の比率も大差ない。

蓋坏（32-7・13・37-2・4・6・9・10・14-20、38-3・18・25・31・35） いずれも細片である。37-9・10などはそれらの中では大型である。なお、体部の破片の中には坏・蓋の区別が付かない例も多いが、これらは坏として扱っている。また、高坏の坏部が含まれている可能性は高い。

蓋の稜は、いずれも鋭く尖って小さい。口縁端部は、わずかに内傾する平坦面を有する例（37-16）、内傾する凹面を有する例（32-7・13、37-20、38-26）、内傾する段を有する例（37-5・33、38-18・25）などがある。38-18は、口縁部から端部に至る間が2段になる特徴を持っている。底部・天井部の笠削りの範囲は2/3以上が一般的と思われるが、37-9は、その範囲が狭い。笠削りの方向は、右回りが圧倒的に多い。

施（37-26・27・31、38-19・20） 19は、口縁部の細片であるが、20と同一個体であろう。口縁端部はやや内傾する凹面を有し、稜の直下には波状文を有する。37-26・27・31は、体部の破片である。いずれも櫛目擬状文を有しているが、27は界線の一方を欠いているのが確実である。

甕（37-1・3・7・8・11-13・21-25・28-30・32、38-1・2・4-17・21-24・33・34）

体部の外面は、平行叩き、あるいは、平行叩きの上から一部カキ目を施す例が多い。37-8・12・21・22-25・29・32・38-2・5・6-10・15などはその典型である。37-1・3・7・8・11などは格子状叩きとなる。また、37-22は、擦り消しが施されている。内面は、同心円叩きを擦り消しにする例が多いが、38-22・23に代表されるように、叩き痕が残る例が多い。また38-33は、細く浅い同心円叩きであるが、擦り消しの痕跡はない。38-34の内面には、棒状工具の沈線が見られる。38-21の内面には、一見笠削り状の部分があるが、実験の結果、乾いた指などで擦るとできることが解った。37-12、38-24は口縁部の破片であるが、5世紀の特徴を良く残している。

器台 5-32は、小破片であるが器台の脚部と考えた。

6世紀以降の須恵器・陶器

6世紀以降と思われる須恵器・陶器の破片は70点強出土している。これらは表-11に示したが、6世紀代の須恵器であることを積極的に指摘できる資料が少ない特徴がある。

第36図はこれらを図化したものであるが、全体に細片が多い。1-4は7世紀後半代の須恵器である。5-9は、奈良時代に属する須恵器である。7は、3-10Dから出土したものであるが、表-11

の55番と同一個体の可能性が高い。奈良時代の遺構は、掘立柱建物3棟以上の他に土坑などもあるが、その割合からみると遺物の量が少ない傾向がある。10は、13世紀代の山茶碗である。これに類した破片は他にも多いが、全て細片である。

表-13 須恵器観察表 (本表掲載分は、原則的には表-5～10には未掲載である。)

種類	押 込 番 号	計 測 値	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	出土遺構・古帳番号・実測番号
蓋	32-1	口径 12.5 器高 4.3 稜径 12.3	口縁部はやや外方に下がり、器高の1/2近くに達する。 口縁端部はわずかに内傾する甘い平坦面を有する。 稜は鋭く小さい。	稜の直上から回転範削りを施し、削りは浅く単位は細かく、波がある。 天井部内面は撫で直し、他は横撫で水引き。 削りの方向は右回り	4-5D、011 付近土坑、4区土坑群南東部 KS325他 M1
蓋	2	口径 13.4 器高 4.5 稜径 13.4	口縁部はほぼ垂直にさがり、端部は内外にやや肥厚する。 端部にはわずかに内傾する凹面を有する。 稜は鋭く尖るが、上下に沈線を伴う。とくに、稜直下の沈線は深い。	範削りは天井部の2/3強で削りの方向は右回りである。 天井部内面は撫で直しで、その周辺には同心円文が残存している。 他は横撫で水引きである。	4-2Dす1 KS251 M5
蓋	3	口径 13.0 器高 4.8 稜径 13.1	口縁部はやや外方に下がり、端部は外方にやや肥厚する。 端部にはほぼ水平な凹面を有する。 稜は鋭く尖る。	範削りは稜の直上から施され削りに波がある。削りの方向は右回りである。 天井部内面は撫で直しだが、一部に直線撫でが見られる。 他は、横撫で水引きである。	4-7Da、 4-3J覆土、 4-7Dす1 KS1138、KS1153 KS1788 M22
蓋	4	口径 11.9 残存高 3.4 稜径 11.9	口縁部はやや外方に下がる。 口縁端部は水平な甘い平坦面を有する。 稜は低くて甘い。	範削りは稜の直上から施す。削りの方向は右回り。 天井部内面は撫で直しだが、一部に直線撫でが見られる。 他は横撫で水引き。	4-2Dす2 KS252 M10
蓋	5	口径 11.8 器高 4.4 稜径 12.2	口縁部は内湾気味に垂直に下がる。 口縁端部は内外に肥厚し、内傾する凹面を有する。 稜は上下を窪めて突出させているが、端部は鋭い。 天井部の器肉が薄い。	範削りは天井部の2/3以上で、頂部にはノタ目が残る。削りの方向は右回りだが、ノタ目の方向は左回り。 天井部内面は撫で直し。 他は横撫で水引き。	KS1-4Jす1・2 M2

蓋	32-6	口径 12.0 器高 4.2 稜径 11.8	口縁部は内弯気味に垂直に下がり、端部は外方に肥厚する。 口縁端部には内傾する凹面を有する。 稜は小さく鋭いが、やや上方に伸びる。	篋削りは2/3程度で削りの下端は稜の様に鋭い。 天井部内面は撫直し。 他は横撫で水引き。 ※ 天井部内面に使用痕がある。	4区南平土坑群 M23
蓋	7	口径 12.0 残存高 3.8 稜径 11.9	口縁部は内弯気味に垂直に下がり、端部は内外にやや肥厚する。 口縁端部には内傾する段に近い凹面を有する。 稜はわずかに突出し、直下に深い沈線に伴う。	篋削りは2/3以上であろう。 内面の横撫で水引き調整が滑らかである。削りの方向は不明である。 ※ 1/8破片からの復元	2-4H3-ニP内 KS740 M32
蓋	8	口径 12.5 器高 4.4 稜径 12.6	口縁部は内弯気味にやや外方に下がり、端部は内外に肥厚するが外側が大きい。 口縁端部には内傾する段を有する。 稜は水平に大きく突出し、端部は鋭い。	篋削りは2/3以上で、削りの単位が狭い。 削りの方向は右回りである。 天井部内面は撫で直し、他は横撫で水引きである。	4-3J覆土 M12
蓋	9	口径 12.6 残存高 3.2 稜径 12.7	口縁部は垂直に下がり端部は内外にやや肥厚する。 口縁端部には内傾する段を有する。 稜の突出はほとんど見られず直下に甘い沈線を有する。	篋削りは不明。 残存部は横撫で水引き調整 ※ 細片からの復元	2-7J付近採集 M31
蓋	10	口径 11.9 残存高 3.9 稜径 12.0	口縁部は垂直に下がり、端部は外面に肥厚する。 口縁端部はやや内傾する平坦面を有する。 稜は鋭く小さい。	篋削りは稜の直上から施されているが削りの方向は不明である。 残存部はすべて横撫で水引きである。 ※ 極細片からの復元	3-10Dす8 KS1562 M63
蓋	11	口径 11.0 残存高 3.1 稜径 11.2	口縁部は内弯気味にやや外方に下がる。 口縁端部はわずかに内傾する平坦面を有する。 稜は小さく鋭い。	篋削りは稜の直上から施され削りの方向は右回りである。 他は横撫で水引きである。 ※ 1/12破片から復元	3-10D中層 KS1646 M59
蓋	12	口径 10.7 残存高 3.6	口縁部はやや外方に下がり、端部は内外にわずかに肥厚する。	篋削りは稜の直上から施されている。削りの方向は左回りである。	3-10Dす11 KS1565

		口径 10.4 残存高 2.7 口径 11.3 口径 11.4	口縁端部は内傾する凹面を有する。 稜は鋭く突出する。	ある。 他は横撫で水引き。 ※ 極小破片から復元	M64
蓋	32-13	口径 11.3 残存高 2.7 口径 11.4	口縁部は垂直に下がる 口縁端部はやや窪む内傾する平坦面を有する。 稜は鋭く突出する。	残存部はすべて横撫で水引き ※ 極細片からの復元	1-23P KS1214 M65
蓋	14	口径 11.0 残存高 3.3 口径 10.9	口縁部は内弯気味にやや外方に下がる。口縁端部は凹面に近い内傾する段を有する。 稜はやや上方に伸び、端部は鋭い。	篋削りは稜の直上から施し、削りの方向は右回りである。 他は横撫で水引き。 ※ 1/10破片から復元	3-10Dす18 KS1572 M58
蓋	15	口径 12.8 残存高 5.2 口径 14.0	口縁部は内方に下がる。口縁端部は内外にやや肥厚し、内傾する段を有する。 稜は水平に伸び鋭く小さい。	篋削りは稜の直上から施し、削りに極端な波がある。 削りの方向は右回り。 天井部内面は撫で直し、他は横撫で水引き。 ※ 休部と口縁部は直接接合できないが、同一個体である。	2-2J Na146 KS162, KS198 M57
蓋	16	口径 残存高 3.0 口径 12.4	口縁部は直下に下がる。口縁端部は欠損。 稜は断面正三角形で鋭い。	篋削りは稜の直上から施し、削りに波がある。 削りの方向は右回り。 ※ 細片からの復元	3-10Dす14 KS1568 M62
蓋	17	口径 残存高 2.5 口径 12.2	稜は細くて鋭いが端部がやや丸い。 ※ 破片は大きい器形を復元できる部分は少ない。	篋削りは天井部の2/3以上である。 天井部内面は撫で直し。他は横撫で水引き。	4-仮9Dす1 KS1321 M54
蓋	18	口径 残存高 2.8 口径 13.2	口縁部はやや外方に下がり、口縁端部は欠損。 稜は鋭く小さい。	篋削りは2/3以上である。 削りの波は見られないが浅い。 削りの方向は右回り。	2-7J上層、1・2区道路掘乱層 KS755, KS861 M56
蓋	19	口径 残存高 1.6 口径 11.1	稜の形態化が目立ち、鈍い稜が僅かに見られる程度。	篋削りは稜の直上から施す。 削りの方向は右回り。 天井部内面は撫で直しで、一部に直線撫でが見られる。 他は横撫で水引き。	4区南半土坑群 KS325 M55

坏	32-20	口径 10.6 器高 4.4 立ち上がり 高 1.9 受部径12.9	立ち上がりは内傾し、器高の 半分近くを占める。 口縁端部は内外に肥厚し、内 傾する段を有する。 受部は水平に伸び、端部はや や丸い。	篦割りは受部直下から施し、 削りの単位は細かい。 削りの方向は右回り。 底部内面は撫で同しだが、カ キアゲ痕が見られる。 他は横撫で水引き。	3-10Dす16 KS1570 M16
坏	21	口径 10.6 器高 4.3 立ち上がり 高 2.0 受部径13.1	立ち上がりは外弯気味に内傾 し、器高の半分近くを占める。 口縁端部は内傾する段を有す る。 受部は浅い沈線を作った後に 下外方に伸び、端部は鈍く尖る。 底部はやや窪む。 作りに稚拙さが目立つ。	篦割りは底部の2/3以上に 達する。 削りの方向は左回り。 底部内面にはノタ目が顕著に 残る。 ※ 受部には他の側面が露着 している。	3-10Dす1 KS1577 M18
坏	22	口径 10.3 器高 4.9 立ち上がり 高 1.6 受部径13.3	立ち上がりは内傾し、口縁端 部は内外からの水引きで丸くお さめられている。 口縁部内面がやや窪む。 受部は水平に伸びる。	篦割りは受部直下から行われ ている。 削りの方向は右回り。 底部内面は不定方向の撫で。	4区北より小ビ ット群 M11
坏	23	口径 11.8 器高 4.4 立ち上がり 高 2.1 受部径12.1	立ち上がりはやや内傾し、S 字状に伸びる。口縁は内外に肥 厚し、端部は内傾する平坦面を 有する。 受部は沈線を有し、水平に伸 び、端部は鋭い。	篦割りは底部の2/3以上に 達するが、篦割りの上からカキ 目を施す。 カキ目の方向は右回り。	1-1J覆土 M3
坏	24	口径 10.8 器高 5.0 立ち上がり 高 1.7 受部径12.8	立ち上がりは内傾し、口縁端 部には内傾する平坦面を有す る。 受部は水平に伸び、端部は鋭 い。	篦割りは底部の2/3以上に 達し、浅い波がある。 削りの方向は右回り。 轆轤成形痕は左回り。	4-2Dす3 KS253 M4
坏	25	口径 11.4 器高 4.6 立ち上がり 高 1.7 受部径13.9	立ち上がりは外弯気味に内傾 し、口縁端部には内傾する凹面 を有する。 受部は水平に伸びた後に下外 方に伸び、端部は丸い感じにな る。	受部直下から底部上半はカキ 目、下半は篦割り。 篦割りの方向は右回り。 底部内面には同心内叩きの痕 跡がある。	4区南半土坑群 M9
坏	26	口径 11.5 器高 4.7 立ち上がり	立ち上がりはS字状に湾曲し ながら内傾し、端部には内傾す る凹面を有する。	篦割りは底部の2/3以上に 達し、削りの単位が鋭い見え る。	4-2Dす4 KS254 M4

		高 1.9 受部径13.3	受部には沈線を有し、水平に伸びる。端部は鋭い。	削りの方向は右回り。	
坏	32-27	口径 10.0 器高 4.8 立ち上がり 高 1.9 受部径12.3	立ち上がりは内傾し、口縁部には内傾する段を有する。受部には浅い沈線を伴い、やや上外方に伸びる。底部外面に寛記号を有する。	寛削りは受部直下から施され削りの単位は大きい。削りの方向は右回り。 ※ 焼き歪みがあるために、口径の復元がやや不正確。	3-10Dす29 KS1713 M17
坏	28	口径 9.9 器高 4.9 立ち上がり 高 1.9 受部径11.9	立ち上がりは内傾するが、下方で屈曲する。口縁には内傾する段を有する。受部はやや上外方に伸び、端部は丸い。	寛削りは底部の2/3以下で、他の例に比較すると少ない。削りの方向は左回り。	4-仮3Dす4 KS1820 M24
坏	29	口径 11.8 残存高 4.6 立ち上がり 高 1.7 受部径13.7	立ち上がりは外反気味に内傾し、口縁部には内傾する段を有する。受部は上外方に伸び、端部は丸い。	寛削りは底部の2/3程度で、他の例に比較して少ない。削りの単位は小さく、強く行われている。削りの方向は左回り。	4-4D下層 KS1135 M19
坏	30	口径 11.8 残存高 4.6 立ち上がり 高 1.7 受部径13.7	立ち上がりはS字状に内傾し口縁部には内傾する段を有する。受部には浅い沈線を伴い、水平に外方に伸びる。端部は鋭い。	残存する範囲には寛削りは見られないことから、削りの範囲は底部の2/3程度であろう。 ※ 1/12の破片からの復元	4-3D下層 KS964 M60
坏	31	口径 10.1 残存高 3.7 立ち上がり 高 1.8 受部径12.0	立ち上がりは内傾し、口縁部には内傾する平坦面を有する。受部は水平に伸び、端部は丸い。	口縁端部内面のバリ取りの跡が一部で沈線状になる。残存する範囲では寛削りは確認できない。 ※ 1/8破片から復元	3-2Dす2 KS1203 M26
坏	32	口径 残存高 2.6 立ち上がり 高 受部径12.4	受部から底部の破片。受部には浅い沈線を伴い、水平に外方に伸びる。端部は丸い。	寛削りは底部の2/3程度である。削りの方向は右回り。	3-10Dす9, 3-10D上層, 3-10Dす35 KS1563,1645, 1667 M61
坏	33	口径 残存高 1.3 立ち上がり 高 受部径	坏の底部であろう。	寛削りの範囲が狭いように思われる。削りの方向は右回り。	4-3D下層 KS964 M53

蓋	33-1	口径 11.8 器高 5.3 梗径 12.3	有蓋高杯の蓋であろう。 口縁部は、S字状に湾曲してほぼ垂直に下がり、摘みを除く器高の1/2以上になる。 端部は内傾する段を有する。 梗は水平に外方に伸び、端部は鋭い。 摘みの中央部は大きく窪む。	篋削りは天井部の2/3程度で他は横撫で水引きである。 削りの方向は右回り。 内面には轆轤成形のノタ目が顕著である。	4-3Jす1 KS142 M20
高杯	2	口径 11.0 残存高 4.7 立ち上がり高 1.7 受部径13.4 基部径 4.2	脚部を欠損した有蓋高杯であろう。 立ち上がりは外反気味に内傾し端部には内傾する甘い平坦面を有す。 受部は平坦にやや上外方に伸びる。	篋削りは2/3程度で、削りの方向は右回り。 他は横撫で水引き。 器肉まで良く還元されている。	3-1Jす2 KS1200 M27
高杯	3	口径 11.1 残存高 4.2 立ち上がり高 1.7 受部径13.4 基部径 4.8	脚部を欠損した有蓋高杯である。 立ち上がりは外反気味に内傾し、端部には内傾する段を有する。 受部は浅くて幅のある沈線に伴い、水平に外方に伸び、端部はやや丸い。	篋削りは受部直下から施されている。 削りの方向は右回り。 他は横撫で水引き。	4区南土坑群す30 KS1809 M21
高杯	4	口径 18.8 器高 11.9 杯部高 6.9 基部径 5.2 脚部高 5.0 脚端径10.5	杯部は半球形を呈し、上1/3の部分に2条の鋭い突帯を巡らす。突帯の下は文様帯となる。文様帯の下界には特別な変化点はない。 口縁部は外傾し、端部は丸い。 文様帯を跨ぐように細い把手が付けられているが、その数は不明である。 脚部には台形の透かし孔が4箇所みられる。 脚端部は外側に肥厚した後、垂直に下がり、端部は丸い。	篋削りは杯部下部に施され、方向は右回り。 孔は篋削りで、内外面のバリは篋削りされている。 把手は粘土紐の貼り付け。 杯部底部内面は不定方向の撫で、他は横撫で水引き。	4区南土坑群 上層 同上す6 同上す8 3-10す12 M41
高杯	5	口径 15.5 器高 11.7 杯部高 6.5 基部径 4.5 脚部高 5.2	杯部は半球形を呈し、上1/3の部分に2状の鋭い突帯を巡らす。突帯の下は文様帯となり、文様帯の下界はわずかに隆帯を意識している。	篋削りは杯部下部に施され、方向は右回り。 孔は篋削りで、内面のバリは放置されている。 他は横撫で水引き。	3-10Dす5 KS1559 4-6Dす2 KS1379 4-6Dす3

		脚端径 9.5	口縁部は外傾し、端部には内傾する段を有する。 脚端部は外側に肥厚した後、垂直に下がり、端部は丸い。	坯部内面には厚い自然釉がみられる。	KS1394 4-仮3Dす2
高 坏	33-6	口径 19.1 器高 14.0 坯部高 7.8 基部径 7.4 脚部高 6.2 脚端径12.1	坯部は半球形を呈し、口縁部は外半気味に上外方に伸びる。 口縁部直下に2条の突帯が走り、突帯の下は文様帯となる。 文様帯の下界は1条の低い突帯が走る。 脚部の4箇所には長方形の透かし孔がある。 脚端部は外方に肥厚して丸い。	坯部の文様帯から下は寛割り、削りの方向は右回り。 孔内外のバリは丁寧に削りされている。 他は横手で水引き。 ※ 復元し得た部分には把手の痕跡は見られないが、本来は把手を持つと考えられる。	4-仮1D・ 仮3D M13
高 坏	7	残存高 4.6 基部径 5.0 脚部高 4.5 脚端径 8.9	脚部の破片。 脚端近くで外半し、端部は下方に肥厚する。端部の丸味は少ない。 孔は3~4であろう。	外面は端部を除いてカキ目が施されている。 孔内面のバリは調整されていない。	4区南半土坑群 KS324 M28
高 坏	8	残存高 3.0 脚端径10.8	脚部の破片。 脚部は下外方に伸び、端部は上下に肥厚し、端面は上下に浅い沈線に伴う突帯が走る。 孔の数は不明。	外面は端部を除いてカキ目が施され、他は横手で水引き。 小破片からの復元	4区南半土坑群 KS1814 M51
高 坏	9	残存高 3.7 基部径 6.3	高坏基部の破片。 透かし孔は3箇所で長方形であろう。		4区採集 M46
高 坏	10	残存高 2.2 基部径 6.1	高坏基部の破片。 透かし孔は4箇所でであろう。	坯部は寛割り、削りの方向は右回り。	4-3D上層 KS964 M53
壺	11	口径 10.0 頸部径 8.6 残存高 5.0	口頸部は直線的に上外方に伸び、口縁端部は丸い。 頸部に小さいが鋭く尖った突帯が走り、口頸部上半に下に沈線に伴う断面三角の突帯が走る。	内外面共に横手で水引き調整。 ※ 直接接合できない2片より復元実測	3-10D撈丸 3-10Dす27 KS1813 KS1815
壺	12	口径 9.2 頸部径 6.2 残存高 4.2	口頸部は内弯気味に上外方に伸び、口縁部は内外から摘み出され、端部は丸い。	外面は横手で水引き調整だが内面は厚い自然釉のために、観察不能である。	3-11D KS1741 KS1742

			口頸部下よりと、中央よりやや上よりに各1条の上下に浅い沈線を伴う突帯が走り、その間に波文が施されている。		KS1745 M43
蛭	33-13	口径 8.7 残存高 3.4	細片のために器種は不明確。 体部はやや内弯気味に上外方に伸び、口縁部は内方に伸びた後に外反する。 口縁端部は薄いが丸い。 体部と口縁部の境に断面三角の2条の突帯が走る。	内外面共に横撫で水引き調整。 ※ 極細片からの復元実測。	4区南半土坑群 KS472 M44
甕	14	口径 17.6 頸部径13.8 器高 28.8	口頸部は外反気味に伸び、端部近くの外面に断面三角の鋭い突帯が1条走る。外面には1条の波文が走る。 口縁端部は上下に肥厚し、外端面は凹面をなす。 体部の最大径は上半にあるが全体として球形である。	体部外面は平行叩きが施され部分的に横撫で調整されているが、不規則である。 体部内面は同心円叩きが浅く残る程度の撫でが施される半すり消しである。 口縁部は横撫で水引き調整である。	3-4Db, 3-2D 3-1J, 3-4D 3-2J KS974, 1202, 1207, 1052, 1732, 1733, 1734, 1735, 173 M49
甕	34-1	口径 21.3 残存高 5.7	口頸部は上外方に伸びた後、わずかに外方に屈曲する。端部近くに低い鋭い断面三角の突帯が1条走る。 口縁端部は上下に肥厚し、外端面は突面をなす。	口縁部外面はカキ目調整が施され、他は横撫で水引き。	KS1-1D M7
甕	2	口径 16.1 頸部径12.5 残存高 4.1	口頸部は外反気味に伸び、端部は上下に肥厚する。外端面は凹面をなす。	内外面共に横撫で水引き。 同一個体と思われる体部破片は、外面格子状叩き、内面半すり消しである。	KS1-1D M8
甕	3	口径 13.8 頸部径10.8 残存高 4.5	口頸部は外反気味に上外方に伸び、端部は上下に肥厚し、外端面は凹面をなす。 口頸部外面には振幅の大きな波文が施される。	波文の下にカキ目風の調整痕がある。 他は横撫で水引き調整	4区西端部採集 KS1833 M30
甕	4	口径 16.5 頸部径12.4 残存高 5.0	口頸部は外反気味に上外方に伸び、口縁端部は上下に肥厚する。外端面は凸面をなす。 口縁端部直下に断面五角形の突帯が1条走る。	内外面共に横撫で水引き調整。	3-2Dす5 3-2Dす4 3-2Dす3 KS1206 KS1205

			口縁端部内面は緩やかな凹面をなす。 口頸部には不規則な波文が施される。		KS1204 M29
要	34-5	口径 15.3 頸部径11.2 残存高14.3	口頸部は上外方に伸び、端部近くの内面だけがわずかに外方に屈曲する。 口縁端部直下に断面三角の突帯が1条走る。 外端部中位と上位に各1条の低い突帯が走り、その間に1条の波文が施される。	体部外面は平行叩きの上から部分的に横撫でが行われているが、肩部付近ではすり消し状になる。 体部内面は丁寧なすり消しである。 口頸部は横撫で水引き。	KS4-1J KS468 M14
大型 壺	6	頸部径 6.2 最大径18.5 残存高12.4	頸部以上は欠失し、直接接合できない破片から体部を復元実測した。 体部上半に波文が施されているが文様帯の界線は明確ではなく、上界だけに浅い沈線が見られる。 最大径は、体部上半にあり、圓球形を呈する。	体部外面中位以上は横撫で調整が施され、下位から底部にかけては撫で回しが行われ、叩き底は全く観察できない。 口頸基部内面には絞り痕が顕著であり、底部近くには巻き上げ痕が見られる。 ※ 同一個体が8片ある。	4区南半土坑群 M50
壺	7	頸部径 5.1 最大径11.5 残存高 8.4	口縁部は欠失。 体部は圓球形で底部がやや尖る。最大径は体部中位にある。 頸部は外反気味に上外方に伸びる。 文様帯は最大径付近を下界として櫛目押圧文が施され、上下の界線が、各1条の浅い沈線である。	体部外面上半は横撫で、中位は横撫でであるが、カキ目縁に見える。下位から底部にかけては撫で回しであるが、平行叩きが残存している。 体部内面は撫で回し。 口頸基部内面は、静止鋭削りが見られる。	4一飯4D M15
器 台	8	口径 32.3 残存高13.1	体部は内弯気味に上外方に伸び、口縁部は屈曲して上外方にのびる。 口縁端部直下に水平に伸びる突帯が1条走る。 屈曲部の直下には強い横撫でによる沈線4条、体部上位には上下に沈線を伴う突帯が2条、体部中位にも同様な突帯が走る。これらの間には波長の長い波文が施されている。	体部中位の突帯から下は浅い鋭削りが施されているが、削りの方向は不明である。 他は横撫で水引き成形。 ※ 小破片からの復元。	4区南半土坑群 KS1820 す4

甕	35-1	口径 22.8 頸部径15.5 残存高 5.2	口頸部は上外方に伸び、口縁端部は外方に屈曲する。端部直下に下向きの突帯が1条走る。口縁端部は上下に稍曲し、外端面は凸面をなす。	口頸部外面はカキ目、他は横撫で水引き。 焼成は良いが、還元が不十分で赤褐色を呈している。 ※ 2と同一個体の可能性が高い。	3-1Jす4,5,6,7 KS1208 M48
甕	2	最大径46.7 残存高16.0	破片の残存量が少ないために実測図化できなかったが、肩の大きく張る大甕であろう。 ※ 1と同一個体の可能性が高い。	体部外面は格子状叩きの上から櫛状工具によるカキ目状の沈線が走る。 頸部付近には叩き目は見られない。 内面は丁寧にすり消しが行われている。	3-2Jす7 3-1Jす4,5,6,7 KS1723 KS1208

土師器の概要

出土した土師器には、古墳時代と奈良時代に属するものがある。奈良時代のものと考えられるものは27-7・8・11などわずかであり、これら以外の多くのものは、古墳時代のものであり、ここではそれらについて、以下に概略を紹介しておきたい。

器種としては、壺、甕、高坏、坏、鉢、小型埴、甌や手捏などがある。

壺については、折り返し口縁で狭頸のもの（28-1）と広頸のもの（30-2、31-3）、有段口縁（22-4、25-1）、単純口縁（29-9、31-1）、長頸壺の口縁（30-3）が出土している。

甕には、台付のものと無台のものがある。前者の例としては、24-9、28-5や29-8があり、28-5はヘラナデによって仕上げられている。24-9はハケメによって仕上げられ、肩部が張り、胴部の形態はS字甕に似ている。後者の例は、一般的であり、おそらく丸底になるものが多いと考えられる。ほとんどは胴部をハケメによって仕上げており、球形胴に近いもの（23-1・2など）と長胴のもの（25-5、27-9など）が認められる。他に、球形胴のものとして、ヘラナデによって仕上げられているものがあり、4-2Dから多く出土している。

高坏については、多量に出土しており、大・中・小型のものがある。大型のものとしては、26-9・10・11、31-2があり、中・小型のものは多数存在し、小型のものは、24-18や30-9・16などのように脚柱部内面に粘土紐の巻き上げ痕を残すなど、粗雑な作りのものがある。

坏部は直線的に開くものが多いが、外弯気味に開くもの（22-9・10）や内弯気味に開くもの（26-7）もある。

脚柱部も坏部と同様に直線的に開くものが多いが、それらの内面は横位にへう整形されているものが多い。外弯気味に開くものは、小型のものに比較的多い。内弯気味に開くものは、4-2D出土例に多く、中型で、比較的脚柱部は高い。これらの内面には、絞り目の痕跡や斜位ナデの整形痕が残り、坏部と脚部の接合痕の突出は、あまり顕著ではない。

坏については、口縁部が内弯気味に開くもの（22-2・7、25-15）と直線的に開くもの（30-10・11）がある。前者と後者の11は比較的似ているが、11は口唇部を面取りしており、細部に違いがある。後者の10は口唇部が外反し、底面が丸いなど、前者とは大きく異なっている。

鉢については、大型のもの（30-12）と小型のもの（29-18）がある。前者は胴部が垂直に立ち上

がり、口縁部で大きく外反し、底面は窪んでいる。

小型埴については、口縁部が長いもの（22-6、28-10・12など）と短いもの（24-13など）があり、長いものの中には、胴部が球形で底部が薄いものや、胴部が扁平で底部が厚いものなどがある。また、29-19のように、底面が窪み、扁平な胴部外面を丁寧にヘラミガキしているものもある。

甔については、底部が多孔のもの（28-16）などが、少なからず出土している。

その他、手捏などの小型の土器が3-10Dから、猪口形、コップ形や小型埴に似た形態のものが出土している。

これらの土師器には、新古の様相が認められ、時間差があるものと考えられる。

古い様相を示すものとしては、狭頸の折り返し口縁壺、ヘラナデ整形された球形胴の甔、脚柱部が内弯気味に開く高埴、口唇部を面取りした埴、球形胴で底部が窪む小型の鉢、底部が多孔の甔、口縁部が比較的長く、胴部が球形胴で、底部が薄い小型埴や底部が窪み、外面は丁寧にヘラミガキされた小型埴などが挙げられる。

比較的新しい様相を示すものとしては、ハケメ整形された長胴の甔や中形で、脚柱部が比較的短く、直線的もしくは外弯する高埴などが挙げられる。また、埴部が内弯する高埴も新しい様相を示すものかもしれない。

以上、出土した土師器の概要を記してきたが、これらのことを、遠構に即して考えると、4-1Dや4-2D出土例などには古い様相が認められ、3-10Dなどには比較的新しい様相が認められる。また、これらの土器群は、おおそ和泉式に併行する時期のものと考えられる。

表-14 土師器観察表

押 図 番 号	出 土 遺 構	器 種	計 測 値	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調 ・ 胎 土	備 考
22-1	1-2Ja (1-6D)	高 埴	底 (11.8)	粘土紐巻き上げ。裾部跳ね上げ。 脚柱部内面紋目。	橙色。精選 橙色粒子○	
22-2	1-4J	埴	底 3.4	口縁部内弯。底面ほぼ平坦。	橙色。精選。 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母○	口縁部同 転実測
22-3	1-4J	甔	口 14.3	長胴。口縁部横ナデ。胴部外面左 →右の順に粗い斜位ハケメ、内面 中位に粗い横位ハケメ。	黄褐色。粗砂◎ 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母△	
22-4	2-2Jb	壺	口 (15.2)	有段口縁。口縁部横ナデ。	橙色。橙色粒子◎	回転実測
22-5	2-2Jb	高 埴	---	脚柱部やや外弯、内面縦位ナデ?	黄褐色。精選。 微細橙色粒子△	
22-6	2-2Jb	小 型 埴	胴 (8.0) 底 2.4	口縁部は強い横ナデ。胴部内面指 ナデ。底部は厚く外面はやや窪む。	黄褐色。精選。 微細黒雲母△	回転実測

22-7	2-10J (2-1P)	坏	口 12.4 底 4.2 高 5.7	口縁部やや内弯。底面やや丸味。	黄橙色。精選 微細橙色粒子◎ 小礫△	
22-8	2-10J (2-1P)	壳	底 4.5	底部は比較的小さい。	棕色。小礫◎ 橙色粒子△ 微細黒雲母○	胴部外面 下半に黒 斑
22-9	2-3Ja	高 坏	口 (16.5)	坏部は直線的に開き、口縁端部は 外反。接合部は突出。	橙色。精選 微細黒雲母△	口縁部回 転実測。 北東部柱 穴出土
22-10	2-3Ja	高 坏	---	坏部は直線的に開く。口縁端部は やや外反。	橙色。精選 微細黒雲母○	北東部柱 穴出土。 上記の下 から出土。
22-11	3-1Jc	壳	口 (14.8)	口縁部は短く、端部は丸い。図示 はしていないが、胴部破片には、 内外面にハケメが認められる。	浅黄橙色 粗砂◎ 微細橙色粒子△	回転実測
22-12	3-1Jc	高 坏	---	坏部中位の縁は明瞭。接合部は突 出。	橙色。精選 微細橙色粒子△ 微細黒雲母△	口縁部回 転実測
22-13	3-1Jc	高 坏	---	接合部はかなり厚い。胴柱部内面 はやや内弯。	橙色。精選 微細橙色粒子○ 微細黒雲母△	一部回転 実測
22-14	3-1Jc	高 坏	---	接合部の突出部は窪む。	橙色。精選 微細黒雲母○	一部回転 実測
22-15	3-5Jc	高 坏	口 15.8	口縁部は直線的に開き、胴柱部は内 弯気味に開く。口縁部内外面は横位 ナデ。胴部外面は縦位の稜の上を横 位ナデ、内面は横位ヘラナデ。	橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母○	精製
23-1	4-1J	壳	口17.6 胴24.1 底 7.0 高25.2	口縁部は「く」字状に外反し、端 部に平坦面を持つ。胴部は球形胴 で、底部は丸味を帯びた平底。外 面は口縁部横ナデ、胴部横位ハケ メ→縦位ハケメ。内面は横位ハケ メ、肩部に指痕痕。	浅黄橙色 粗砂○ 微細橙色粒子○ 微細黒雲母△	胴部外面 中位に煤 付着
23-2	4-1J	壳	口 (16.1)	口縁部は「く」字状に外反し、胴	淡黄色	胴部上半

			副 25.0 高 25.2	部はやや下膨れで底部は丸底。外面は口縁部横ナデ、胴部上半は斜位ハケメ→縦位ハケメ、下半は斜位ハケメ→横位ハケメ、ハケメは右→左順。内面は底部に横位ハケメ。	小礫○ 橙色粒子○	回転実測。 胴部上半 ～底部煤 付着
24-1	1-1D	変	口 18.4	口縁部は「く」字状に外反し、端部はやや尖る。	浅黄橙色 小礫○ 微細黒雲母△	
24-2	1-1D	変	----	口縁部は「く」字状に外反。	浅黄橙色 粗砂○ 黒雲母○石英○ 微細橙色粒子△	回転実測
24-3	1-1D	高 坏	----	内面横位ヘラナデ。	橙色 精選	器外面剥 離
24-4	1-1D	高 坏	----	比較的小型で、脚柱部は直線的に開く。	橙色。精選 微細橙色粒子○	
24-5	1-1D	高 坏	----	底部は大きく開き、脚柱部内面は絞り目→横位ナデ。	橙色 微細橙色粒子△ 微細黒雲母△	
24-6	1-1D	瓶	----	先端部断面形は楕円形。	淡橙色。小礫△ 橙色粒子△ 微細黒雲母△	
24-7	1-2D	変	口 (19.4) 胴 (21.0)	口縁部は「く」字状に開き、端部は大きく外反。胴部はやや長胴。器厚は比較的薄い。	浅黄橙色 微細橙色粒子○ 微細石英○	回転実測
24-8	1-2D	変	口 (14.0) 胴 (21.0)	肩部がやや張っている。器厚は比較的薄い。	橙色。精選 微細橙色粒子○ 微細石英○	回転実測
24-9	3-1D	台 付 変	口 (11.6) 胴 17.0	口縁部は「く」字状に開き、肩部はやや張る。外面は口縁部および胴部にハケメ。内面は口縁部横位ハケメ、胴部は縦位ヘラナデ→横位ヘラナデ。	橙色。精選 微細黒雲母○	口縁部回 転実測。 口縁～胴 部煤付着
24-10	3-1D	変	口 (18.0)	口縁部は「く」字状に開き、端部	橙色。粗砂△	回転実測。

				はやや外反し、丸い。	石英◎	12と同一 個体か？
24-11	3-1 D	台 付 裏	---	外面に粘土紐による補強。裏部内 面にハケメ。	黄橙色。粗砂◎ 微細黒雲母△ 石英○	
24-12	3-1 D	裏	底 5.7	底面は窪んでいる。	橙色。粗砂△ 石英○礫石△	内面に煤 付着。10 と同一個 体？
24-13	3-1 D	小 型 塔	口 (8.2) 胴 (8.4)	口縁部は比較的短く、胴部はあま り張らない。	橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母○ 石英○	回転実測
24-14	3-1 D	小 型 塔	---	底面は丸い。	橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母◎ 石英○	
24-15	3-2 D	裏	口 (13.0)	口縁部は「く」字状に開き、端部 は丸い。	茶色。粗砂○ 石英◎	回転実測
24-16	3-2 D	裏	口 (13.0)	端部はやや尖り気味。	浅黄橙色 石英○粗砂◎	回転実測
24-17	3-2 D	高 坏	---	脚柱部はやや内弯気味に開く。接 合部はわずかに突出。	橙色。精選	
24-18	3-2 D	高 坏	---	粘土紐巻き上げ。脚柱部はやや外 弯気味に開き、内面に絞り目。	橙色。精選 微細橙色粒子◎	一部回転 実測
24-19	3-2 D	高 坏	---	脚柱部はやや外弯気味に開き、内 面は横位へラナデ。接合部の突出 部は押さえ。	橙色。精選 微細橙色粒子△ 微細黒雲母△	回転実測
24-20	3-2 D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開く。	橙色。精選	
24-21	3-2 D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面は横 位へラナデ。接合部は突出。	浅黄橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母△	一部回転 実測

24-22	3-2D	高 坏	---	胸柱部は直線的に開く。	橙色。精選 微細橙色粒子△ 微細黒雲母△	
25-1	3-10D	壺	---	有段口縁。口縁部内外面は横ナ デ。	浅黄橙色 粗砂○ 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母○	回転実測
25-2	3-10D	甕	口 (14.8)	口縁部は厚く、短く外反。肩部内 面に斜位ハケメ。	浅黄橙色 粗砂◎ 橙色粒子◎	回転実測
25-3	3-10D	甕	口 (17.6)	口縁部は「く」字状に開き、端部 は尖る。頸部外面は指頭によるナ デ。口縁部内外面は横ナデ。	淡橙色。精選 微細橙色粒子○ 微細黒雲母○	回転実測
25-4	3-10D	甕	口 (18.0)	口縁部は「く」字状に開き、端部 は尖る。頸部外面は指頭によるナ デ。口縁部内外面は横ナデ。	浅黄橙色。精選 微細黒雲母◎	回転実測
25-5	3-10D	甕	口 16.8 胴 (22.4)	口縁部は垂直気味に立ち上がり、 端部は外反。胴部はやや長胴にな るものと思われる。口縁部内外面 は横ナデ、内面にはハケメも観察 される。胴部外面は斜位ハケメ。	橙色。小礫○ 微細黒雲母△	
25-6	3-10D	甕	口 (16.6)	口縁部は「く」字状に開き、内外 面はハケメ→横ナデ。胴部外面は 右→左順に斜位ハケメ、内面は左 →右順に斜位ハケメ。	橙色。粗砂◎ 微細黒雲母◎	回転実測
25-7	3-10D	甕	---	胴部は比較的張り、外面に斜位ハ ケメ。口縁端部は強い横ナデ。	淡橙色 微細石英◎ 微細橙色粒子△ 灰色粘土粒子◎	回転実測
25-8	3-10D	甕	口 (14.6)	口縁部は「く」字状に開く。	橙色。小礫◎ 橙色粒子○ 微細黒雲母△	回転実測
25-9	3-10D	甕	口 (16.6)	口縁部は「く」字状に開き、端部 は外反。肩部はやや張り、外面は 左→右順に斜位ハケメ。	浅黄橙色 小礫◎ 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母◎	回転実測

25-10	3-10D	変	口 (17.8)	口縁部は「く」字状に開き、端部はやや外反し、内外面は横ナデ。肩部外面はハケメで、下位ハケメは幅広、内面は斜位ヘラナデ。	浅黄橙色 小磯◎ 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母◎	回転実測
25-11	3-10D	変	口 (15.0)	口縁部は「く」字状に開き、端部はやや外反。肩部はやや張っている。	橙色。小磯◎ 橙色粒子○ 微細黒雲母○	回転実測
25-12	3-10D	変	---	口縁部は長く、「く」字状に開き、端部は面取り。	橙色 橙色粒子◎ 黒雲母◎	
25-13	3-10D	一	底 5.0	底面は平坦。	淡橙色。小磯○ 微細黒雲母○	内面煤付着
25-14	3-10D	坏	底 5.2	底面は平坦。	橙色。精選 微細橙色粒子○	
25-15	3-10D	坏	底 4.9	口縁部は内弯して開き、底面は平坦。	橙色。精選 橙色粒子○	
25-16	3-10D	小型 増	胴 8.3 底 2.5	口縁部は垂直気味に立ち上がり、肩部はなだらか。底面は平坦。胴部内面は指頭による斜位ナデ。	浅黄橙色。精選 橙色粒子○ 微細黒雲母△	
25-17	3-10D	手 捏	口 5.8 胴 5.8 底 4.3 高 4.0	胴-口縁部は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦。口縁部内外面は横ナデ。胴部内外面は指頭ナデ。	によう橙色 精選 微細黒雲母◎	
25-18	3-10D	手 捏	口 (5.2) 胴 (8.8)	口縁部は短く垂直気味に立ち上がり、胴部は球形胴。	浅黄橙色。精選 微細黒雲母◎	回転実測
25-19	3-10D	手 捏	口 (8.2) 胴 8.2 底 4.4 高 8.1	口縁部は緩やかに外反し、底面は平坦。	淡橙色。精選	口縁部回転実測
26-1	3-10D	高 坏	口 (14.6)	口縁部は直線的に開き、端部は丸く、内外面は横位ヘラナデ。後部は強いナデ。	橙色。精選 微細黒雲母◎ 微細橙色粒子△	回転実測
26-2	3-10D		---	脚部はやや外弯気味に開き、内面	浅黄橙色。精選	一部回転

		高 坏		は横位ヘラナデ。	微細橙色粒子△ 微細黒雲母◎	実測
26-3	3-10D	高 坏	口 (15.1) 径 11.1 高 11.0	口縁部は直線的に開き、稜部は強くナデられている。脚柱部は直線的に開き、内面は縦位ナデ。	よい橙色 橙色粒子◎ 黒雲母△小粒○	坏部回転 実測
26-4	3-10D	高 坏	口 14.4	口縁部はやや内弯気味に開き、脚部は外弯気味に開く。脚部は粘土紐巻き上げにより成形され、器厚が比較的厚い。	浅黄橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母△	一部回転 実測
26-5	3-10D	高 坏	---	口縁部は直線的に開き、稜部はやや突出している。脚柱部は粘土紐の巻き上げにより成形され、やや外弯気味に開く。	明赤褐色。精選 微細黒雲母◎	一部回転 実測
26-6	3-10D	高 坏	口 (14.6)	口縁部はやや内弯気味に開く。稜部は強いナデ。	橙色。精選 微細黒雲母◎	回転実測
26-7	3-10D	高 坏	口 (14.6)	口縁部は内弯気味に開き、端部は尖る。接合部は突出。	橙色。精選 微細橙色粒子◎	回転実測
26-8	3-10D	高 坏	口 16.4	口縁部は直線的に開き、端部は丸く、坏部は比較的浅い。接合部はわずかに突出。	明赤褐色。精選 微細黒雲母◎	
26-9	3-10D	高 坏	---	比較的大型で、器厚も厚い。口縁部はやや内弯気味に開き、外面は縦位ナデ、内面は斜位ナデ。稜部は横ナデされている。	橙色。精選 微細黒雲母◎	回転実測
26-10	3-10D	高 坏	---	比較的大型で、器厚も厚い。脚柱部は直線的に開き内面は横位ナデ。	橙色。精選 微細黒雲母◎	
26-11	3-10D	高 坏	口 (23.5)	比較的大型で、口縁部はやや内弯気味に開く。脚柱部は直線的に開く。	明赤褐色。精選 微細黒雲母◎	口縁部回 転実測
26-12	3-10D	高 坏	---	脚柱部はやや内弯気味に開き、内面は絞り目。	橙色。精選 微細橙色粒子△ 微細黒雲母△	一部回 転実測
26-13	3-10D	高 坏	径 (10.4)	脚柱部はやや外弯気味に開き、内面は横位ナデ。	浅黄橙色。精選 橙色粒子△	一部回転 実測

					微細黒雲母△	
26-14	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面は横位ヘラナデ。	ふい橙色 微細黒雲母◎	一部回転 実測
26-15	3-10D	高 坏	裾 (9.9)	脚柱部は直線的に開き、内面は横位ヘラナデ。	橙色。精選 橙色粒子△ 微細黒雲母◎	一部回転 実測
26-16	3-10D	高 坏	裾10.0	脚柱部は器厚が厚く、やや内弯気味に開く。裾部は短く開く。	浅黄橙色 小隙◎ 微細橙色粒子△	
26-17	3-10D	高 坏	裾 (11.1)	脚柱部は直線的に開き、内面は横位ヘラナデ。	橙色。精選 微細黒雲母△	一部回転 実測
26-18	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、接合部の突出部は押さえ潰されている。	橙色。精選 微細橙色粒子◎	一部回転 実測
26-19	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、接合部の突出部は押さえ潰されている。	橙色。精選 橙色粒子○	一部回転 実測
26-20	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面は横位ヘラナデ。	浅黄橙色。精選 微細黒雲母◎	一部回転 実測
26-21	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面に絞り目。	橙色。精選 微細黒雲母◎	一部回転 実測
26-22	3-10D	高 坏	---	脚柱部はやや外反気味に開き、内面は縦位ナデ。	浅黄橙色。精選 微細橙色粒子○ 微細黒雲母◎	一部回転 実測
26-23	3-10D	高 坏	---	脚柱部はやや膨らんでおり、内面に絞り目。	橙色。精選 微細黒雲母○	
27-1	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に大きく開き、内面は横位ヘラナデ。	橙色。精選 微細黒雲母◎	
27-2	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に大きく開き、内面は横位ヘラナデ。	橙色。精選 微細黒雲母△	
27-3	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面は絞り目および横位ヘラナデ。	橙色。精選 橙色粒子△ 微細黒雲母◎	

27-4	3-10D	高 坏	---	脚柱部はやや外弯気味に開く。接 合部は突出。	橙色。精選 微細黒雲母◎	
27-5	3-10D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開く。接合部は 突出。	橙色。精選 微細黒雲母△	一部回転 実測
27-6	3-10D	瓶	胴 (23.2)	底部は内弯気味に開き、胴部は垂 直気味に立ち上がる。把手が付 く。	投色。小礫△ 微細投色粒子△ 微細黒雲母△	回転実測
27-7	3-10D	甕	口 (24.0)	口縁部は外弯して開き、端部は内側 に肥厚し、内面には横位ハケメ。	にょい橙色 精選 微細黒雲母◎	回転実測。 外面煤付 着
27-8	3-10D	台 付 甕		接合部外面にハケメ。	橙色。精選 微細黒雲母◎	回転実測。 外面煤付 着
27-9	3-12D	甕	口 15.7 胴 (28.0)	口縁部は「く」字状に開き、端部 は強く横ナデ、胴部は長胴で、外 面は斜位および縦位ハケメ、内面 は横位ナデおよびハケメ。	淡赤褐色 小礫△ 橙色粒子◎ 微細黒雲母△	胴部回転 実測
27-10	3-12D	高 坏	口 (16.2)	口縁部は直線的に開き、稜部は強 くナデられている。接合部は突 出。脚柱部は直線的に開き、内面 は縦位ヘラナデ→横位ヘラナデ。	浅黄橙色。精選 微細黒雲母○	口縁部回 転実測
27-11	3-13D	高 甕	口 (20.9) 裾 11.3 高 8.9	口縁部は内弯気味に開き、端部は 上方へつまみ上げられ、外面はハ ケメ→ミガキ？裾部は端部を強く ナデ、跳ね上がる。脚部外面は横 ナデ、内面には指痕底が残るが、 横位にナデられている。	浅黄褐色 粗砂◎ 微細橙色粒子◎	口縁部回 転実測
28-1	4-1D	壺	口 (18.4)	折り返し縁で、端部は面取りさ れ、内面には弱い稜があり、ハケ メが残る。	浅黄褐色 微細投色粒子△ 微細黒雲母△ 微細石英◎	回転実測
28-2	4-1D	甕	口 (15.2)	口縁部は「く」字状に開き、外面 は強い横ナデ、内面は横位ハケ メ。	橙色 微細橙色粒子○ 微細黒雲母△ 微細石英◎	回転実測

28-3	4-1 D	変	口 (15.6)	口縁部は外反気味に開く。	橙色。粗砂○ 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母○	回転実測
28-4	4-1 D	変	口 (14.8) 胴 (19.2)	口縁部は垂直気味に立ち上がり、 端部は尖り、外面は強い横ナデ。 肩部はやや張り、長胴。	橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母△ 微細石英○	回転実測
28-5	4-1 D	台 付 変	---	変部内外面は下→上、左→右の順 にヘラナデ。接合部は突出。	浅黄橙色 粗砂◎ 微細黒雲母◎ 微細石英○	回転実測
28-6	4-1 D	高 坏	裾 (11.7)	脚柱部は直線的に開き、内面に粘 土紐巻き上げ痕。裾部は短く、水 平に外反。	灰白色。精選 微細橙色粒子◎	裾部回転 実測
28-7	4-1 D	高 坏	---	脚柱部はやや内弯気味に開く。	橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母○	
28-8	4-1 D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、外面は縦 位ヘラミガキ、内面には絞り目。	橙色。精選 微細橙色粒子△ 微細黒雲母○ 微細石英◎	
28-9	4-1 D	高 坏	---	脚柱部は内弯気味に大きく開き、 内面は横位ヘラナデ。	浅黄橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母○	
28-10	4-1 D	小 型 増	口 (7.4) 胴 8.2 高 8.4	口縁部は長く、やや内弯気味に開 く。胴部は肩部がやや張り、球形 胴に近い。底部は丸く、器厚は薄 い。	淡橙色。精選 橙色粒子△	口縁部回 転実測
28-11	4-1 D	小 型 増	胴 7.8	胴部はソロバン玉状。底部は丸 く、器厚は厚い。	浅黄橙色。精選 微細橙色粒子○ 微細黒雲母△ 微細石英◎	
28-12	4-1 D	小 型 増	口 (5.0) 胴 8.4 高 8.2	口縁部は直線的に開き、外面は横 ナデ。胴部は肩部がなだらかで球 形胴に近い。底部は丸く、器厚は 薄い。	浅黄橙色。精選 微細橙色粒子◎	口縁部回 転実測

28-13	4-1 D	—	底 3.8	底面は平坦だが、丸味を帯びている。	橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母◎	
28-14	4-1 D	—	底 (6.0)	底面は平坦。	橙色 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母△ 微細石英○	回転実測
28-15	4-1 D	瓶	口 (22.6) 胴 (25.5)	形態はかなり推定している。胴部は内気味に開き、最大径は胴部上位にある。把手が付き、その接合部は断面四角形。	浅黄橙色 微細石英◎ 小礫 (チャート) ○ 粗砂◎ (輝石)	回転実測
28-16	4-1 D	瓶	底 9.2	底面は上げ底で、木葉痕が観察される。8 個の円孔が穿たれている。	よい橙色 粗砂◎ 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母◎ 微細石英△	
29-1	4-2 Da	高 坏	---	坏部内面はハケメ→ヘラミガキ。接合部はやや突出し、脚柱部は内寄気味に開き、内面に絞り目。	橙色。精選 橙色粒子○ 小礫△	
29-2	4-2 Da	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面は絞り目→横位ヘラナデ? 接合部および坏部内面は突出。	浅黄橙色。精選 橙色粒子○ 微細黒雲母◎	
29-3	4-2 Da	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面に絞り目。坏部は水平気味に開く。	浅黄橙色。精選 微細黒雲母◎	指部回転 実測
29-4	4-2 Da	高 坏	裾 (10.7)	脚柱部は短く直線的に開き、内面は横位ヘラナデ。接合部の突出部は指頭による押さえ。	橙色。精選 微細橙色粒子◎	口縁部回 転実測
29-5	4-2 Da	小 型 罎	口 (7.3) 胴 8.1 底 2.1 高 8.0	口縁部は「く」字状に開き、内外面は横ナデ。肩部はなだらかで、胴部は楕円形、内面は指頭による左→右順のナデ。	浅黄橙色。精選	口縁部回 転実測
29-6	4-2 Da	小 型 罎	胴 8.5 底 2.4	口縁部は「く」字状に開き、胴部は球形胴で、内面は指頭による斜位ナデ。底部は厚く、狭いが平坦面がある。	浅黄橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母△	

29-7	4-2 Da	小型 増	胴 7.7	口縁部は「く」字状に開き、胴部は球形胴に近く、内面は指頭によるナデ。底面は丸い。	橙色。精選 橙色粒子○ 微細黒雲母◎ 微細石英△	
29-8	4-2 Db	台付 変	底 10.3	台部はやや外弯気味に開き、内面は横位ハケメ。	明黄褐色。小礫○ 粗砂◎ 微細黒雲母○	
29-9	4-2 Db	壺	口 13.1	口縁部は直線的に、垂直気味に開く。	橙色。精選 微細黒雲母○	
29-10	4-2 Db	甕	口 15.4	口縁部は「く」字状に開き、端部は内外面横ナデにより外反。胴部は比較的張り、外面はヘラナデ、内面は指頭による成形後、ヘラナデ。	浅黄褐色 橙色粒子○ 微細黒雲母○ 微細石英△	一部回転 実測
29-11	4-2 Db	甕	口 14.5 (19.7)	口縁部は「く」字状に開き、端部は内外面横ナデされ尖る。胴部は球形胴で、内面は横位ナデ。胴部内面は指頭による成形。	浅黄褐色 粗砂○ 微細橙色粒子◎	胴部回転 実測。胴 部外面に 接合着。
29-12	4-2 Db	甕	口 (12.2)	比較的小型。口縁部は「く」字状に開く。胴部は大幅に推定しているが、球形胴になるものと思われ、外面はナデ、内面は斜位ヘラナデ。	橙色。小礫○ 橙色粒子◎ 微細黒雲母◎	回転実測
29-13	4-2 Db	高 坏	裾 (11.1)	脚柱部は短く直線的に開き、内面は横位ヘラナデ。	橙色。精選 微細黒雲母◎	一部回転 実測
29-14	4-2 Db	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面は絞り目。裾部は水平気味に開く。接合部の器厚は厚い。	浅黄褐色 小礫○ 微細黒雲母◎ 微細橙色粒子△	一部回転 実測
29-15	4-2 Db	高 坏	裾 12.0	脚柱部はやや内弯気味に開き、内面に絞り目。	橙色。精選 微細黒雲母◎	
29-16	4-2 Db	高 坏	裾 (12.8)	脚柱部は直線的に開き、内面は指頭によるナデ。	橙色。精選 微細黒雲母○	裾部回転 実測

29-17	4-2 Db	高 坏	裾 13.6	脚柱部はやや内弯気味に開き、内面に縦り目。	橙色。精選	
29-18	4-2 Db	鉢	口 (11.3) 胴 9.8 底 3.3 高 8.1	口縁部は「く」字状に大きく開く。胴部は球形胴で、外面は斜位ヘラナデ、内面は縦位ナデ。底面は窪む。	黄褐色。精選 微細橙色粒子○	一部回転 実測
29-19	4-2 Db	小 型 増	胴 8.0 底 1.6	胴部は最大径が中位にあるやや扁平な球形で、外面は右→左順のヘラナデ、内面は指頭による右→左順のナデ。底面はわずかに窪んでいる。	によい橙色 精選 微細黒雲母○ 橙色粒子○	
30-1	4-3 D	高 坏	裾 (10.0)	脚柱部の器厚はやや厚く、直線的に開く。	浅黄褐色。精選 微細橙色粒子○	裾部回転 実測
30-2	4-6 D	壺	口 (19.0)	口縁部は「く」字状に開き、端部は外反し、折り返されている。	浅黄褐色 粗砂○ 微細橙色粒子○ 微細石英○	回転実測
30-3	4-6 D	壺	口 7.1	口縁部は長く、やや内弯して垂直気味に立ち上がる。肩部は張る。	浅黄褐色。精選 微細橙色粒子○ 微細黒雲母△ 微細石英○	一部回転 実測
30-4	4-6 D	—	底 (7.0)	底面は平坦。	橙色 微細橙色粒子○ 微細石英○	回転実測
30-5	4-6 D	—	底 (4.7)	底面は平坦。	橙色。精選 微細橙色粒子○	回転実測
30-6	4-6 D	高 坏	---	脚柱部はやや内弯気味に少し開き、内面に縦り目。接合部はやや厚い。	浅橙色。精選 微細橙色粒子○ 微細黒雲母○ 微細石英○	一部回転 実測
30-7	4-6 D	高 坏	---	脚柱部は直線的に開き、内面は横位ナデ。	橙色。精選 微細橙色粒子○ 微細黒雲母△	回転実測
30-8	4-6 D	高 坏	---	脚柱部はやや内弯気味に開く。接合部は厚く、内面に粘土を充填。	浅橙色。精選 微細橙色粒子○	回転実測

					微細黒雲母○	
30-9	4-6D	高 坏	---	粘土紐巻き上げ成形。脚柱部は外 弯気味に大きく開く。接合部は突 出。	橙色。精選 微細橙色粒子◎	荷部回転 実測
30-10	4-仮4D	坏	口 (13.2) 高 5.6	口縁部は垂直気味に立ち上がり、 端部は短く外反、外面に軽かなハ ケメ、内面はナデ。体部内面は斜 位ハケメ。底部は丸く、内面は指 頭ナデ。	橙色。精選 橙色粒子△	口縁部回 転実測
30-11	4-仮10D	坏	口 (10.6)	口縁部はやや内弯気味に開き、端 部は面取り。底面はほぼ平坦。	橙色。精選	口縁部回 転実測
30-12	4-仮4D	変	口 (34.0)	口縁部は直線的に開き、内外面は 横ナデ。胴部は垂直気味に立ち上 がり、内面は横位ヘラナデ。	黄褐色 小礫◎ (チャート)	回転実測
30-13	4-仮4D	高 坏	---	坏部は土圧により変形しているも のと思われる。脚柱部は短く、直 線的に開き、器厚は厚い。接合部 は突出。	橙色。精選 橙色粒子◎	
30-14	4-仮13D	高 坏	口 (19.7)	口縁部は外弯気味に開く。	橙色。小礫◎ 橙色粒子◎	回転実測
30-15	4-仮13D	高 坏	---	脚柱部の器厚は厚く、やや内弯気 味に開き、外面は横位ナデ、内面 は上位が横位ヘラナデ、下位が斜 位ナデ。	橙色 橙色粒子○ 微細黒雲母○ 微細石英○	
30-16	4-仮13D	高 坏	---	粘土紐巻き上げ成形。脚柱部は比 較的小型で、やや外弯気味に開 き、内面に絞りH。	橙色。精選 微細橙色粒子◎	
30-17	4-仮13D	小 型 増	胴 8.9 底 3.8	口縁部は垂直気味に立ち上がる。 胴部は球形胴で、内面は右→左順 の斜位ナデ。底面は平坦。	橙色。精選 橙色粒子◎ 微細黒雲母◎	口縁部回 転実測
30-18	4-仮13D	小 型 増	胴 7.8 底 2.5	口縁部はやや外反して開く。胴部 は球形胴で、内面は右→左順の斜 位ナデ。底面は平坦。	にぶい橙色。精選 橙色粒子◎ 微細黒雲母△	口縁部回 転実測
31-1	4-仮13D	壺	口 (16.8)	口縁部は「く」字状に開き、端部	浅黄橙色。精選	回転実測

			胴 (27.4)	は丸く、内外面は横ナデ。胴部は肩部がややならかな球形胴で、内外面はヘラナデ。	微細橙色粒子◎ 微細黒雲母○	
31-2	4-仮19D	高 坏	口 (26.5) 裾 (16.1) 高 19.7	形態は土圧により変形。比較的大型。口縁部はやや内弯気味に開く。接合部はわずかに突出。脚柱部は直線的に開く。	橙色。精選 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母◎	回転実測
31-3	4-仮22D	壺	口 (19.6) 胴 (27.8)	口縁部は折り返され、内面に稜があり、外面は横ナデ、内面は横位ハケメ。胴部は球形胴で、外面は左→右順に斜位ハケメ、内面は斜位ハケメ。	浅黄橙色 微細橙色粒子◎ 微細黒雲母◎	回転実測
31-4	2-11H (1-10P)	高 坏	---	脚柱部は直線的に開く。	橙色。精選 微細黒雲母○	裾部回転 実測
土師器については、器面が磨滅しており、調整痕などは不明な点が多い。例えば、高坏の内面について、横位ヘラナデと記述しているものが多いが、実際にはヘラケズリの可能性もある。						

石製模造品

白玉

白玉は、4-3D出土の例に限ってその計測値を表に示した。また、出土位置の正確な資料から計測値をグラフ化してみた。

これによると、太さは4.5~4.8mmが圧倒的多数を占めている。3.5~4.0mmのやや細身の例と、5.5mm前後のやや太身の例も目立つ。長さは、3.0mmをピークとして、その前後1mmの範囲に収まるものが多い。従って、グラフの観察では、太さ4.8mm、長さ3.0mmのものが典型的な大きさといえる。

長さとも太さの関係を視覚的にみると、長さが太さにほぼ等しい程度になると、長いというイメージを受け、長さの値が大きくなると管玉的なイメージが強くなる。従って、太さの値よりも長さの値の方が大きいものは原則として管玉としたが、穿孔が面側から加えられたものはみられない。

形態的には様々な例がある。

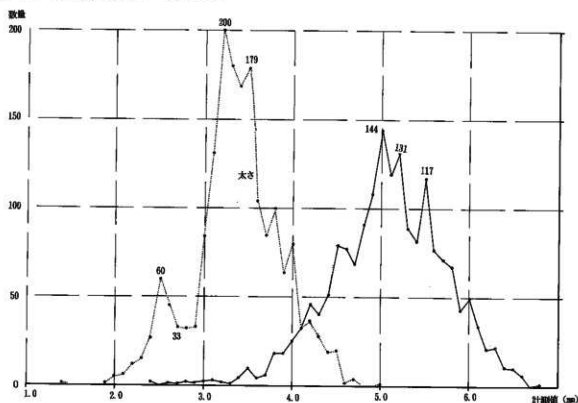
最も多い例は、筒状のものの中央に縦に穿孔されたものであるが、これらの中には、両端を研磨したもの、折らないしは切断したままのものがある。折らないしは切断したと考えられる例の内には、切断痕と思われる擦痕が観察できるものがある。また、折ったのではないと思われる例には、色調に黒味が強くやや硬いものも多く、場合によると片岩質の材質であった可能性がある。

次に多い例が、中央部付近に稜が観察できる環状の断面を呈するものである。この稜は、鮮明ではなく、ここの部分を境にして仕上げの研磨痕の方向が異なっていることから、稜として観察できるものが大半である。また、稜の部分と両端部との径の差は0.1mm程度である。

事例的には少ないが、紡錘車状の断面を呈する例がみられる。この形態は径の小さなものにも観察される。

穿孔は、両側から行っていることが証明できる例がないことから、片側から行われていると考えて

表-16 白玉の計測値(4-3D出土)



いる。また、両端で孔の径が極端に異なった例はない。

勾玉

13点出土している。原則的には白玉の出土量の多い遺構からは勾玉も多いという傾向がみられる。材質は全て滑石であるが、黒味が強くやや硬質のものから灰色に近い軟質のものまであり、色調・硬軟のパラエティーがある。

形態的には4類に大別できる。

- I類 三日月形の袂りのある例(第39図2～7) いずれも扁平で上下端が尖る傾向が強い。
- II類 袂りの部分が少なく直線的な例(第39図8・9) いずれも扁平である。
- III類 袂りの部分がC字状の例(第39図10～13) いずれも扁平である。11は「コ」字状に近い。また、I・II類に比較すると丁寧な造りである。
- IV類 袂りの部分はC字形になり、断面が丸味を持つ例(第39図14) 4-2Dの下層から1点だけ出土した。装身具としての勾玉にもっとも近い形態で、凝灰岩に似た色調であるが、材質が滑石である点と多量の白玉と共伴したことから模造品に含めた。

管玉

白玉は太さに対して長さが等しいかそれ以下のものとしたが、太さよりも長さの方が大きい例が5例みられた。これらは便宜的に管玉としたが、材質は全て滑石であり、製作方法も白玉と同様である。

刻形石製品

4区南半の土坑群から1点だけ出土した。

扁平で木葉状を呈し、基部側に穿孔がみられる。先端部は尖り、刃部は片刃状に研磨されている。

表-16 白玉計測値(4-3 D N o. 1)

番号	長さ	太さ
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7	3.3	4.5
8	3.7	4.8
9		
10		
11	3.1	4.4
12		
13		
14		
15		
16		
17	2.0	5.6
18	1.9	4.1
19		
20		
21	2.3	4.8
22	須恵器	
23	3.1	5.7
24	3.4	4.9
25		
26	3.0	4.3
27	2.4	4.5
28	2.7	4.1
29	1.5	3.8
30	2.0	4.3
31		
32	4.6	4.7
33	2.2	4.1
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40	2.1	4.9

番号	長さ	太さ
41	2.9	4.8
42	4.0	4.9
43		
44	3.5	5.0
45	2.9	3.9
46	3.1	4.8
47		
48		
49	2.3	4.7
50	1.7	5.0
51	3.1	4.5
52	4.0	5.3
53	3.1	4.5
54		
55	3.3	4.6
56		
57		
58	1.7	5.5
59	3.1	4.5
60	3.5	4.5
61	3.2	4.5
62	3.5	5.8
63		
64		
65	1.5	4.2
66	1.2	4.3
67		
68	4.2	5.0
69	3.2	4.6
70	3.3	5.2
71	3.6	3.9
72	3.8	3.9
73	3.0	4.8
74	3.5	4.2
75	2.5	5.1
76	4.2	4.6
77	3.8	4.9
78	3.2	4.7
79	3.4	4.9
80		

番号	長さ	太さ
81	3.3	4.7
82	4.0	4.6
83	3.0	4.8
84	3.4	4.7
85	勾玉	
86	2.8	4.0
87		
88		
89	2.5	3.3
90	2.6	4.3
91	3.0	4.5
92	3.5	3.9
93		
94	3.5	5.1
95	3.0	4.2
96	2.6	4.3
97	3.0	4.4
98	3.2	4.9
99	3.0	5.6
100	1.9	4.0
101	1.7	4.6
102	3.0	4.4
103	3.9	4.5
104	2.8	4.6
105	2.9	5.6
106	3.5	3.6
107	4.4	4.7
108	3.3	4.4
109	3.2	4.6
110	2.4	4.8
111	4.0	4.6
112	3.0	4.7
113	2.4	3.8
114	3.9	4.5
115	4.0	5.0
116	2.5	5.0
117	2.1	4.3
118	2.6	4.4
119	2.9	4.8
120	2.5	4.8

番号	長さ	太さ
121	4.0	4.2
122	3.0	4.9
123	3.4	4.2
124	3.5	5.0
125	3.4	4.9
126	2.1	3.7
127	2.8	5.1
128	3.1	5.5
129	3.9	4.5
130	3.3	4.7
131	2.7	4.4
132	2.9	5.5
133	3.1	4.8
134		
135		
136	2.6	4.8
137	2.0	4.2
138	3.8	4.8
139	2.8	4.7
140	2.4	4.6
141	3.1	5.7
142	3.1	4.6
143	2.8	4.6
144	3.8	4.9
145	3.0	4.5
146	3.5	4.9
147		
148	2.4	5.3
149	2.8	4.6
150	3.0	4.4
151	3.6	5.0
152	4.3	4.8
153	2.7	4.5
154	3.2	5.5
155	2.7	4.7
156	2.4	3.9
157	2.3	5.0
158	3.4	4.5
159	3.0	4.9
160		

表-17 白玉計測値(4-3DN0.2)

番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ
161	2.9	4.7	201	2.9	4.8	241	2.8	5.5	281	3.1	4.7
162	3.8	4.3	202			242			282		
163			203			243	2.8	3.5	283	2.3	3.9
164	3.3	4.3	204	2.9	4.5	244	3.7	4.8	284	3.4	5.4
165	3.5	4.5	205	3.4	4.9	245	2.8	4.7	285	3.0	5.1
166	2.7	4.5	206	2.8	4.4	246	2.7	4.5	286		
167	2.6	5.4	207	4.8	5.0	247	2.5	5.2	287	2.6	4.6
168			208	4.1	4.8	248	3.0	4.9	288	2.9	4.5
169	2.6	4.6	209	3.1	4.8	249	3.0	4.3	289	2.8	4.5
170	2.8	4.6	210			250	3.7	4.9	290	3.0	4.7
171			211	3.6	4.5	251	3.5	4.5	291	3.3	5.0
172	1.8	4.5	212	2.7	5.5	252			292		
173	3.0	4.8	213			253	2.7	4.6	293	2.5	4.1
174	2.7	4.8	214			254	2.4	4.7	294	2.7	4.8
175	3.6	5.0	215	3.0	4.6	255	3.5	4.5	295	1.7	4.8
176	2.8	5.5	216	2.8	4.9	256	2.3	5.0	296	2.9	4.8
177	3.9	4.8	217	2.7	5.7	257	3.0	4.9	297	3.8	4.8
178	2.9	4.6	218	2.3	4.5	258			298	3.0	4.5
179			219			259	3.0	5.5	299	2.5	4.3
180			220			260			300	3.0	5.3
181	3.6	4.8	221	3.1	5.1	261	2.5	4.5	301	2.7	4.1
182	3.3	3.8	222	2.9	4.5	262			302	3.1	5.3
183	4.2	5.1	223	3.0	5.1	263			303	2.4	4.7
184	3.0	4.8	224	3.2	4.7	264	4.4	5.0	304	3.1	5.3
185	3.8	4.6	225	4.0	4.9	265	3.1	6.0	305	3.5	4.5
186	2.3	4.5	226	3.1	4.8	266	3.8	4.2	306	3.6	4.7
187			227	3.8	4.0	267	3.1	5.4	307	2.4	4.7
188	3.7	4.7	228	4.0	4.6	268	3.7	4.9	308	2.6	4.6
189	3.8	4.8	229	2.5	4.5	269	2.4	4.6	309	3.1	4.6
190	3.2	4.8	230	3.5	5.0	270	2.9	5.0	310		
191	3.5	5.5	231	3.6	4.9	271	4.9	5.0	311	3.3	5.5
192	1.4	3.7	232			272	3.4	4.4	312	2.9	4.4
193	2.3	4.8	233	3.8	4.8	273	2.4	5.0	313	3.0	4.6
194	3.5	4.8	234	1.9	4.3	274	3.4	4.7	314	3.0	5.5
195	勾玉		235	2.1	4.8	275	2.9	4.5	315	3.4	4.8
196			236	3.3	4.6	276	2.5	4.7	316	3.1	5.0
197			237	2.4	5.2	277	2.9	4.1	317	3.2	4.9
198			238	3.4	4.9	278	3.3	5.6	318	2.1	4.0
199			239	1.8	4.4	279			319	3.4	5.1
200			240	4.0	4.5	280	2.7	5.5	320	2.2	5.3

表-18 白玉計測値(4-3DN0.3)

番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ
321	3.5	5.0	361	3.7	4.5	401	2.2	4.2	441		
322	3.3	4.0	362			402	3.8	4.6	442		
323	3.0	4.9	363	3.0	4.1	403	3.6	4.7	443	3.6	4.8
324	1.9	5.3	364			404	3.3	4.0	444	2.7	4.2
325	2.4	4.7	365	2.3	4.5	405	3.1	4.8	445		
326			366			406	3.6	4.6	446	3.0	5.6
327	3.2	4.8	367	2.5	4.7	407			447	3.2	4.6
328	3.7	5.0	368	2.0	5.7	408	2.8	4.4	448		
329	2.6	4.1	369			409			449		
330	2.9	4.3	370			410	4.2	5.2	450		
331	1.9	4.0	371	2.2	4.5	411	3.8	4.7	451		
332	2.4	4.5	372			412	3.1	4.7	452	2.9	4.5
333	3.1	4.8	373	2.9	4.5	413	3.1	4.5	453	2.7	4.1
334	1.9	4.5	374	2.3	5.7	414	3.9	4.5	454	3.6	5.2
335	2.5	4.6	375	3.8	4.3	415	3.2	5.5	455		
336	4.2	4.3	376	3.9	4.9	416	3.2	5.3	456	3.2	4.9
337	2.5	4.6	377	2.5	4.9	417	2.8	4.6	457	2.0	3.8
338	2.6	4.7	378			418	3.4	4.7	458	2.7	4.4
339	2.6	4.8	379	勾玉		419	1.9	4.6	459	3.5	5.1
340	2.4	5.3	380	3.8	4.8	420	3.5	4.4	460	2.5	4.6
341	3.7	4.8	381	3.5	4.6	421	3.5	4.2	461	2.0	5.5
342	2.5	4.9	382	3.5	4.8	422	3.2	4.5	462	2.3	4.2
343			383	3.6	4.4	423			463		
344	2.5	4.0	384	3.3	3.4	424	3.1	5.1	464	2.8	4.6
345			385	3.3	5.2	425	3.8	4.3	465	3.5	4.9
346	2.5	4.9	386	4.0	4.7	426			466	2.7	4.2
347	3.8	3.5	387	2.2	4.7	427	3.0	5.0	467	2.9	4.8
348	2.9	5.0	388	3.6	4.8	428	3.2	4.8	468	2.8	4.4
349	2.8	4.8	389	2.4	4.7	429	2.6	4.2	469	1.9	5.4
350	2.6	5.4	390	2.9	4.3	430			470		
351	2.8	4.8	391	3.8	4.7	431	2.5	5.4	471	2.2	4.6
352	3.0	3.9	392	2.7	4.3	432	4.5	5.2	472	2.7	4.5
353	4.5	4.8	393			433	2.3	5.5	473		
354	3.5	4.6	394			434	2.0	4.7	474	2.9	5.5
355	4.0	4.6	395	3.7	5.0	435	1.9	4.5	475	3.2	3.5
356	3.5	4.8	396	3.3	4.2	436			476		
357	3.7	4.9	397	3.6	4.6	437	3.5	5.0	477	2.0	4.7
358	2.7	3.8	398	2.2	4.6	438	2.7	4.0	478	2.8	4.9
359	2.8	4.3	399	2.1	4.7	439	3.5	4.5	479	3.0	4.6
360	2.8	4.9	400	3.6	4.9	440	2.2	4.2	480	3.0	4.8

表-19 白玉計測値(4-3 D N o. 4)

番号	長さ	太さ
481	3.2	4.5
482	4.2	4.9
483		
484	2.3	4.8
485	3.7	4.8
486	3.9	4.5
487	2.8	4.3
488	2.8	4.5
489	2.3	4.6
490	3.2	4.5
491	2.4	4.7
492	2.2	5.2
493	3.5	5.0
494	3.0	4.9
495	3.2	4.7
496	3.1	4.7
497	3.4	3.7
498	3.3	4.7
499	3.0	4.3
500		
501	2.5	4.9
502	4.7	4.7
503	4.1	4.8
504	3.0	4.8
505	3.1	3.9
506	2.5	5.6
507	2.5	4.5
508		
509	2.2	3.8
510	2.6	5.0
511		
512	3.1	4.7
513	3.1	4.0
514	3.3	5.2
515	2.3	4.5
516	3.7	4.8
517	5.0	4.7
518	3.4	4.5
519		
520		

番号	長さ	太さ
521	3.0	4.8
522	2.8	5.5
523	3.6	4.6
524	2.5	4.7
525	3.1	4.7
526	3.5	5.4
527	3.4	4.6
528	2.6	4.5
529	2.6	3.6
530	3.9	4.5
531	3.8	4.0
532		
533	3.1	4.3
534	3.3	3.3
535	3.1	4.6
536	1.9	4.7
537		
538	3.2	4.8
539	3.9	4.6
540	3.0	4.5
541	3.1	4.4
542	2.9	5.1
543	2.4	4.6
544	2.8	4.6
545	2.5	4.1
546	2.3	4.1
547	2.7	5.4
548	2.3	5.0
549	3.8	4.3
550	2.8	5.8
551	3.1	5.4
552	3.2	4.7
553	4.3	4.5
554	2.1	4.9
555	1.7	5.2
556	3.1	4.1
557	2.6	4.3
558	2.8	5.4
559	管玉	
560	2.0	4.8

番号	長さ	太さ
561	2.0	4.4
562	4.5	4.8
563		
564	3.4	4.5
565	1.7	4.3
566	2.6	3.7
567	2.5	3.8
568		
569	3.3	4.7
570	3.1	4.5
571		
572	3.0	4.8
573	4.1	4.5
574	3.0	4.8
575		
576	2.6	4.5
577	1.9	4.8
578	2.9	5.6
579	3.0	4.9
580		
581	3.0	4.1
582	2.4	3.6
583	2.1	4.5
584	3.1	5.4
585	3.0	4.5
586	3.1	4.1
587		
588	2.9	4.7
589	2.8	5.0
590	3.7	4.9
591	3.9	5.0
592	1.8	4.4
593	3.0	4.3
594	3.4	4.9
595	3.1	4.5
596	2.8	4.6
597	1.8	4.7
598	2.9	4.5
599	2.9	4.9
600	3.0	3.9

番号	長さ	太さ
601	4.1	4.4
602	4.1	4.7
603	2.4	4.8
604	3.1	4.5
605	3.6	4.7
606	3.7	4.9
607	2.3	4.8
608		
609	3.3	4.2
610	1.7	4.7
611		
612	3.1	4.7
613	2.1	3.9
614	2.9	4.3
615	3.3	5.2
616	4.1	4.5
617	2.6	4.2
618	3.1	5.1
619	2.3	4.3
620	2.4	5.7
621	4.0	4.7
622	4.8	5.6
623	3.0	5.9
624	2.0	4.4
625	4.5	4.8
626	2.2	4.2
627	4.9	5.0
628	2.9	4.6
629	3.4	4.1
630	2.8	4.5
631	2.5	3.8
632	管玉	
633		
634	2.4	4.1
635	2.5	5.6
636	3.1	4.8
637	3.6	4.9
638	2.5	4.9
639	2.7	4.6
640	3.0	5.1

表-20 白玉計測値(4-3DN0.5)

番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ
641			681	3.0	5.0	721	3.5	4.3	761	2.8	4.7
642	2.8	4.6	682	2.0	4.6	722	2.7	4.4	762	2.6	4.3
643	2.4	4.8	683	2.1	4.4	723	2.3	5.4	763	3.7	4.4
644	2.7	4.4	684	3.3	5.8	724			764	1.8	4.3
645			685	3.1	4.7	725	2.5	5.6	765	2.1	4.2
646	3.6	4.4	686	3.2	4.9	726			766		
647	2.1	5.2	687			727	2.3	5.6	767		
648	1.6	3.7	688	2.2	4.8	728	2.7	4.3	768	2.9	5.2
649	3.3	4.5	689	2.4	4.5	729	2.3	5.6	769	3.0	4.8
650	2.9	4.4	690	2.4	3.5	730	2.5	3.6	770	2.3	3.6
651	3.0	4.9	691	2.8	5.0	731	3.0	4.5	771	3.0	4.6
652	3.5	4.7	692	2.1	4.2	732	2.8	4.4	772	3.1	4.7
653	1.7	3.7	693	4.0	4.8	733	3.9	4.2	773	3.8	4.3
654	4.0	5.8	694	2.4	4.2	734	3.4	5.0	774		
655	3.2	5.8	695	3.0	4.7	735	2.4	3.7	775	2.5	5.3
656	4.2	4.5	696	管玉		736	2.6	4.9	776	3.0	4.6
657	2.6	4.7	697	3.0	5.0	737	3.1	4.5	777	2.8	3.9
658	3.0	4.8	698	3.7	5.5	738	1.5	3.5	778	3.5	4.2
659	3.4	4.3	699	2.8	4.9	739	3.5	4.9	779	2.4	4.6
660	2.6	4.8	700	3.1	4.1	740	2.8	3.8	780	3.4	4.7
661	3.1	4.7	701	2.9	4.7	741	2.8	4.6	781	3.4	5.4
662	2.0	4.1	702	2.8	4.8	742			782	3.2	4.4
663	2.9	4.6	703			743	3.9	5.2	783		
664	2.6	4.6	704	2.8	5.5	744	2.5	4.5	784	2.9	4.5
665			705	2.3	4.8	745	2.1	5.4	785	2.0	4.3
666	2.9	5.0	706	4.5	4.3	746	1.8	4.2	786		
667	2.9	5.7	707	2.3	4.7	747	4.5	5.1	787	2.4	5.6
668	2.9	5.1	708	3.2	4.9	748			788	3.0	4.8
669	1.8	5.6	709	4.1	4.8	749	3.6	4.8	789		
670	2.1	3.9	710	3.5	5.1	750	2.5	4.1	790	3.4	4.6
671			711	2.8	5.6	751			791	2.5	4.1
672	2.5	3.7	712	3.8	5.1	752	3.6	5.0	792	3.0	4.2
673	4.0	4.3	713			753	2.0	4.0	793	3.5	4.8
674	3.0	4.6	714	管玉		754	2.2	4.6	794	2.9	4.6
675	2.4	4.2	715	2.8	4.2	755	2.5	3.8	795	3.7	4.8
676	3.6	4.8	716	2.3	3.5	756	2.5	4.7	796	2.3	4.5
677			717	3.3	4.8	757	2.5	4.4	797	1.9	3.7
678	4.2	5.5	718	3.2	4.9	758	3.3	5.6	798	1.9	4.0
679	3.6	5.0	719	4.3	4.7	759	2.2	5.5	799	3.0	4.8
680	1.7	4.5	720	3.3	4.4	760	2.4	4.0	800	2.9	4.8

表-21 白玉計測値(4-3DN0.6)

番号	長さ	太さ
801	2.3	5.5
802	3.0	3.8
803	2.5	4.5
804	2.8	5.5
805	2.5	5.5
806	2.1	4.4
807	1.5	3.8
808	1.9	4.0
809	2.8	4.6
810	2.3	3.8
811	3.4	4.7
812	3.0	4.9
813	2.0	5.2
814		
815	1.6	4.3
816	2.0	4.0
817	2.6	5.0
818	3.0	4.7
819	2.7	3.9
820	2.4	3.6
821	3.6	4.2
822	3.2	4.9
823	4.3	4.9
824	3.3	4.9
825	2.8	4.5
826	2.5	4.0
827	2.7	4.0
828	2.5	4.4
829	3.1	4.4
830	2.8	5.4
831		
832	5.3	4.9
833	4.2	4.5
834	2.5	4.5
835	3.1	5.0
836	3.2	4.9
837	3.2	5.0
838	3.0	5.5
839	2.6	5.6
840	2.7	3.6

番号	長さ	太さ
841	3.5	4.9
842	3.4	4.7
843	2.9	4.3
844	3.1	4.6
845	3.6	5.0
846	2.9	4.6
847	2.9	5.5
848		
849	4.3	4.9
850	2.5	4.5
851	3.5	4.0
852	2.1	3.8
853	2.2	5.4
854	2.8	5.3
855	3.5	4.7
856	1.6	3.9
857	3.3	4.9
858	2.8	4.3
859	3.3	4.0
860	1.4	4.0
861	2.9	4.7
862	4.0	4.8
863	2.6	4.6
864	2.9	4.8
865	2.2	4.8
866	2.9	4.7
867		
868		
869	2.7	4.9
870	3.0	4.5
871	3.9	4.7
872	3.8	4.5
873	2.2	4.1
874	1.9	4.4
875	3.3	4.7
876	2.6	4.5
877	2.2	4.3
878	3.0	4.7
879	3.4	4.8
880	3.0	4.5

番号	長さ	太さ
881	2.7	4.6
882	1.9	3.9
883	2.8	4.6
884	3.2	4.5
885	2.7	4.5
886	3.2	4.1
887	3.0	5.1
888		
889	3.0	3.6
890	3.1	4.6
891	2.8	4.4
892	1.9	3.8
893	3.4	3.9
894		
895	1.9	4.3
896	2.7	4.9
897	2.8	4.4
898	2.3	4.2
899	3.0	4.7
900	1.9	4.0
901	1.4	3.6
902		
903	3.2	4.2
904	2.2	4.0
905	2.7	4.5
906	2.8	4.7
907	2.4	4.7
908	2.2	5.0
909	3.8	6.0
910	2.5	4.6
911	5.2	4.7
912	2.8	5.6
913	3.9	4.9
914	2.3	4.6
915	3.8	4.6
916	2.8	4.7
917	1.8	4.1
918	2.8	3.3
919	3.1	4.7
920	2.2	4.3

番号	長さ	太さ
921	2.6	4.6
922	1.6	4.0
923	4.0	4.7
924	3.7	4.7
925		
926	3.3	4.2
927	2.1	4.7
928	3.0	4.9
929	2.6	5.4
930	3.0	4.1
931	1.6	5.0
932	2.2	4.8
933	3.4	4.7
934	3.2	4.2
935	2.7	4.2
936	2.9	4.8
937	3.6	4.7
938	2.8	5.5
939	2.7	4.8
940	2.8	5.1
941		
942	3.8	4.8
943	2.7	4.7
944	3.4	4.8
945	2.4	3.8
946	3.2	5.4
947	2.1	5.0
948	3.2	4.9
949	2.4	4.9
950	2.9	3.7
951	2.8	4.4
952	2.9	4.9
953	2.2	4.7
954	2.1	4.8
955	3.2	4.8
956	3.5	4.2
957	2.4	4.7
958	3.2	3.9
959	2.0	4.2
960	3.0	4.5

表-22 白玉計測値(4-3DN0.7)

番号	長さ	太さ
961	3.0	3.8
962	2.9	4.3
963	3.2	4.2
964	3.5	5.0
965	2.9	4.9
966	2.8	4.8
967	3.0	4.6
968	2.8	4.7
969	3.2	4.6
970	2.5	4.6
971	2.6	4.4
972	1.7	4.9
973	2.3	4.5
974	3.2	4.7
975	1.8	4.7
976	4.4	4.0
977	2.1	4.0
978	4.6	4.7
979	3.2	4.5
980	3.1	4.2
981	2.5	4.0
982	2.7	4.8
983	3.0	4.4
984	3.6	4.5
985	2.8	4.2
986	2.4	4.9
987		
988	3.6	4.3
989	2.8	4.8
990	2.5	4.0
991	2.2	4.5
992	2.9	4.9
993	3.0	4.7
994	3.5	4.0
995	3.5	4.6
996	4.1	4.8
997	3.0	4.2
998	3.1	4.1
999	3.9	4.9
1000	2.9	4.2

番号	長さ	太さ
1001	3.4	3.9
1002	4.1	5.4
1003	4.2	5.2
1004	2.8	4.8
1005	3.1	5.1
1006	3.0	4.1
1007	3.7	4.8
1008	3.1	4.5
1009	2.0	4.7
1010	3.1	4.5
1011	2.5	4.5
1012	3.3	4.2
1013	2.2	4.0
1014		
1015	3.7	4.3
1016	2.7	5.1
1017	3.0	4.3
1018	2.6	4.6
1019	3.1	4.7
1020	2.9	3.8
1021	2.9	4.2
1022	3.1	4.7
1023	3.1	4.7
1024	2.9	5.4
1025	3.2	4.6
1026	2.2	5.0
1027	2.9	4.8
1028	2.8	4.9
1029	3.0	4.6
1030	3.1	5.1
1031	2.6	4.0
1032	1.7	4.8
1033	3.9	4.9
1034	3.0	4.5
1035	3.2	4.8
1036	3.0	4.2
1037	2.9	4.4
1038	2.2	4.6
1039	3.1	4.5
1040	1.9	4.0

番号	長さ	太さ
1041	2.3	4.0
1042	3.7	4.6
1043	1.5	4.5
1044	3.0	5.2
1045	5.0	4.7
1046		
1047	2.3	4.8
1048	3.1	5.1
1049	4.8	4.9
1050	4.3	4.2
1051	3.5	4.8
1052	1.7	4.8
1053	2.8	4.5
1054	4.1	4.6
1055		
1056	2.3	4.0
1057	2.5	4.4
1058	3.8	4.2
1059	2.9	4.6
1060	3.8	4.6
1061	4.1	4.9
1062	3.6	4.7
1063	2.5	4.6
1064	3.3	5.3
1065	3.2	5.9
1066	3.3	4.5
1067	3.0	4.7
1068	2.2	4.1
1069	2.6	5.4
1070	3.0	4.9
1071	3.4	5.9
1072	2.4	4.0
1073	3.3	4.8
1074	2.5	4.0
1075	3.4	4.1
1076		
1077	2.9	5.1
1078	2.0	4.4
1079	2.6	4.1
1080	4.1	4.5

番号	長さ	太さ
1081	3.7	4.6
1082	3.3	4.7
1083	1.9	3.9
1084	2.1	5.0
1085	4.5	4.7
1086	2.3	4.7
1087	3.4	4.2
1088		
1089	3.7	4.6
1090	3.1	4.6
1091	4.2	4.9
1092	1.6	4.4
1093	2.9	4.3
1094	3.2	4.7
1095	2.2	5.5
1096	3.5	4.8
1097	3.0	4.5
1098	3.0	4.7
1099	2.3	4.7
1100	2.8	4.6
1101	2.4	4.2
1102	1.6	4.7
1103	2.5	4.5
1104	3.0	4.7
1105	2.0	4.9
1106	2.8	4.2
1107	1.9	5.0
1108	1.6	4.0
1109	2.0	3.5
1110	2.6	4.2
1111	3.6	5.0
1112	2.8	4.7
1113	3.5	4.7
1114	2.2	4.1
1115	3.3	4.8
1116	3.1	5.5
1117	2.4	4.7
1118	2.3	4.6
1119	3.0	5.3
1120	2.3	4.8

表-23 白玉計測値(4-3DN0.8)

番号	長さ	太さ
1121	2.9	4.8
1122	2.7	4.1
1123	2.9	5.3
1124	2.3	4.6
1125	3.4	5.4
1126	2.1	3.5
1127		
1128	1.6	4.2
1129	2.7	4.8
1130	3.0	4.4
1131	2.0	4.0
1132	2.5	4.7
1133	3.5	4.7
1134	2.3	4.5
1135	4.0	4.6
1136	2.1	3.7
1137	1.4	3.5
1138	2.5	4.6
1139	2.6	4.2
1140	3.1	4.6
1141	2.4	5.3
1142	3.4	4.6
1143	2.9	4.9
1144	3.0	5.3
1145	3.0	3.9
1146	3.4	4.5
1147		
1148	5.2	5.0
1149	3.5	4.5
1150	3.4	4.9
1151	3.5	4.5
1152	2.2	3.5
1153	2.5	4.8
1154		
1155	2.6	4.5
1156	2.6	4.6
1157	4.0	5.0
1158	2.2	4.6
1159	3.4	4.6
1160	2.9	5.5

番号	長さ	太さ
1161	2.0	4.2
1162	2.4	4.8
1163	2.1	3.6
1164	4.0	5.0
1165	2.3	4.2
1166	2.5	5.4
1167	3.6	5.2
1168	1.9	5.4
1169	2.8	4.5
1170	4.4	4.3
1171	3.3	4.8
1172		
1173	3.2	5.5
1174	2.5	4.9
1175	2.6	5.4
1176	3.6	4.9
1177	2.2	4.7
1178	2.2	3.7
1179	3.4	4.6
1180	2.8	4.8
1181	3.5	4.0
1182	3.2	3.9
1183	2.7	5.0
1184	3.8	5.0
1185	2.6	4.6
1186	3.2	4.7
1187	4.2	4.8
1188	2.6	4.0
1189	2.5	4.8
1190		
1191		
1192	2.7	3.7
1193	2.6	4.0
1194	3.3	4.6
1195	3.0	4.8
1196	3.0	4.9
1197	1.8	4.2
1198	3.1	6.0
1199	2.8	3.8
1200	2.9	5.3

番号	長さ	太さ
1201	2.7	4.5
1202	3.3	4.7
1203	2.0	4.5
1204	2.3	3.7
1205	3.9	4.2
1206	2.4	4.2
1207	2.4	4.3
1208	2.2	4.7
1209	2.9	4.6
1210		
1211	3.4	4.8
1212	3.4	4.2
1213	2.8	3.7
1214	2.3	5.5
1215	3.2	4.7
1216	3.3	5.2
1217	3.5	4.7
1218	2.9	4.9
1219		
1220	2.3	4.9
1221	2.6	4.4
1222	2.3	4.2
1223	2.8	4.6
1224	3.6	4.8
1225	3.2	4.8
1226	3.1	4.5
1227	2.7	5.4
1228	3.0	4.4
1229	5.4	4.5
1230	3.5	4.1
1231	3.4	5.4
1232	2.7	4.2
1233	2.0	4.2
1234	2.9	5.5
1235	2.7	4.5
1236	2.4	4.0
1237	3.4	4.6
1238	2.8	5.3
1239	3.2	4.8
1240	2.5	4.6

番号	長さ	太さ
1241	2.5	3.9
1242	2.9	5.5
1243	3.5	4.9
1244	3.2	5.0
1245	3.2	4.8
1246	4.6	4.9
1247	2.7	4.5
1248	2.6	4.4
1249	3.4	5.4
1250	3.5	5.5
1251	2.0	5.5
1252	3.1	4.6
1253	2.6	4.1
1254	2.2	4.5
1255	3.2	4.8
1256	3.2	4.2
1257	3.2	4.6
1258	3.2	4.5
1259	2.1	4.5
1260	2.5	5.0
1261	3.6	5.0
1262	2.4	3.7
1263	2.3	4.2
1264	2.8	3.5
1265	2.4	4.8
1266	3.3	4.5
1267	2.5	4.2
1268	銅製品	
1269	3.8	4.5
1270	1.8	5.5
1271	2.7	4.9
1272		
1273	4.0	4.7
1274	2.5	4.3
1275	3.4	4.7
1276	2.0	3.8
1277	2.0	4.7
1278	3.5	5.3
1279	3.1	4.7
1280	2.7	4.0

表-24 白玉計測値(4-3DN0.9)

番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ	番号	長さ	太さ
1281	2.2	4.5	1321	2.8	3.8	1361	3.0	4.6	1401	2.9	4.6
1282	3.2	4.3	1322	2.7	4.7	1362	2.8	4.2	1402	3.2	4.5
1283	2.4	4.1	1323	2.0	4.3	1363	2.4	4.4	1403	2.0	4.2
1284	2.8	5.6	1324	6.6	4.6	1364	3.0	5.2	1404	2.4	4.8
1285	2.5	4.4	1325	3.3	4.6	1365	2.5	4.0	1405	2.1	4.3
1286	2.6	4.3	1326	2.6	4.6	1366	2.9	5.0	1406	2.3	4.9
1287	3.1	4.5	1327	2.6	4.3	1367	2.8	5.1	1407	4.2	4.5
1288	2.1	4.9	1328	2.7	5.6	1368	3.0	5.3	1408	2.2	3.5
1289	2.3	4.7	1329	3.4	4.0	1369	2.5	4.5	1409	2.8	4.2
1290	3.8	4.9	1330	2.3	4.2	1370	2.8	4.1	1410	3.7	4.5
1291	2.4	3.6	1331	2.9	5.0	1371	2.6	4.2	1411	2.7	4.5
1292	2.9	3.6	1332	3.9	4.9	1372	3.2	5.8	1412	2.2	4.3
1293	1.9	4.7	1333	3.1	4.9	1373	2.3	4.5	1413	2.8	4.8
1294	2.4	3.7	1334	2.1	4.1	1374	3.1	4.7	1414	1.7	4.1
1295	3.1	5.7	1335	3.5	4.4	1375	2.9	4.9	1415	3.4	4.3
1296	1.9	4.0	1336			1376	2.9	4.6	1416	3.5	4.1
1297	3.7	3.0	1337	3.9	4.4	1377	2.4	4.1	1417	2.3	4.7
1298	2.5	4.4	1338	3.4	4.5	1378	3.0	4.6	1418	3.5	4.6
1299	3.7	4.4	1339			1379	2.0	4.5	1419	2.3	4.5
1300	3.9	4.4	1340	1.7	3.8	1380	3.7	4.5	1420	3.1	4.6
1301	3.8	4.9	1341	2.1	4.6	1381	1.7	4.1	1421	3.0	4.5
1302	1.6	4.4	1342	2.8	4.4	1382	4.1	4.7	1422	2.7	4.8
1303	3.8	4.2	1343	3.0	5.0	1383	3.5	4.2	1423	3.3	4.8
1304	3.1	4.5	1344	2.8	4.1	1384	3.3	4.2	1424	2.0	4.0
1305	勾玉		1345	2.5	3.6	1385	3.1	4.8	1425	2.5	4.9
1306	2.9	5.2	1346			1386	3.6	4.4	1426	3.1	5.7
1307	2.5	4.8	1347	3.9	5.6	1387	2.4	5.7	1427	2.5	4.2
1308	2.9	5.0	1348	2.5	4.0	1388	3.6	4.8	1428	3.8	4.4
1309	3.7	4.8	1349	2.1	4.8	1389	2.5	4.9	1429	2.7	4.4
1310	3.1	4.6	1350	3.4	5.3	1390	2.8	4.9	1430	1.9	4.9
1311	2.8	5.8	1351	2.7	4.1	1391	2.5	4.8	1431	3.7	4.4
1312			1352	2.7	4.3	1392	2.5	4.4	1432	3.8	5.3
1313			1353	2.0	3.9	1393	3.2	4.8	1433	2.9	4.7
1314			1354	3.8	4.5	1394	3.4	4.0	1434	2.4	4.1
1315	2.6	4.9	1355	3.1	4.8	1395	1.9	3.7	1435	2.2	4.5
1316	2.4	4.0	1356	2.1	5.4	1396	2.9	4.5	1436	3.2	4.2
1317	3.9	4.5	1357	1.5	3.8	1397	3.8	5.4	1437	3.1	4.8
1318	2.5	3.8	1358	3.1	4.8	1398	2.1	4.5	1438	2.8	4.4
1319	2.9	4.5	1359	3.5	5.8	1399	3.5	5.8	1439	3.0	4.8
1320	2.5	5.1	1360	2.5	4.0	1400	2.8	4.3	1440	3.3	4.8

表-25 白玉計測値(4-3 D N O.10)

番号	長さ	太さ
1441	2.8	4.4
1442	3.3	4.5
1443	2.9	4.4
1444	2.5	4.1
1445	1.8	4.7
1446	3.2	4.6
1447	勾玉	
1448	2.4	3.6
1449	2.8	5.3
1450	3.4	4.4
1451	5.2	4.6
1452	3.4	5.2
1453	3.7	4.2
1454	2.5	5.1
1455	2.9	5.0
1456	3.4	4.7
1457	2.9	4.3
1458	1.9	4.3
1459	3.1	4.8
1460	3.5	5.9
1461	2.5	6.1
1462	1.8	4.9
1463	3.2	4.8
1464	2.1	3.8
1465	3.1	4.2
1466	3.8	4.3
1467	3.2	4.5
1468	2.5	4.8
1469	2.2	4.5
1470	3.5	4.7
1471	2.6	4.7
1472	2.1	4.1
1473		
1474	3.0	4.9
1475	2.9	4.3
1476	3.8	4.4
1477	3.5	5.0
1478	3.6	5.5
1479	4.1	4.7
1480	3.8	4.7

番号	長さ	太さ
1481	3.4	4.6
1482	3.2	4.4
1483	勾玉	
1484	3.3	4.9
1485	2.8	4.5
1486	2.8	4.7
1487	2.5	5.5
1488	3.3	4.9
1489	3.6	4.9
1490	3.0	4.7
1491	3.5	5.5
1492		
1493	2.8	5.5
1494	2.4	5.2
1495	3.7	4.9
1496	2.2	4.4
1497	1.8	4.8
1498	3.3	5.4
1499	2.0	5.6
1500	2.8	5.4
1501	3.3	4.6
1502	2.8	5.0
1503	3.9	4.8
1504	3.4	4.8
1505	2.8	4.6
1506	2.3	4.1
1507	2.6	4.0
1508	3.0	5.6
1509	5.6	4.6
1510	3.0	4.6
1511	3.0	4.7
1512	2.8	4.6
1513	3.0	4.7
1514	3.9	5.0
1515	2.3	4.5
1516	2.9	3.9
1517	3.2	3.8
1518	2.4	4.2
1519	2.0	4.8
1520	2.2	4.4

番号	長さ	太さ
1521	3.2	4.4
1522	2.6	4.6
1523	2.3	3.5
1524	3.3	4.7
1525	2.7	4.7
1526	3.7	5.9
1527	3.1	5.7
1528	2.8	3.6
1529	2.7	4.2
1530	2.5	4.8
1531	2.8	3.5
1532	2.9	4.8
1533	2.9	4.0
1534	2.3	4.0
1535	3.6	5.4
1536	2.5	4.7
1537	3.0	3.6
1538	2.0	3.7
1539	1.9	4.1
1540	2.5	4.0
1541	2.6	4.1
1542	3.4	4.9
1543	勾玉	
1544	3.0	4.6
1545	2.9	4.7
1546	2.6	4.2
1547	2.0	4.7
1548	2.4	4.8
1549	2.2	4.2
1550	3.3	5.5
1551	4.1	5.7
1552	3.3	4.9
1553	1.8	4.0
1554	2.6	5.0
1555	1.7	3.9
1556	2.6	4.1
1557	3.5	4.6
1558		
1559	1.9	5.5
1560	2.8	4.3

番号	長さ	太さ
1561	3.3	5.7
1562	2.5	4.7
1563		
1564	2.3	4.6
1565	2.9	4.0
1566	3.0	5.0
1567	2.2	4.2
1568	3.2	4.9
1569	3.4	4.9
1570	2.2	4.1
1571	2.4	4.5
1572	5.1	4.8
1573	2.5	4.8
1574	1.7	4.3
1575	3.3	5.0
1576	2.0	5.5
1577	2.7	4.8
1578	1.6	5.0
1579	4.1	4.7
1580	2.3	4.1
1581		
1582	2.7	5.4
1583	3.7	5.0
1584	勾玉	
1585	2.9	4.9
1586		
1587	2.7	4.0
1588	3.4	4.8
1589	4.2	4.0
1590	3.9	4.0
1591	3.0	4.0
1592	3.1	4.4
1593	2.7	3.6
1594	2.4	4.4
1595	3.0	4.9
1596	2.2	5.2
1597	2.8	4.0
1598	1.8	5.7
1599	3.4	4.7
1600	3.0	4.6

表-26 白玉計測値(4-3 D N o. 11)

番号	長さ	太さ
1601	3.0	4.8
1602	2.7	5.6
1603	2.2	4.8
1604	1.8	3.5
1605	2.6	3.9
1606	2.2	4.8
1607	2.1	3.9
1608	3.6	4.7
1609	3.1	4.4
1610	2.9	5.2
1611	3.1	5.0
1612	3.6	5.5
1613	3.4	4.8
1614	3.5	5.3
1615	2.5	4.8
1616	2.8	4.7
1617	2.5	4.7
1618	2.8	4.6
1619	2.0	3.8
1620	2.7	4.8
1621	1.7	4.4
1622	3.6	4.8
1623	2.6	4.8
1624	2.8	4.3
1625	3.2	4.3
1626	2.9	5.5
1627	2.2	4.0
1628	2.8	4.9
1629	2.8	4.2
1630	1.8	3.3
1631	2.7	5.3
1632	2.5	5.4
1633	2.6	5.0
1634	2.9	3.5
1635	2.5	5.3
1636	3.5	4.5
1637	3.5	5.1
1638	2.8	4.0
1639	1.9	4.8
1640	2.4	4.5

番号	長さ	太さ
1641	2.7	4.2
1642	3.5	4.0
1643	2.9	4.0
1644	3.3	4.2
1645	2.5	5.7
1646	3.3	4.5
1647	3.2	4.5
1648	3.0	4.8
1649	2.2	4.0
1650		
1651	3.4	4.8
1652	3.6	4.6
1653	2.7	4.6
1654	2.9	4.4
1655	2.0	5.3
1656	2.8	3.9
1657	3.8	4.4
1658	3.9	4.6
1659	3.2	4.5
1660	1.8	4.8
1661	3.9	4.0
1662	2.3	4.8
1663	2.6	4.3
1664	3.8	5.9
1665	2.7	4.9
1666	3.0	5.0
1667	1.9	3.8
1668	3.0	4.7
1669	2.9	4.9
1670	3.6	4.9
1671	2.6	4.9
1672	2.8	4.4
1673	2.5	4.7
1674	3.0	4.7
1675	3.4	4.6
1676	3.5	4.8
1677	2.3	4.6
1678		
1679		
1680	2.0	5.5

番号	長さ	太さ
1681		
1682	3.2	4.8
1683	2.5	4.1
1684	4.5	4.3
1685	2.4	4.5
1686	2.1	4.4
1687	4.2	4.4
1688	3.5	4.9
1689	2.4	4.3
1690		
1691	3.2	5.1
1692	2.0	4.4
1693	2.7	4.3
1694	2.4	3.8
1695	3.2	4.9
1696	2.9	4.4
1697	3.6	4.7
1698	2.2	3.7
1699	3.2	4.9
1700	1.4	5.6
1701	2.2	4.0
1702	2.7	4.0
1703	3.2	5.2
1704	2.3	4.3
1705	3.1	4.7
1706	2.4	4.1
1707	2.5	3.8
1708	3.0	4.2
1709	3.3	4.6
1710	2.9	3.9
1711	3.6	5.5
1712	2.3	4.1
1713	3.1	5.5
1714	2.4	5.0
1715	2.6	4.5
1716	2.7	3.6
1717	2.5	3.8
1718	3.0	5.0
1719	3.6	4.4
1720	2.8	4.8

番号	長さ	太さ
1721	2.9	4.3
1722	3.5	4.9
1723	2.5	5.0
1724		
1725		
1726		
1727	3.0	4.1
1728	2.5	3.7
1729	3.0	4.8
1730		
1731	3.0	5.6
1732	3.5	4.8
1733	2.3	4.5
1734	2.6	5.5
1735	2.8	3.8
1736	2.7	4.1
1737	3.7	5.0
1738	2.9	4.9
1739	2.8	4.3
1740	2.5	5.5
1741	3.9	4.4
1742	2.9	4.9
1743		
1744	2.4	4.2
1745	3.0	4.6
1746		
1747	2.7	4.4
1748	3.7	4.5
1749		
1750	3.1	4.2
1751	2.3	5.0
1752	3.8	4.3
1753	1.9	5.5
1754	2.0	4.8
1755	2.4	4.0
1756	2.3	5.3
1757	5.6	4.5
1758	2.3	4.7
1759	2.5	3.5
1760	2.6	4.2

表-27 白玉計測値(4-3 D N o. 12)

番号	長さ	太さ
1761	3.2	4.6
1762	2.9	3.8
1763	2.6	4.9
1764	3.2	4.7
1765	2.2	3.7
1766	2.9	4.5
1767	2.9	4.9
1768	2.1	4.6
1769	2.2	4.9
1770	4.0	5.4
1771	3.1	4.8
1772	2.2	3.9
1773	2.7	4.9
1774	3.9	5.5
1775	2.4	4.8
1776	2.3	3.5
1777	2.9	5.8
1778	3.2	4.5
1779	2.6	4.2
1780	2.0	4.5
1781	3.5	4.7
1782	2.4	4.4
1783	3.2	4.6
1784	2.6	5.1
1785	3.4	4.7
1786	2.2	4.0
1787	3.2	4.7
1788	3.0	4.2
1789	3.0	4.1
1790	2.6	4.6
1791	3.3	4.9
1792	3.9	4.8
1793	2.0	4.2
1794	2.5	4.2
1795	3.0	5.3
1796	3.5	4.8
1797	3.9	4.6
1798	3.5	5.0
1799	2.0	5.8
1800	2.8	4.9

番号	長さ	太さ
1801	2.8	4.9
1802	勾玉	
1803	2.0	5.5
1804	勾玉	
1805	2.5	4.8
1806		
1807	3.7	4.8
1808	3.4	4.7
1809		
1810	3.1	4.5
1811	4.1	4.6
1812	4.2	6.0
1813	2.7	4.4
1814	2.5	3.8
1815	2.2	4.6
1816	2.6	5.2
1817	4.0	4.5
1818	3.0	4.7
1819	3.4	4.5
1820		
1821	3.1	4.4
1822		
1823	1.7	3.7
1824	2.8	4.4
1825	2.8	4.4
1826	3.1	5.0
1827	2.8	5.1
1828	4.5	4.6
1829	2.5	4.6
1830	3.5	5.6
1831	2.9	5.4
1832	2.8	4.7
1833	2.6	4.4
1834	1.5	4.0
1835		
1836	3.6	4.3
1837	3.1	4.8
1838	1.5	5.4
1839	3.4	4.6
1840	1.7	5.4

番号	長さ	太さ
1841	2.9	5.5
1842	2.5	4.7
1843	2.3	4.6
1844	2.8	4.9
1845	2.1	4.8
1846	3.9	4.8
1847	2.7	4.8
1848	3.2	5.0
1849	1.9	5.1
1850		
1851	3.6	4.0
1852	2.7	4.4
1853	3.7	5.0
1854	3.2	4.4
1855	2.7	4.6
1856		
1857	1.8	4.7
1858	3.5	4.5
1859	2.5	3.7
1860	3.4	4.6
1861	3.1	4.2
1862	2.6	4.8
1863	3.3	4.8
1864		
1865	2.5	4.8
1866	3.4	5.0
1867	1.9	4.2
1868	3.1	5.3
1869	2.7	4.6
1870	4.1	4.7
1871	2.0	5.4
1872	3.9	4.6
1873	3.0	5.8
1874	3.4	4.7
1875	2.2	3.7
1876	2.9	3.5
1877	2.7	4.1
1878	2.5	4.2
1879	2.0	3.7
1880	2.7	4.5

番号	長さ	太さ
1881	2.2	4.2
1882		
1883	2.5	5.5
1884	2.8	4.5
1885	2.1	4.4
1886	2.8	4.7
1887	2.6	4.3
1888	2.5	5.5
1889	4.6	4.4
1890	3.3	4.8
1891	2.9	4.3
1892		
1893	1.7	3.5
1894	3.1	5.5
1895	2.7	3.8
1896	3.7	4.7
1897	2.8	4.5
1898		
1899	2.0	3.8
1900		
1901		
1902	3.2	5.4
1903	3.3	4.7
1904	2.9	4.1
1905		
1906	勾玉	
1907	2.2	4.5
1908	3.4	4.5
1909	2.3	3.7
1910		
1911	3.1	4.7
1912	2.2	4.7
1913	3.2	4.6
1914	2.8	4.6
1915	3.3	4.2
1916	3.0	4.4
1917	3.5	5.2
1918	3.0	4.6
1919		
1920	2.8	4.4

表一28 白玉計測値(4-3 D N o. 13)

番号	長さ	太さ
1921		
1922	2.6	4.4
1923	2.9	4.2
1924	3.7	4.5
1925	1.7	4.1
1926	2.4	4.3
1927	2.9	4.0
1928		
1929		
1930	2.2	3.9
1931	3.4	4.8
1932	4.9	4.6
1933	管玉	
1934	2.7	4.8
1935		
1936	2.9	4.9
1937	3.1	4.4
1938		
1939	2.8	4.4
1940	2.9	4.5
1941	2.6	4.5
1942	3.0	4.5
1943	4.5	4.8
1944	2.5	4.1
1945	2.2	4.5
1946	3.8	5.4
1947	3.0	3.6
1948	3.1	4.3
1949	3.1	4.8
1950		
1951	2.7	5.3
1952	1.5	3.9
1953	2.1	4.1
1954	2.8	5.4
1955	2.8	4.2
1956	3.5	5.4
1957	2.7	4.3
1958	3.3	5.1
1959	3.4	6.0
1960	3.3	5.5

番号	長さ	太さ
1961	4.1	4.1
1962	1.4	4.8
1963	3.6	5.0
1964	2.2	4.0
1965		
1966	3.1	5.2
1967	3.0	5.2
1968	2.2	5.4
1969	3.4	4.8
1970	1.8	4.8
1971	4.2	4.0
1972	3.0	4.8
1973		
1974		
1975		
1976	4.0	5.5
1977	3.5	4.7
1978	3.2	5.3
1979	3.2	4.3
1980		
1981	3.0	3.7
1982	2.7	4.3
1983	3.1	5.2
1984	1.5	5.3
1985	3.8	4.7
1986	2.6	4.0
1987	2.3	4.6
1988		
1989	2.7	4.2
1990	4.0	4.6
1991	3.0	3.9
1992	3.7	4.4
1993	2.5	4.5
1994	3.2	4.5
1995	3.3	4.8
1996		
1997	3.4	4.3
1998	2.2	4.0
1999	2.1	4.6
2000	2.6	4.7

番号	長さ	太さ
2001	2.4	4.6
2002		
2003	3.0	4.4
2004	3.5	4.6
2005	3.4	5.7
2006	2.4	4.4
2007	2.9	4.6
2008	2.4	3.4
2009		
2010	2.5	4.4
2011	2.1	3.8
2012	2.9	4.6
2013	4.1	4.1
2014		
2015	2.4	4.0
2016	3.6	4.6
2017	2.9	4.2
2018	3.0	4.8
2019	2.6	4.8
2020	4.2	5.9
2021	2.8	5.2
2022	3.8	4.7
2023	3.1	4.7
無 1	3.0	4.1
無 2	2.9	5.0
無 3	3.1	4.7
無 4	3.3	2.8
無 5	3.0	4.5
無 6	2.5	4.3
無 7	2.5	3.8
無 8	2.2	4.8
無 9	1.6	3.9
無 10	2.4	3.7
無 11	3.0	4.0
無 12	3.5	4.2
無 13	3.0	4.0
無 14	2.7	3.8
無 15	3.2	4.8
無 16	2.5	4.0
無 17	3.5	5.0

番号	長さ	太さ
無 18	1.9	4.3
無 19	2.4	5.3
無 20	3.4	4.9
無 21	2.5	4.8
無 22	2.4	4.5
無 23	2.9	4.8
無 24	2.5	3.8
無 25	2.2	5.3
無 26	2.5	3.5
無 27	3.7	4.7
無 28	3.2	4.8
無 29	3.1	5.3
無 30	2.3	3.6
無 31	2.0	3.8
無 32	2.7	3.5
無 33	2.2	4.3
無 34	2.3	3.8
無 35	2.1	4.9
無 36	2.5	5.3
無 37	3.0	4.6
無 38	2.9	4.3
無 39	3.2	4.9
無 40	2.4	4.0
無 41	2.5	4.5
無 42	2.1	5.5
無 43	2.8	4.7
無 44	2.2	4.2
無 45	3.0	4.4
無 46	3.2	4.8
無 47	2.0	4.2
無 48	2.3	5.0
無 49	2.1	4.5
無 50	3.0	3.8
無 51	2.9	4.2
無 52	2.2	3.9
無 53	2.9	4.4
無 54	1.9	5.5
無 55	2.5	3.6
無 56	2.9	4.1
無 57	2.6	4.5

表-29 白玉計測値(4-3 DN0.14)

番号	長さ	太さ
無 58	2.9	4.5
無 59	3.5	5.6
無 60	3.7	5.5
無 61	2.4	5.2
無 62	3.3	4.5
無 63	2.9	5.7
無 64	2.5	4.0
無 65	2.7	4.5
無 66	3.4	4.7
無 67	2.7	4.4
無 68	2.3	3.7
無 69	2.8	5.4
無 70	2.7	4.5
無 71	2.9	4.7
無 72	3.0	4.8
無 73	3.4	5.3
無 74	2.0	4.8
無 75	2.0	4.7
無 76	2.8	3.8
無 77	2.7	3.6
無 78	3.6	4.6
無 79	3.0	5.6
無 80	2.6	5.6
無 81	3.3	3.7
無 82	2.1	4.6
無 83	3.1	4.8
無 84	3.2	5.1
無 85	3.6	4.6
無 86	3.2	4.7
無 87	2.6	5.6
無 88	3.4	4.3
無 89	2.6	4.2
無 90	2.9	4.6
無 91	2.5	5.7
無 92	3.0	4.4
無 93	2.3	4.5
無 94	2.7	4.3
無 95	3.4	5.6
無 96	2.6	3.9
無 97	3.5	4.7

番号	長さ	太さ
無 98	2.5	4.7
無 99	2.8	4.3
無100	2.7	4.1
無101	3.5	4.2
無102	2.5	4.0
無103	5.1	4.8
無104	2.9	4.8
無105	2.9	5.5
無106	2.8	4.8
無107	1.9	4.7
無108	2.9	3.8
無109	2.0	4.1
無110	2.5	4.5
無111	1.8	5.1
無112	2.5	4.6
無113	1.4	4.0
無114	1.7	3.7
無115	2.8	4.0
無116	2.3	3.9
無117	2.8	4.4
無118	2.7	5.7
無119	4.4	4.7
無120	2.9	4.4
無121	2.6	5.1
無122	2.5	5.0
無123	2.9	4.8
無124	4.0	4.5
無125	3.0	4.5
無126	3.0	4.5
無127	3.7	4.6
無128	3.5	4.5
無129	2.2	5.5
無130	1.7	4.7
無131	3.4	4.2
無132	3.1	3.7
無133	4.7	5.8
無134	3.4	5.2
無135	2.8	4.2
無136	3.1	4.7
無137	3.7	4.9

番号	長さ	太さ
無138	1.9	5.5
無139	1.9	3.8
無140	2.5	4.4
無141	3.1	4.8
無142	2.9	4.7
無143	2.9	4.7
無144	2.1	4.2
無145	3.4	4.8
無146	2.4	5.2
無147	2.8	5.1
無148	2.0	4.0
無149	2.9	4.8
無150	2.5	4.0
無151	2.4	4.2
無152	2.6	4.0
無153	2.5	4.4
無154	2.4	3.6
無155	2.1	3.7
無156	2.8	3.9
無157	2.7	4.0
無158	1.9	4.0
無159	2.5	4.2
無160	3.5	5.5
無161	1.7	3.4
無162	3.2	4.5
無163	1.4	3.7
無164	2.3	4.0
無165	3.0	4.3
無166	2.7	4.1
無167	2.5	4.4
無168	2.3	4.1
無169	3.1	4.7
無170	2.2	4.7
無171	2.5	4.4
無172	3.3	4.8
無173	3.0	4.5
無174	2.7	4.8
無175	2.9	5.5
無176	2.5	3.4
無177	4.4	4.5

番号	長さ	太さ
無178	3.5	4.7
無179	2.9	4.0
無180	1.9	5.5
無181	2.5	4.9
無182	2.7	4.6
無183	2.0	4.6
無184	2.5	4.7
無185	2.3	4.5
無186	2.5	3.8
無187	2.5	4.7
無188	3.6	5.0
無189	2.5	4.0
無190	2.5	5.4
無191	2.2	3.8
無192	3.5	4.8
無193	2.6	4.8
無194	2.7	5.2
無195	3.3	4.4
無196	2.2	4.8
無197	2.6	4.3
無198	3.5	4.6
無199	3.1	4.3
無200	3.2	4.5
無201	2.7	4.1
無202	3.6	5.4
無203	3.1	4.7
無204	2.8	5.5
無205	3.0	4.6
無206	2.7	4.8
無207	2.3	4.6
無208	3.1	5.6
無209	2.6	5.9
無210	3.1	4.3
無211	3.1	4.3
無212	2.4	4.4
無213	2.2	4.3
無214	3.2	3.9
無215	2.7	3.4
無216	3.5	5.2
無217	2.7	4.1

表-30 白玉計測値(4-3DNφ.15)

番号	長さ	太さ
無218	3.5	4.7
無219	3.2	4.8
無220	2.8	4.6
無221	3.6	4.3
無222	2.5	5.7
無223	2.4	5.3
無224	2.9	4.5
無225	2.9	5.2
無226	2.8	4.8
無227	2.8	4.6
無228	3.5	4.5
無229	2.9	4.4
無230	1.6	5.5
無231	2.9	4.6
無232	3.4	4.5
無233	2.7	4.4
無234	2.8	3.8
無235	2.6	4.5
無236	3.1	4.4
無237	2.7	4.4
無238	3.2	4.6
無239	1.8	4.5
無240	2.4	3.7
無241	2.4	3.6
無242	3.0	4.6
無243	2.3	4.9
無244	3.4	4.6
無245	2.8	4.3
無246	2.4	5.0
無247	2.4	4.4
無248	2.1	4.5
無249	2.4	4.9
無250	2.6	4.4
無251	2.6	4.7
無252	2.0	4.9
無253	3.5	5.2
無254	1.8	3.6
無255	1.6	4.3
無256	2.1	4.7
無257	2.4	3.9

番号	長さ	太さ
無258	2.7	3.7
無259	2.9	4.1
無260	2.2	4.1
無261	3.0	4.9
無262	2.6	4.5
無263	3.5	4.7
無264	2.8	4.6
無265	2.7	4.7
無266	1.8	3.7
無267	2.7	5.2
無268	2.6	4.0
無269	3.3	4.7
無270	2.2	3.6
無271	2.5	4.0
無272	2.4	4.2
無273	2.5	4.5
無274	2.0	4.6
無275	1.7	4.5
無276	3.0	4.7
無277	2.7	4.7
無278	3.8	4.5
無279	3.4	4.3
無280	2.6	4.9
無281	2.4	4.5
無282	2.2	5.4
無283	4.5	4.7
無284	2.3	3.8
無285	3.3	5.0
無286	3.2	4.4
無287	2.5	3.8
無288	2.5	4.3
無289	2.4	4.6
無290	2.0	3.5
無291	2.4	4.6
無292	1.7	4.9
無293	2.2	4.0
無294	2.3	4.6
無295	2.0	4.5
無296	3.5	4.4
無297	2.2	4.5

番号	長さ	太さ
無298	2.7	4.3
無299	2.8	3.4
無300	3.3	4.6
無301	3.4	4.6
無302	3.4	4.1
無303	3.9	4.5
無304	2.5	4.7
無305	3.5	4.0
無306	2.3	4.8
無307	3.3	4.8
無308	3.2	4.2
無309	2.9	4.0
無310	2.0	3.6
無311	4.6	4.5
無312	3.0	4.6
無313	3.5	4.5
無314	4.0	4.1
無315	4.1	4.9
無316	2.0	4.1
無317	3.5	4.5
無318	2.4	3.8
無319	1.9	4.0
無320	2.5	5.3
無321	3.3	4.4
無322	2.9	4.5
無323	3.6	4.6
無324	2.8	3.8
無325	2.6	4.4
無326	3.3	4.9
無327	1.7	3.8
無328	2.8	4.5
無329	2.5	4.5
無330	3.5	4.3
無331	2.7	4.6
無332	2.7	4.4
無333	1.8	3.7
無334	2.3	2.2
無335	1.9	3.4
無336	2.8	4.4
無337	2.8	4.2

番号	長さ	太さ
無338	3.0	3.4
無339	2.3	4.1
無340	1.6	4.7
無341	2.0	3.6
無342	2.1	3.5
無343	2.6	4.5
無344	管玉	
無345	勾玉	

その他の出土遺物

装身具 3-5D、4-13H柱穴内、4区南半土坑群から各1点のガラス玉が出土した。三者ともに紺色を呈した白玉状のものである。用途は、石製模造品と同様であったかもしれないが、装身具として使用できるものである。

土製品 土製の玉などは全く出土していない。遺物全体をみても土製品は少なく、第40図に示した支脚が出土したのみである。

支脚は、3-2・10D、4-3・6Dから各1～2点ずつ出土し、竪穴住居跡に伴う例はない。したがって、支脚イコール屋内竈という結論を出すことはできない。

4-3D出土のものは、ほぼ全容をすることができる。これによると、砂礫などが多量に混じった耐火度の高い粘土を手で捏ねて上方がやや細い柱状にしたものである。全体にオレンジ色を呈し、二次的に火を受けているが、煤の付着はない。

鉄製品 第41図1・2は鉤の先端と思われる。4-2・3Dから各1出土したものである。

銅製品 4-3D内で玉として取り上げた1268は、整理の結果径約5mmの銅製板であったが、保存状態がきわめて悪い。

V 奈良時代以降の遺物

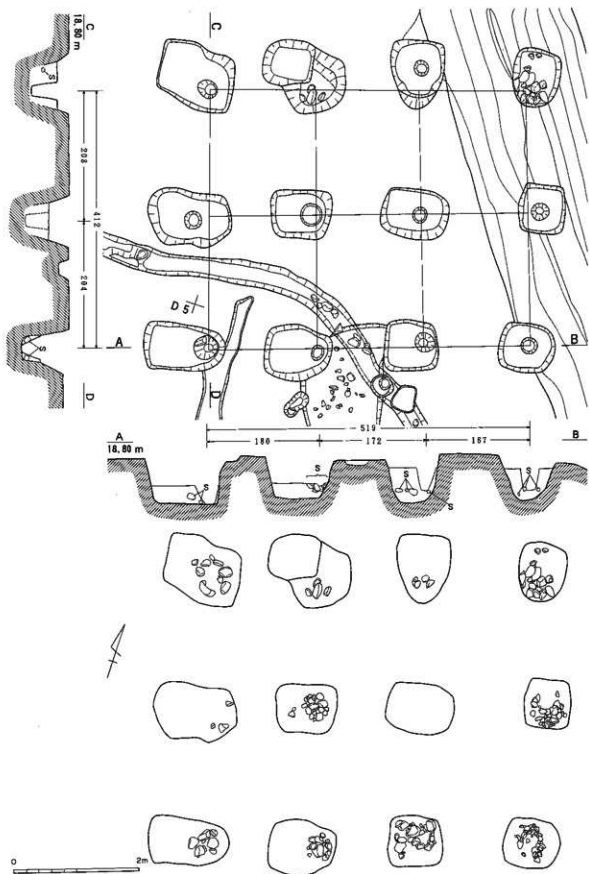
奈良時代以降の遺物は極めて少量であり、その大半は中世の陶器類である。

第27図7・8は奈良時代に属する土師器であろう。また、第27図11は、3-13Dから出土したものである。奈良時代とはいえないが、7世紀後半代の土師器高盤であろう。

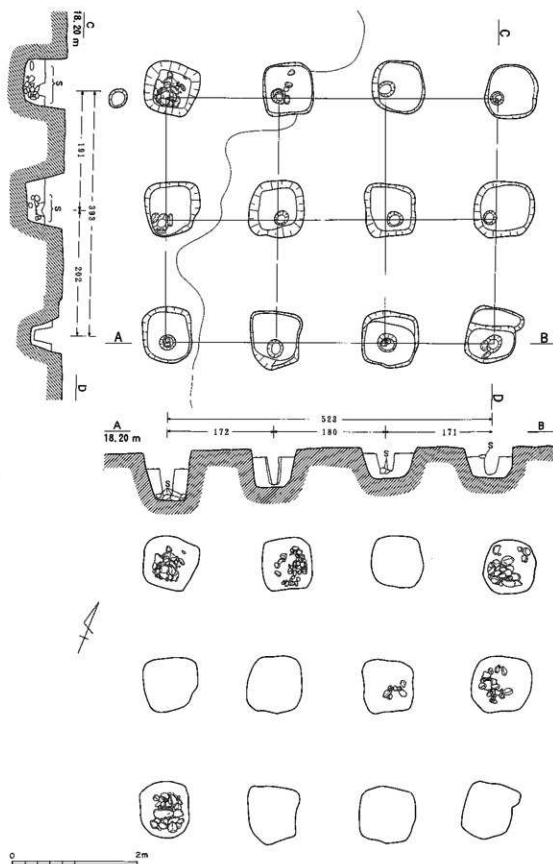
先に記した第36図5-9は奈良時代に属する須恵器、10は鎌倉時代に属する陶器である。

第41図3は、鉄製鎌である。4-12Dの床面に密着しており、この土坑に伴ったことは確実である。この土坑からは、「永楽通宝」も伴出している。また、4-12Dは、1-10D、2-27・33、3-16・25D、4-11・13・14Dなどとともの中世後半の墓塚と思われることから、同時期のものと考えられる。

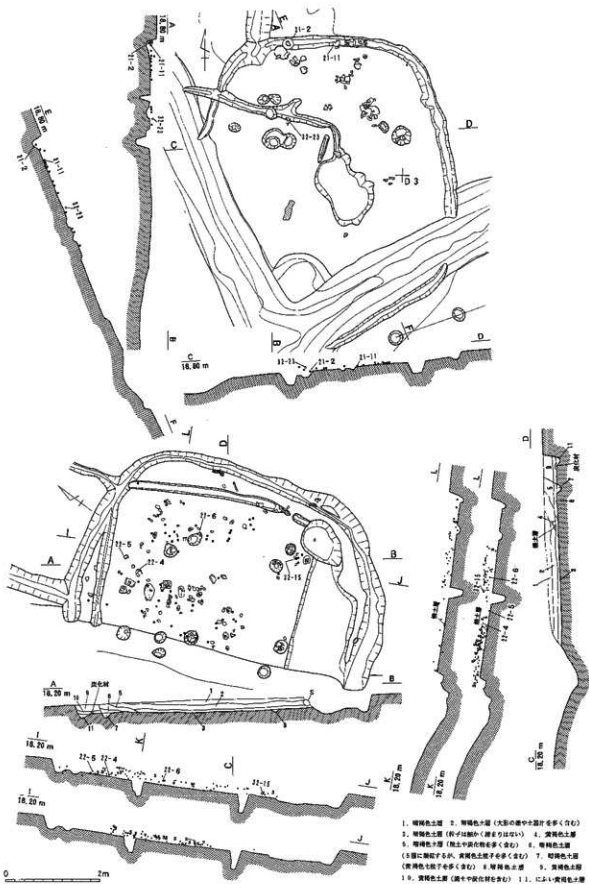
この墓塚の内、1-10D、4-11・13・14Dからは古銭が出土している。保存状況が極めて悪いために、読み取れるものは少ないが、「開元通宝」、「永楽通宝」、「宣徳通宝」などがある。



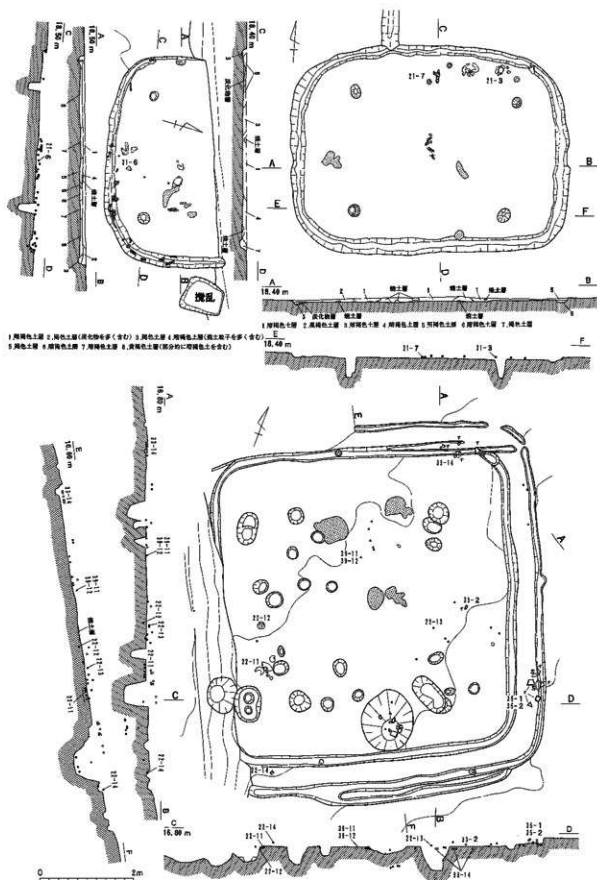
第3図 1-1H実測図(下は基礎石・根巻き石の状況)



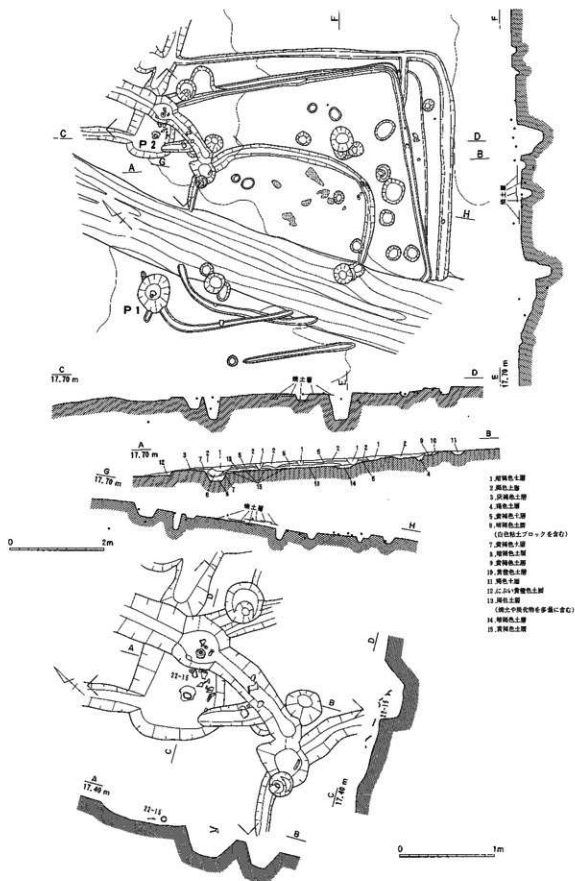
第4図 2-4H実測図（下は基礎石・根巻き石の状況）



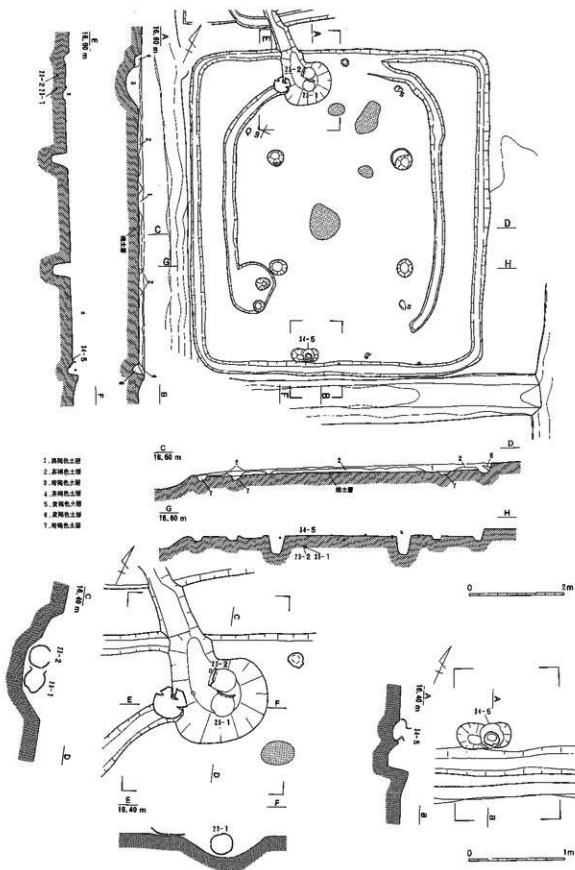
第5図 1-1J (上)、2-2J (下) 遺物出土状況



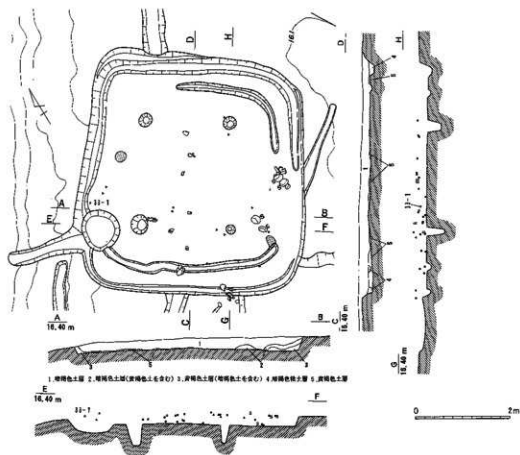
第6図 2-5 J (左上)、2-7 J (右上)、3-1 J (下) 遺物出土状況



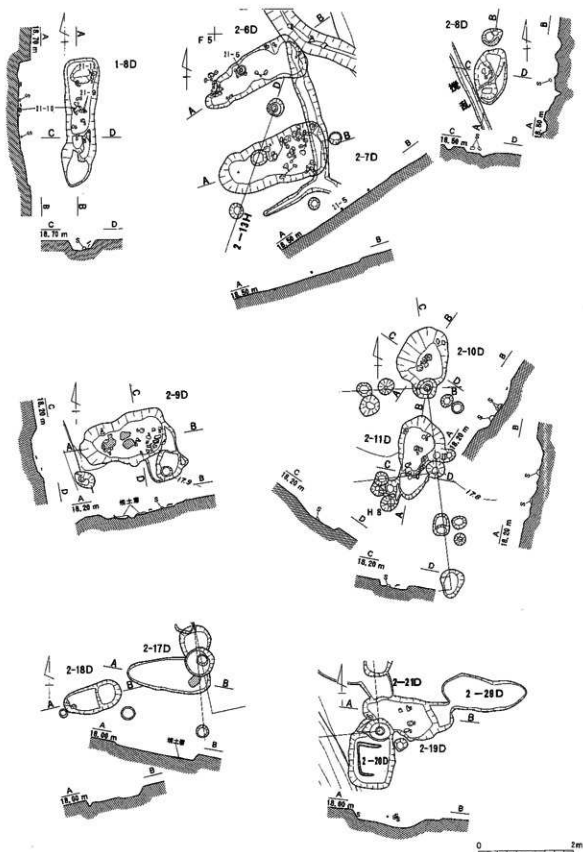
第7図 3-5 J遺物出土状況



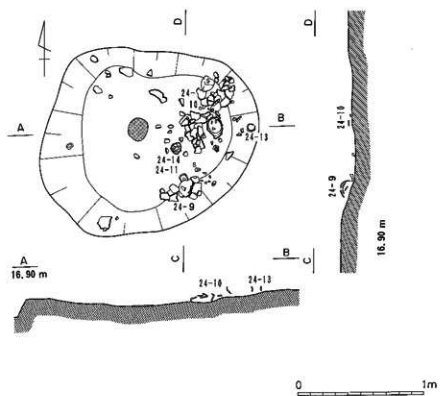
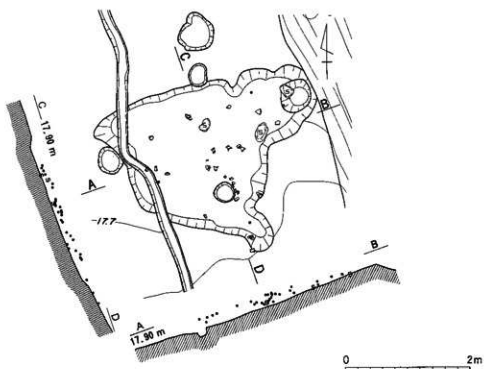
第8圖 4-1 J遺物出土狀況



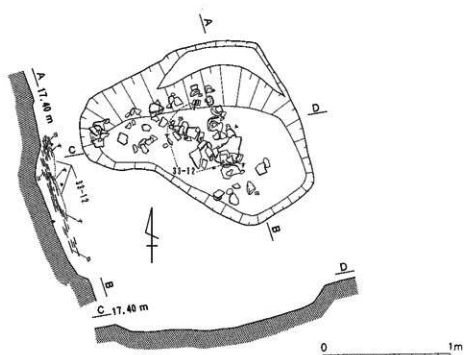
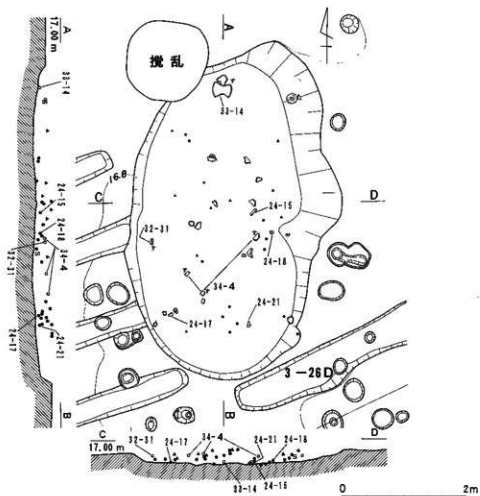
第9図 4-3 J遺物出土状況



第10图 1-8 D (上左)、2-6-7 D (上中)、2-8 D (上右)、2-9 D (中左)、2-10-11 D (中右)、2-17 D (下左)、2-18 D (下右) 遺物出土狀況



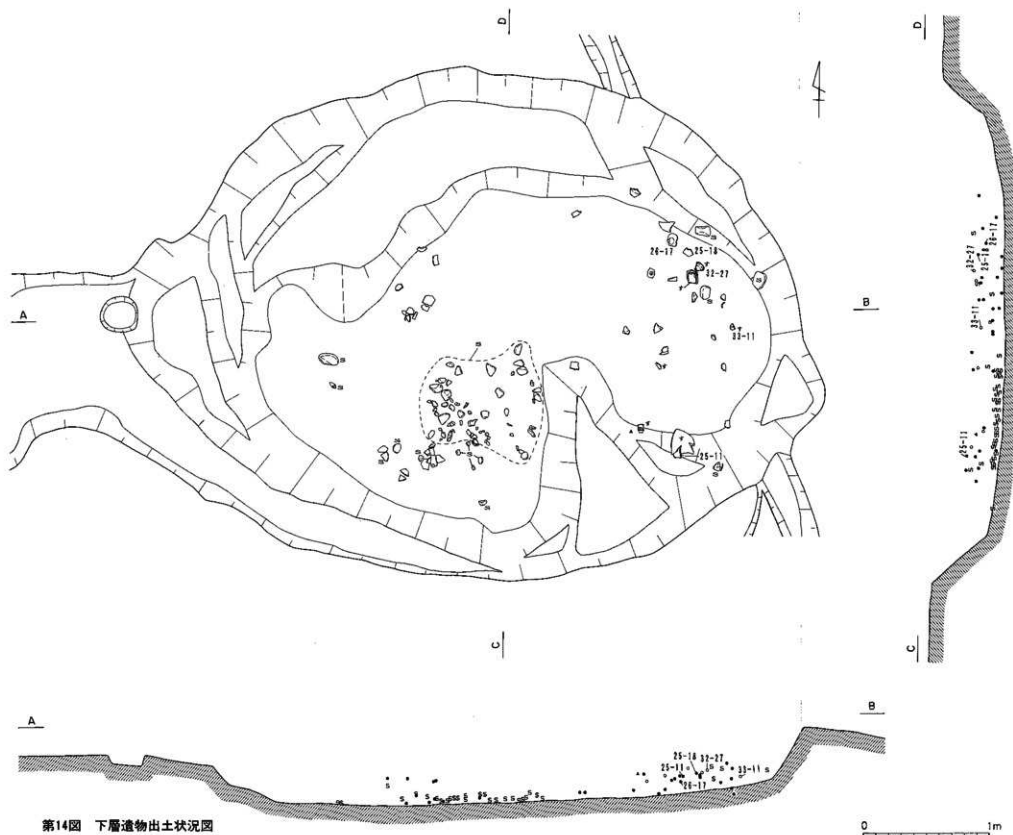
第11図 2-1D (上)、3-1D (下) 遺物出土状況



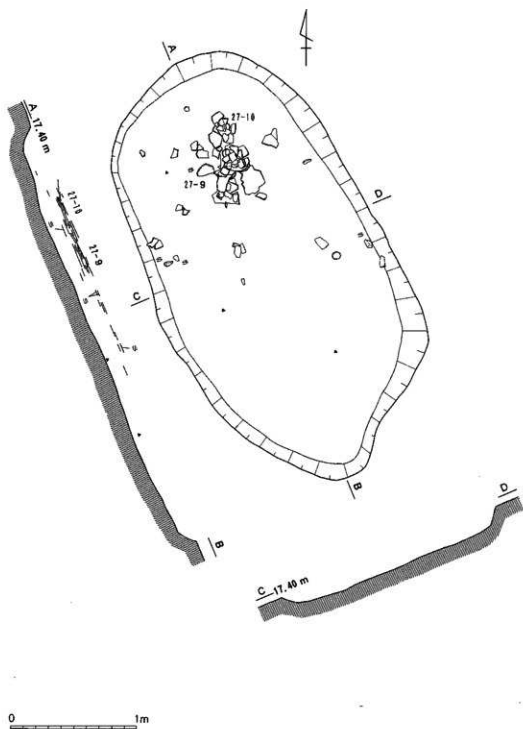
第12図 3-2D(上)、3-11D(下)遺物出土状況



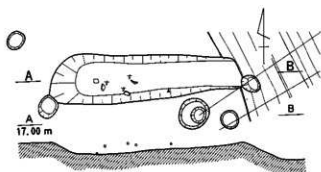
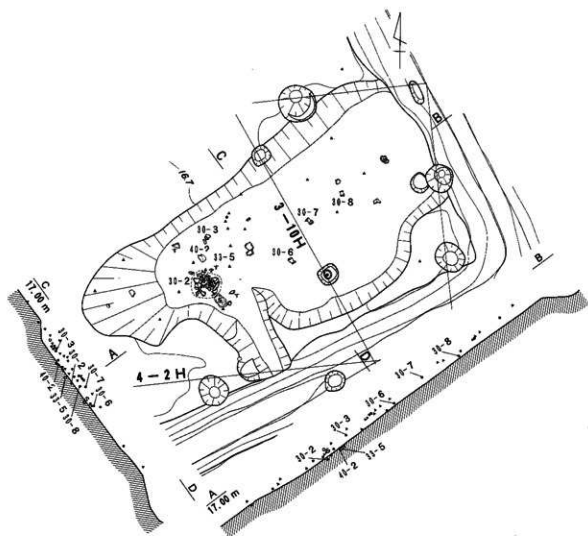
第13図 3-10D中～上層遺物出土状況図



第14図 下層遺物出土状況図

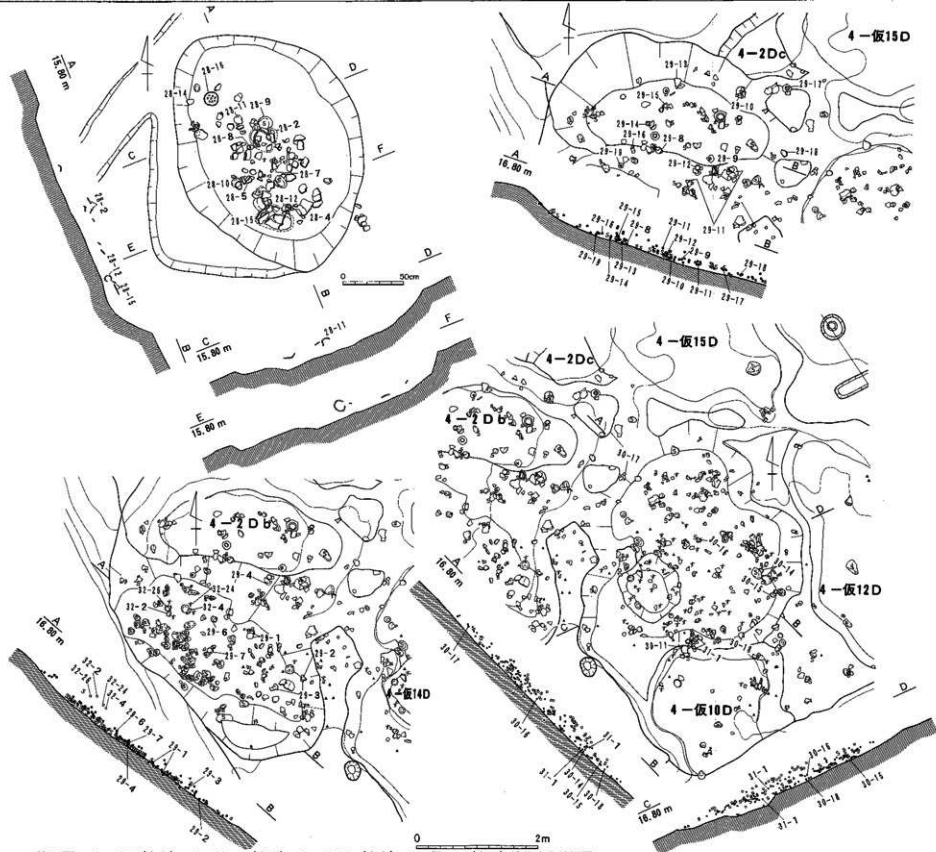


第15図 3-12D遺物出土状況

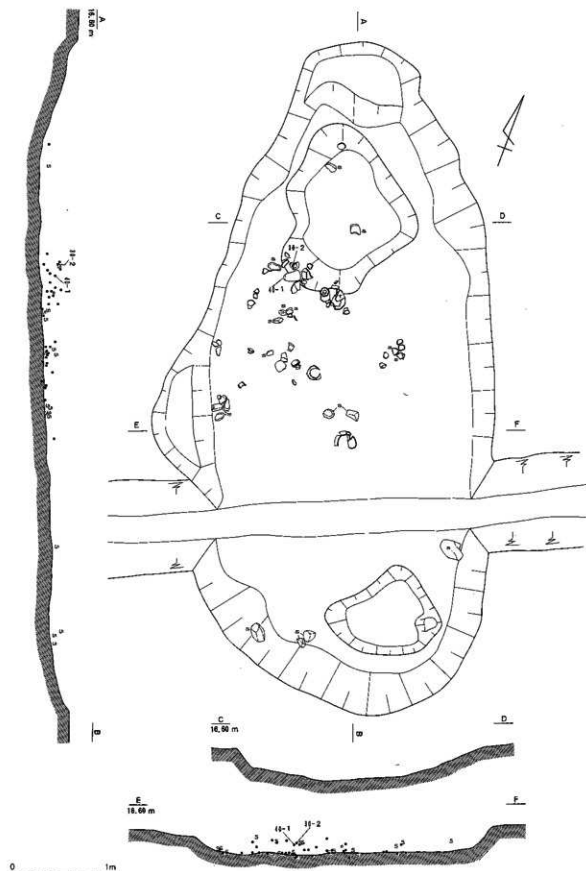


0 2m

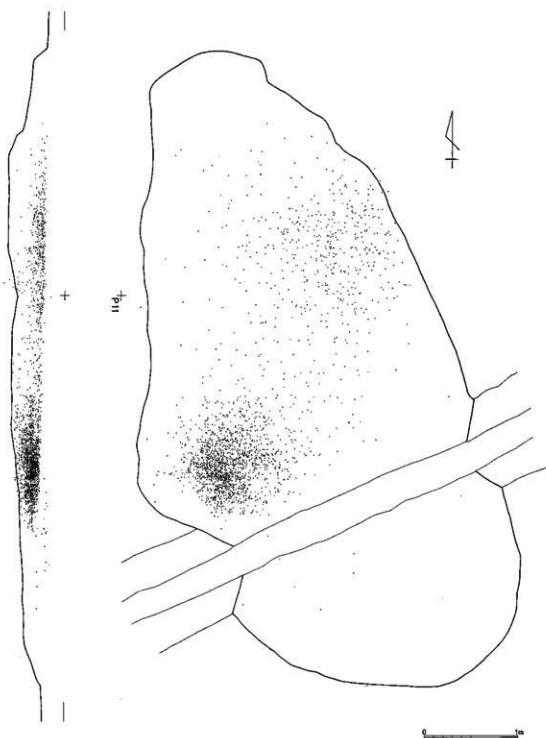
第18図 4-6D(上)、4-10D(下)遺物出土状況



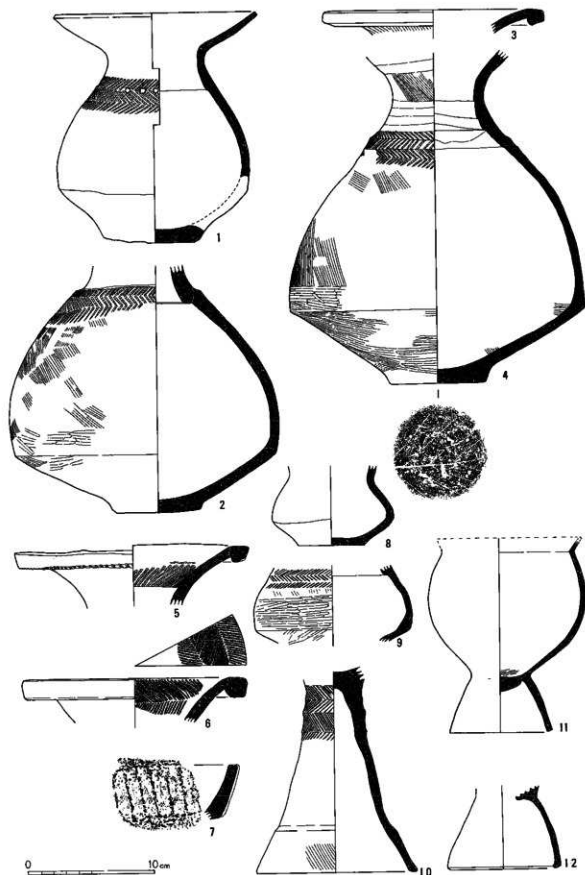
第17図 4-1D (左上)・4-2Da (左下)・4-2Db (右上)・4-13D (右下) 遺物出土状況図



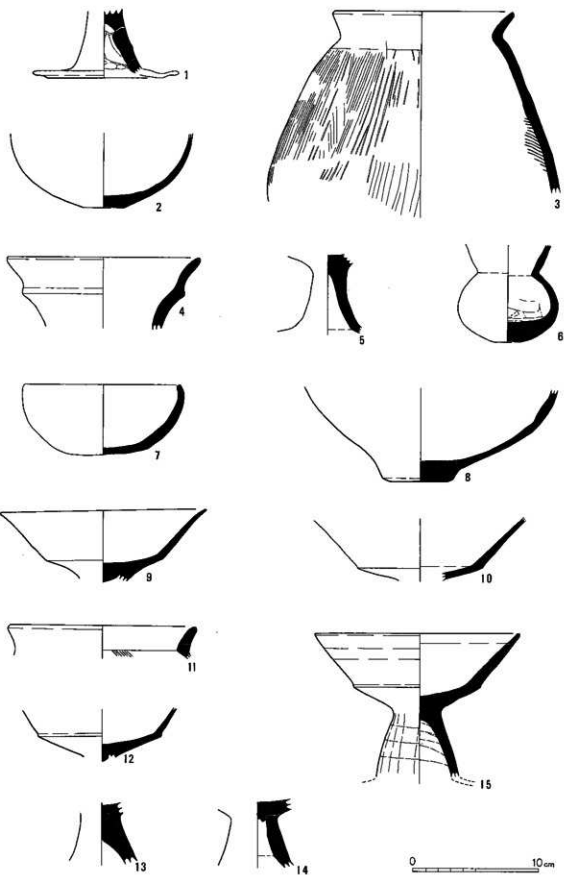
第18图 4-3 D遺物出土状況



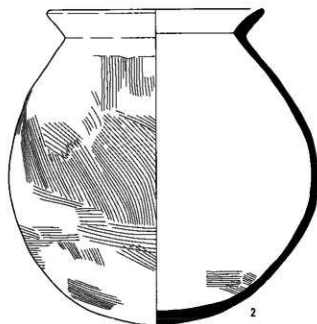
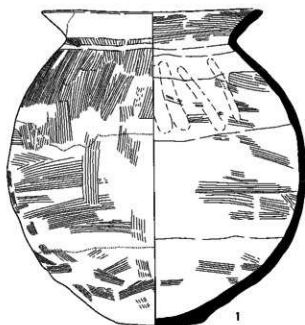
第19图 4-3 D石製模造品出土状況



第21图 弥生土器実測図

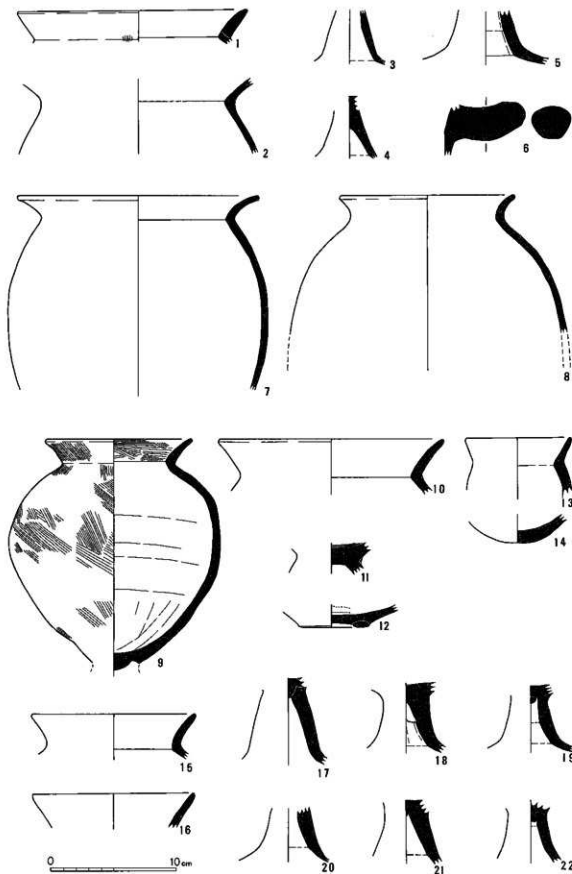


第22図 土師器実測図 (No. 1)

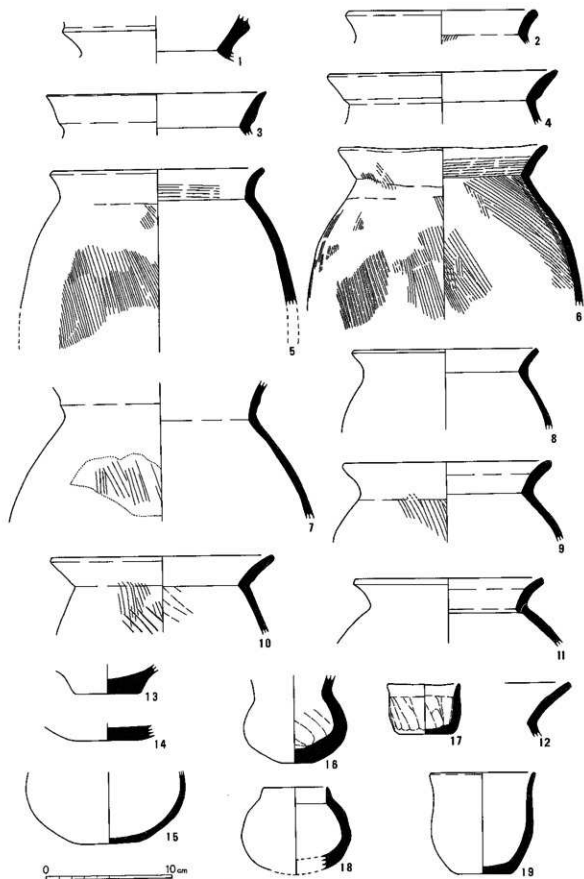


0 10cm

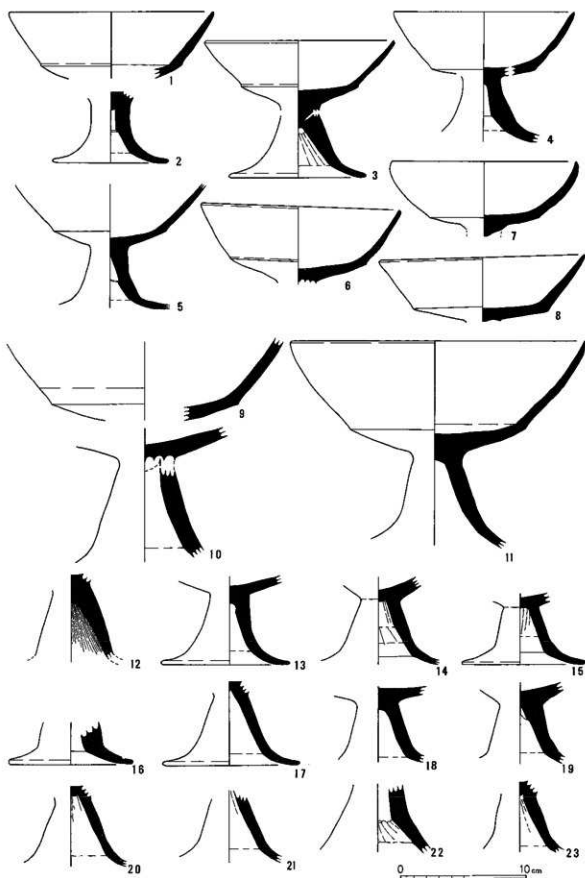
第23図 土師器実測図 (No. 2)



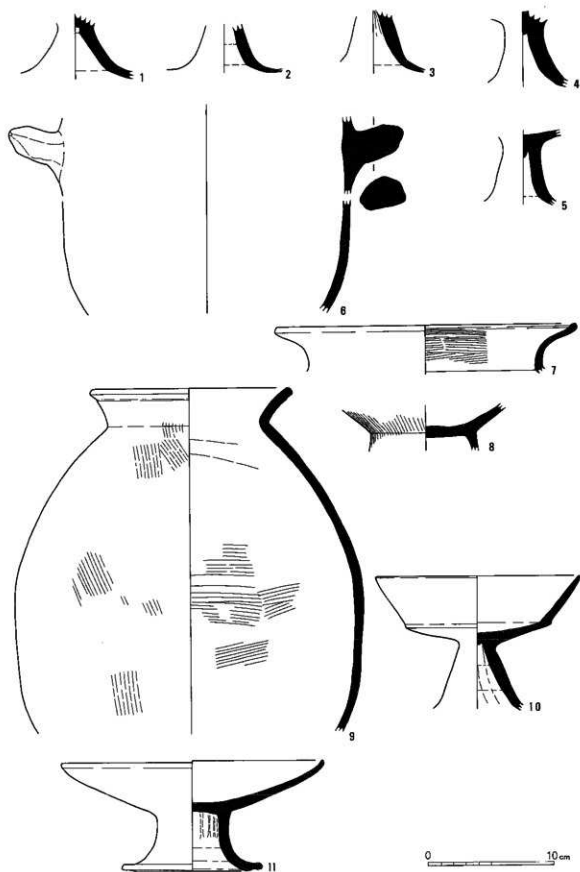
第24図 土師器実測図 (No 3)



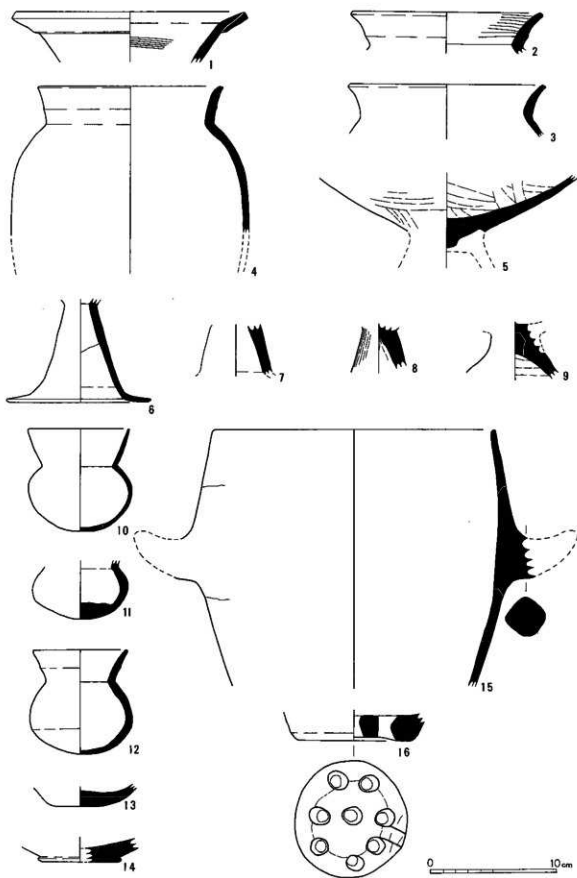
第25図 土師器実測図 (No 4)



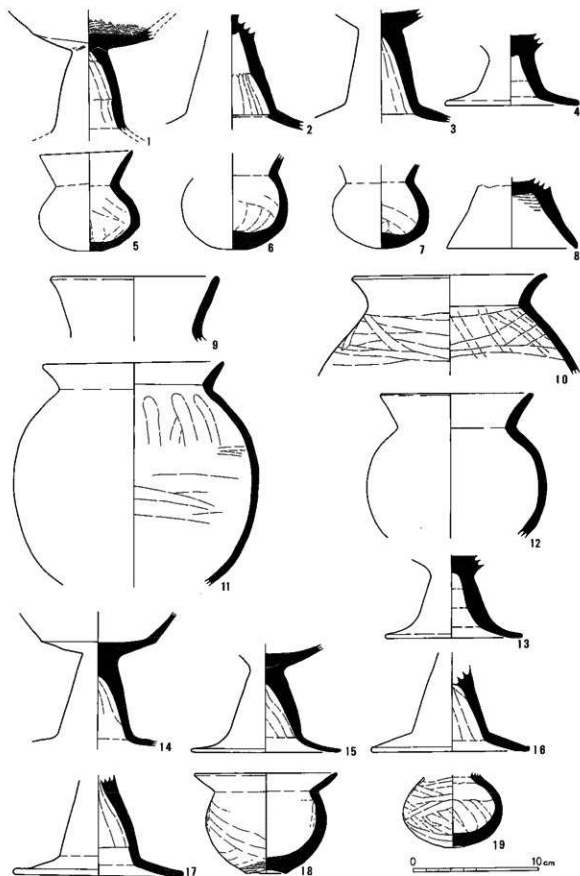
第26図 土師器実測図 (No 5)



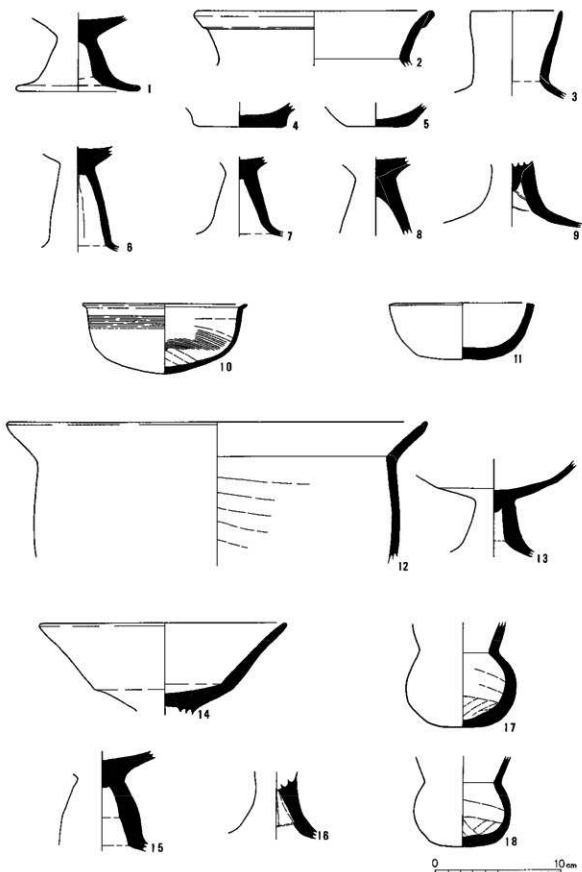
第27圖 土師器実測図 (No 6)



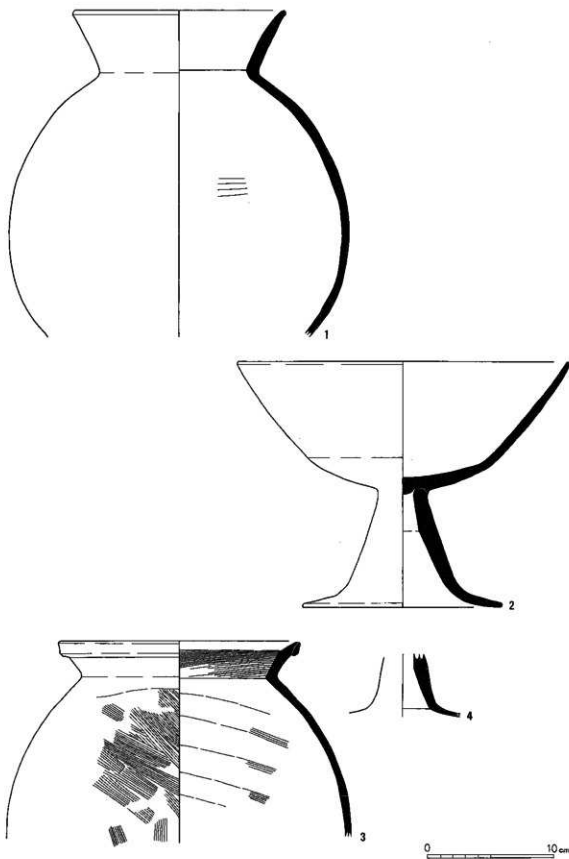
第28圖 土師器実測図 (No 7)



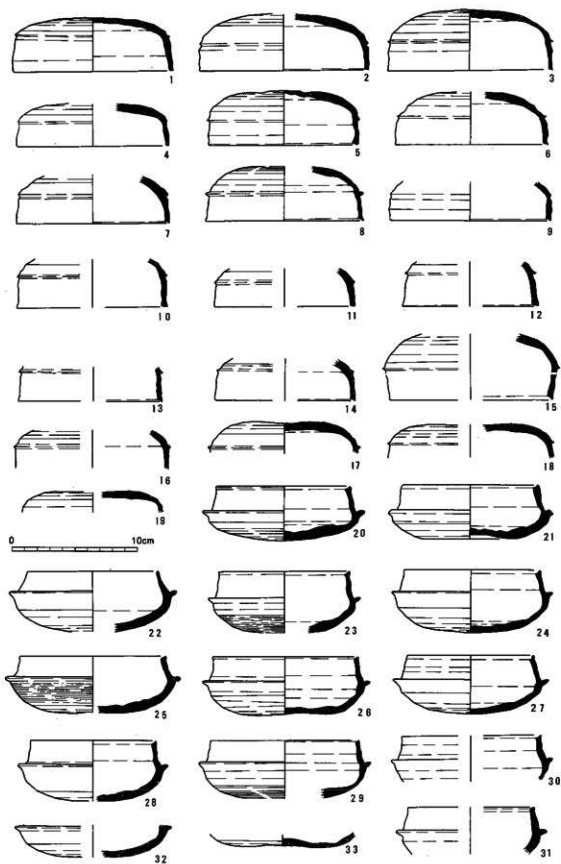
第29図 土師器実測図 (N=8)



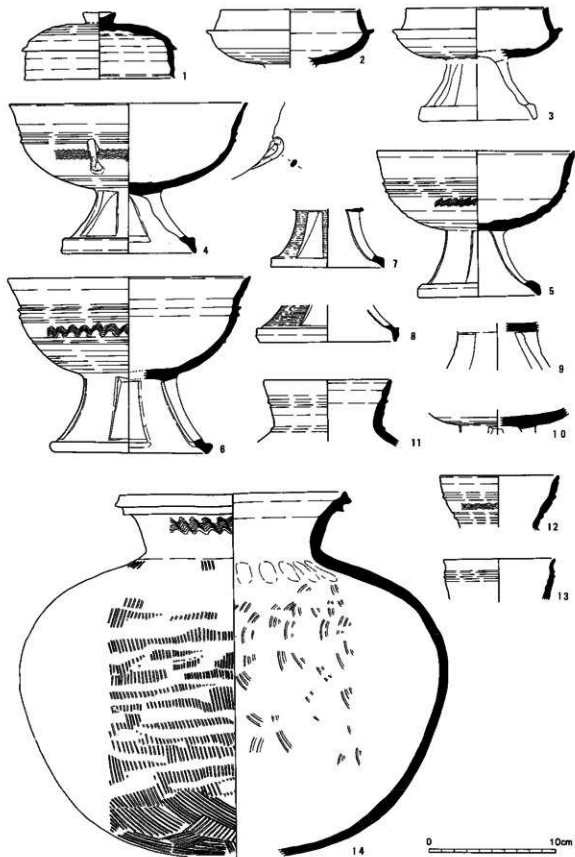
第30図 土師器実測図 (N○9)



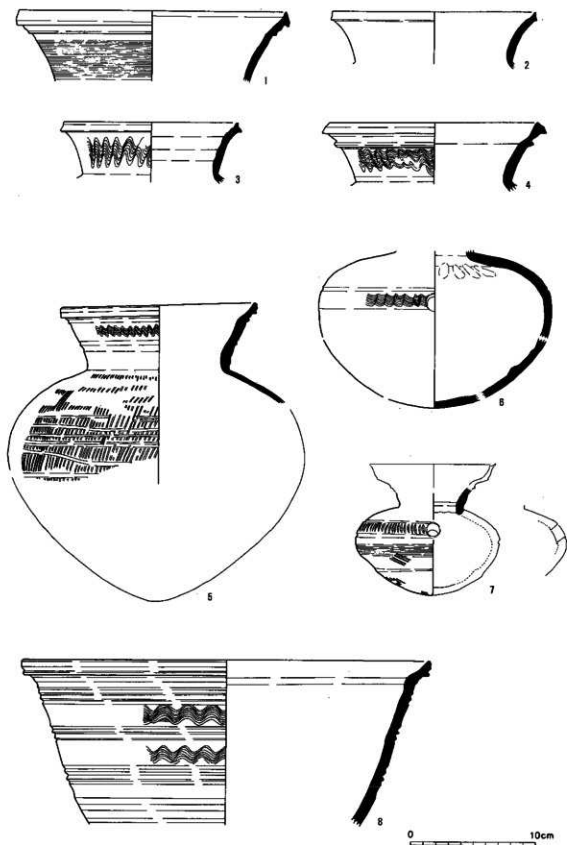
第31図 土師器実測図 (N・10)



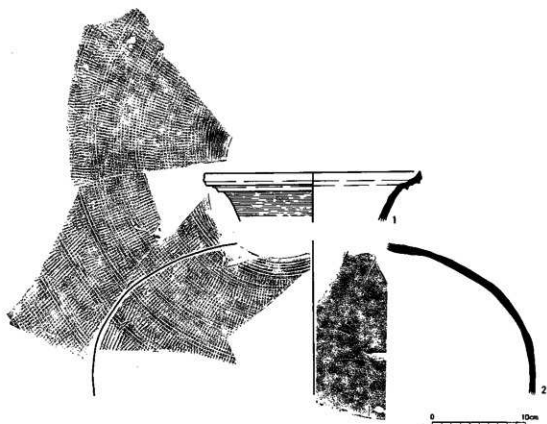
第32図 須恵器実測図 (N○1)



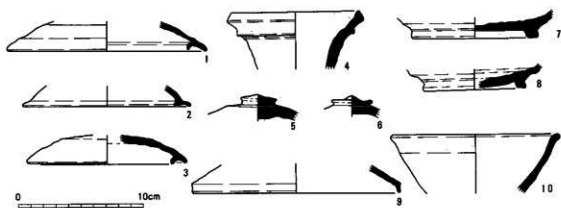
第33図 須志器実測図 (N○2)



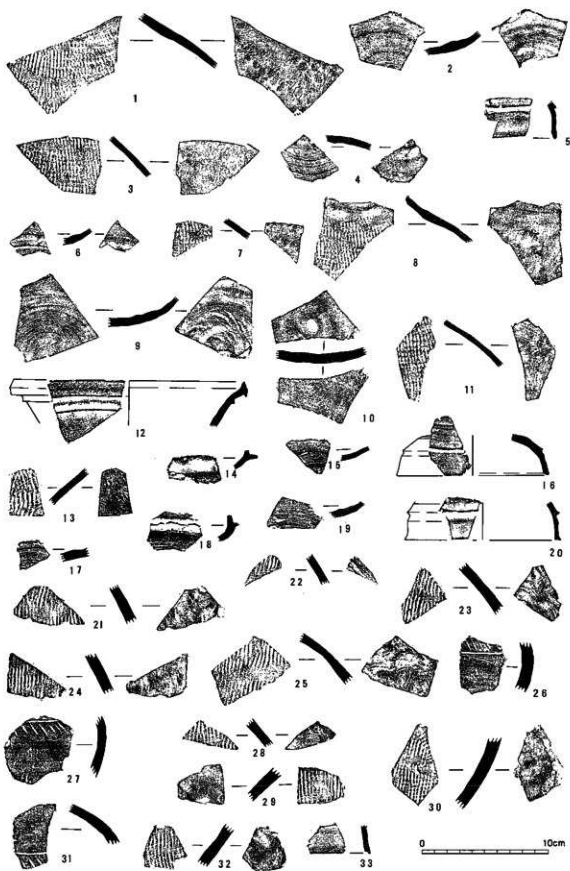
第34图 須恵器実測図 (No 3)



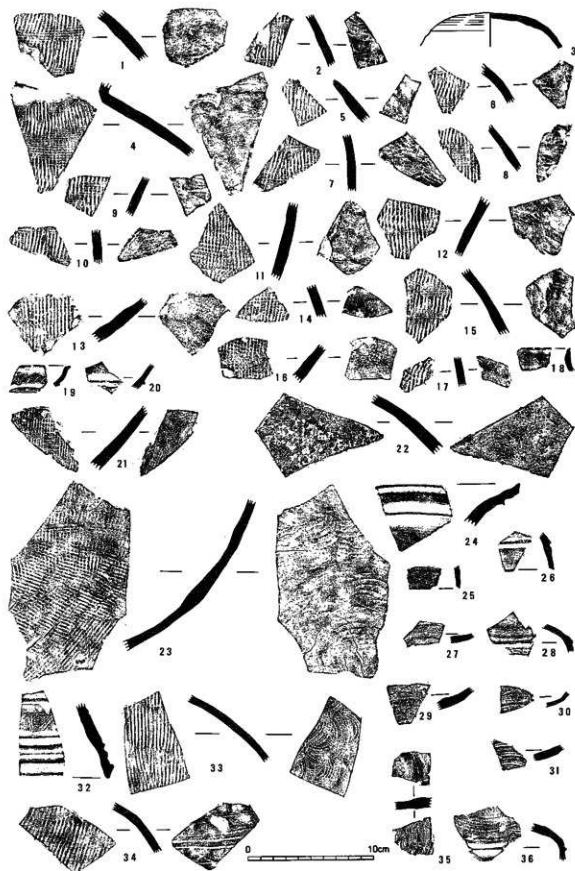
第35図 須恵器実測図・拓影 (N○1)



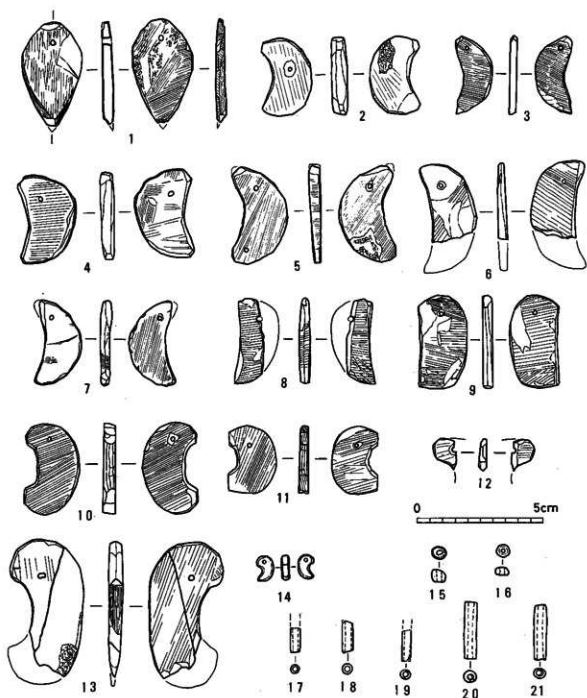
第36図 須恵器・陶器実測図



第37図 須恵器実測図・拓影

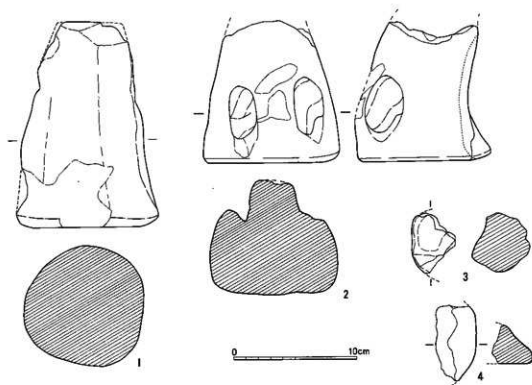


第38图 須恵器実測図・拓影

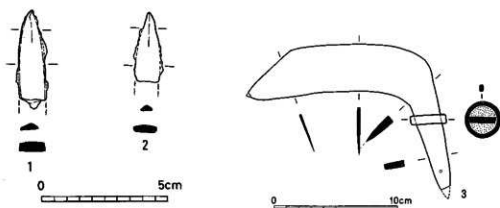


第39図 石造模造品実測図

1, 剣形 (4区南半土坑群出土) 2~14, 勾玉 (2・5・6・7~9, 4-3 D、3・10、3-10 D、4、2-4 H、11・12、3-1 J、13、4-3 J、14、4-2 D b出土) 15・16, ガラス玉 (15、4-13 H、16、3-5 D出土) 17~21, 管玉



第40図 土製品実測図(1, 4-3 D、2, 4-6 D、3, 3-2 D、4, 3-10 D)



第41図 鉄製品実測図(1, 4-2 D、2, 4-3 D、3, 4-12 D出土)

考察

1) 古新田遺跡における弥生時代の集落景観

柴田 睦

当遺跡からは弥生時代の遺構として、竪穴住居跡が10軒（2—4 Jについては、当時代に属するものと報告してきたが、古墳時代に属する可能性が高くなったため、ここでは除外して考える）、掘立柱建物跡は約8棟（実際にはもう少し増えるものと考えられる）が発見されている。その他、土坑や小穴が多数確認されている。

これらの遺構は、その出土遺物から菊川式期でも比較的新しい段階のものと考えられ、また、遺構の重複状態からも、比較的短期間に存在した集落であったと推察される。

今回は、とくに建物跡の変遷や配列について考え、弥生時代の古新田集落の復元を試みてみたい。「概報」（注1）において、すでにその試案は提示しており、とくに竪穴住居跡の配列の在り方などは注記されていた。今回も、前回の分類に従い、竪穴住居跡の変遷について考え、比較的多く発見された掘立柱建物跡との関係について論じてみたい。

竪穴住居跡の形態には、おおよそ楕円形のもの、隅丸方形のものと分類でき、前者の例としては、2—2・11 Jと3—6 Jが、後者の例として、1—1・6 J、2—5・7・8・9 Jと3—5 Jがある。両者は、排水溝が連結した1—6 J、2—7・11 Jで認められるように、同時に存在していた時期もあるようであるが、その構築順序は排水溝の状態から2—11 J→2—7 J→1—6 Jのように考えられ、形態としては前者が古く、後者が新しい。

主軸方位についても、おおよそ2つの方位に分類でき、南北を向くものと東西を向くものがある。前者の例には1—1 J、2—2・8・11 J、3—5・6 Jが、後者の例には1—6 J、2—5・7・9 Jがある。これについては、2—8 J→2—5 Jの新田関係から、前者が古く、後者が新しいものと考えられる。

形態と主軸方位の分類については、各分類に認められた新旧の関係は、必ずしも一致するものではなく、おおよその傾向として認識されるものであるが、楕円形で主軸方位が南北を向くものが古く、隅丸方形で主軸方位が東西を向くものは新しいものと考えられる。

各分類の2つの要素や重複状態から、おおよそ2時期に分類して考えることが妥当と思われるが、その前に、竪穴住居跡の配列状態について考えてみたい。

調査区内はかなり深い擾乱を受けている箇所が多く、不明瞭な点も多いが、1—1 Jを除く竪穴住居跡群は、ほぼ弧状に並んでいることが看取される。また、新しい要素を有する2—5・7・9 Jは地形に制約されることなく、弧状に配列されており、当集落においては、この弧状に配列する何らかの規制が働いていたものと考えられる。

田中義昭氏は神奈川県二ツ池遺跡の分析から、竪穴住居跡が弧状に配列した単位集団の存在を説き（注2）、古墳時代の例ではあるが、小笠原好彦氏は弧状もしくはL字状に配列した竪穴住居跡小群の移動から、単位集団の移動とその性格について論じている（注3）。その他、竪穴住居跡小群の配列から単位集団を把握しようとする試みは多々見受けられるが、いずれも、出土した土器の編年を基軸に据えたものである。ここでは、弧状の配列と先に示した新旧の2つの様相を竪穴住居跡の群別に適用し、その変遷について考えてみたい。

形態が楕円形で主軸方位が南北を向くものとしては、2—2・11 J、3—6 Jがある。これらは、古い要素を有するもので、これらの竪穴住居跡が存在する時期を1期とし、隅丸方形で東西を向くも

のには、1-6 J、2-5・7・9 Jがあり、これらは新しい要素を有するものと考えられ、これらが存在する時期をⅡ期とする。残りの隅丸方形で南北を向く1-1 J、2-8 J、3-5 Jについては、2-8 Jは、2-5 Jに切られていることからⅠ期に、3-5 Jは、その配列からⅡ期に、1-1 Jについては、群から外れ、その時期は不明な点が多いが、新たな群を形成する前段階の状態と推測し、Ⅱ期に含めて考えたい。その他、3-5 Jの南側に焼土跡が存在し、2-2 Jと3-6 Jの空間を埋める竪穴住居跡になる可能性が高いものと考えている。

掘立柱建物跡については、掘り方が深く、梁間が1間で、桁行の柱間が狭い1-6 H、2-15-17・19・20・22・3-25 H（2-22 Hについては、古墳時代のものと報告しているが、ここでは、弥生時代のものとして扱う）を分析の対象とする。これらは、弥生時代の遺構や土器が出土する範囲にのみ認められ、弥生時代に属するものと考えて良いと思われる。ただし、梁間が1間の3-32 Hなどについては梁間がかなり広く、他の建物跡との配置関係から古墳時代に属するものと判断した（柱穴内から須恵器甕の破片も出土している）。

これらの掘立柱建物跡が、竪穴住居跡に重複する例は、1-6 Hを除いて他にはない。また、竪穴住居跡の軒数と比較すると同数に近く、短期間の集落であったことからすると、これらの掘立柱建物跡は、竪穴住居跡と同時に存在していたものとするのが自然であろう。

形態としては2×1間と、3×1間のものがあり、細長い3-25 Hのような例もある。棟方位は、およそ南北棟と東西棟のものに分けられ、ほとんどは南北棟で竪穴住居跡群の内側に存在している。東西棟の1-6 Hと3-25 Hについては、やや外側に位置しており、また、1-6 Hが1-6 Jを切っていることから、東西棟は新しい要素と考えられる。

掘立柱建物跡と竪穴住居跡の関係についてであるが、竪穴住居跡とほぼ同数存在していることや、近接して構築された2-5・8 Jと同様に2-15・16 Hが近接していることから、掘立柱建物跡と竪穴住居跡は対になって存在していたものと考えたい。また、その組み合わせは、Ⅱ期の竪穴住居跡は東西棟の掘立柱建物跡や外側に位置する2-19 Hと、その他のものは近くに存在するものが対になるものと考えられる（付図1参照）。

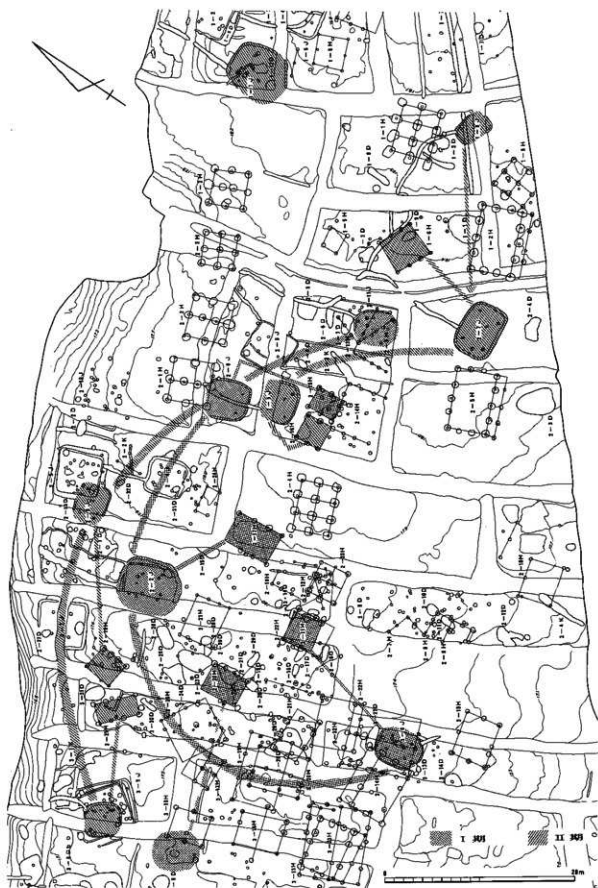
1-1 J、1-6 Jや2-11 Jについては、その対になる掘立柱建物跡が定かではないが、調査区外に存在するか、もしくは攪乱によって、消滅している可能性がある。1-1 Jについては、南側に1-8 Hが存在しているが、掘り方が浅く、桁行の柱間がやや広いため、ここでは除外して考えている。2-20 Hについては、推定を重ねることになるが、3-5 Jの南側に存在する可能性のある竪穴住居跡と対になるのかもしれない。

これら対になると考えられる建物跡の組合せとその大きさについて比較してみると、以下のようになる。

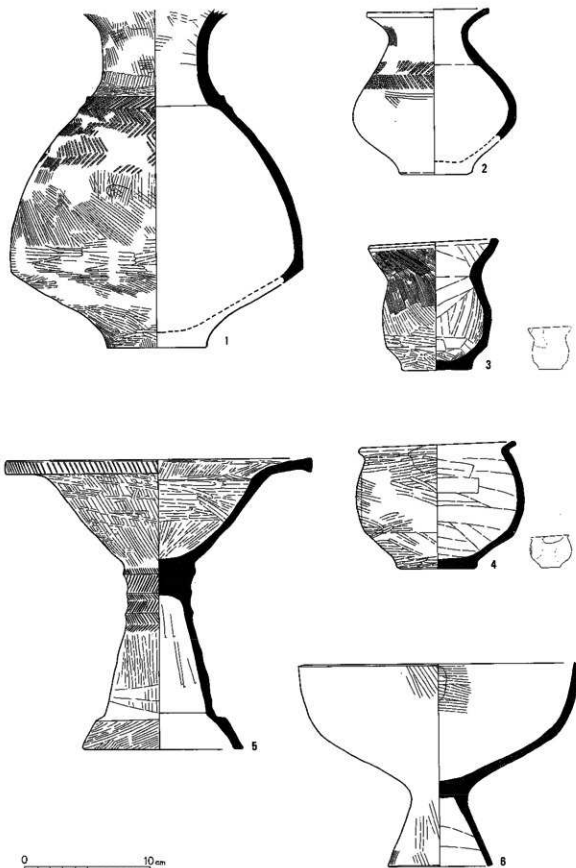
・ 2-2 J, (21, 2㎡) : 2-17H, 17, 9㎡	・ 2-5 J, (12, 5㎡) : 2-16H, 7, 9㎡
・ 2-7 J, 19, 0㎡ : 1-6 H, 14, 7㎡	・ 2-8 J, (16, 7㎡) : 2-15H, 7, 1㎡
・ 2-9 J, (11, 7㎡) : 2-19H, 8, 5㎡	・ 3-5 J, 10, 8㎡ : 3-25H, 9, 3㎡
・ 3-6 J, (16, 1㎡) : 2-22H, 10, 5㎡	* () 内は推定値

対になる建物跡の大きさは、2-8 Jを除き、およそ比例している。2-8 Jについては、北側コーナーの状態が明確につかめていないことから、その推定値はもう少し小さくなる可能性がある。

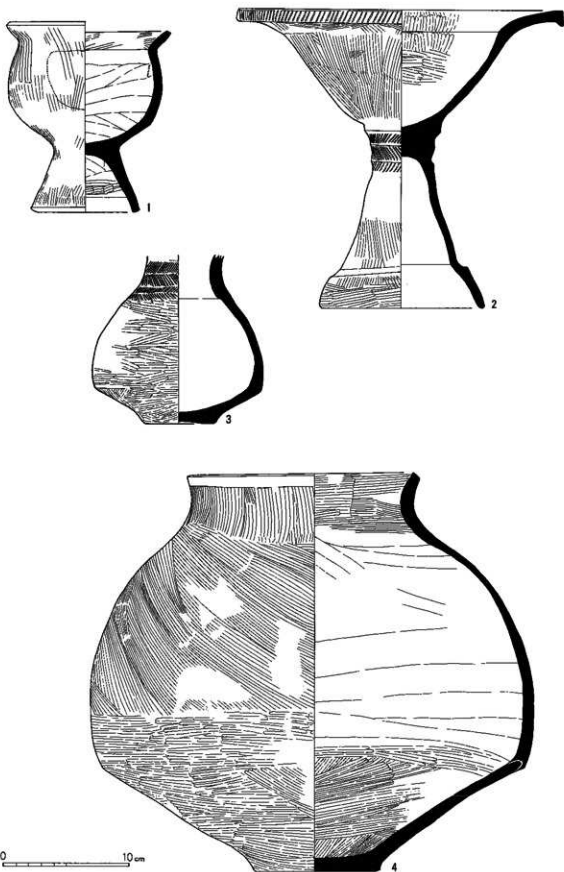
掘立柱建物跡の構造については、桁行は柱間が狭く、また、4間以上になる例がなく、柱穴は掘り方が大きくて深い。これらのことを考え合わせると、その構造は高床となると推定され、竪穴住居跡との組合せから、おそらく倉庫として使われていたものと思われる。（注4）



付図1 古新田遺跡の弥生時代建物群の変遷



付图2 国子塚遺跡出土土器 (G地点6号住)



付圖3 团子塚遺跡出土土器（1 G地点6号住、2 G地点8号住、3・4 E地点6号住）

竪穴住居跡と掘立柱建物跡の大きさが比例するのは、おそらく、居住人員と貯蔵される食料の量がおおよそ比例するからであろう。

食料に関連して、当集落の立地と生産基盤について、検討してみたい。

集落が展開されているのは、丘陵上の谷頭に近い地点で、やや特異な立地を示している。このような立地をもって、いわゆる高地性集落の一種とも考えられないこともないが、近年の周辺の調査により、こうした丘陵上に継続して多くの集落が営まれている状況が明らかにされており（注5）、また、環濠の在り方とも同調しない。竪穴住居跡については、焼失家屋の多さが比較的目に付くが、そのことをもって、戦闘と結び付けるのは短絡的過ぎる。ここでは、むしろ、生業形態との関係において、その立地の特殊性を理解したいと思う。

丘陵上では、保水性の高い土壌を利用した畑作が行われていた可能性も高いが、当遺跡の北方に位置し、同様の立地を示す弥生時代中期末～古墳時代初頭の北原遺跡（注6）や弥生時代後期の団子塚遺跡（注7、付図2・3）などは、瘦尾根上に竪穴住居跡が密集して築かれていたり、また、竪穴住居跡の建て替えも同じ位置で拡大、縮小していることから、大規模に畑作が展開されていたとは考えられない。むしろ、丘陵下に、複雑に入り組んだ狭い開析谷を利用した、小規模な谷水田の経営が主たる生業であったと考えられる。

なぜ、このような小規模な集落が、丘陵上に多く認められるのかについては、「食料確保のうえの危険を分散させ」（注8）るためと考えておきたい。また、このような小集落を頻繁な分村の結果と考えた場合、単位集団の「相対的な自立性」（注9）が認められるとともに、各竪穴住居跡に居住する世帯が倉庫を所有している状況から推察すると、消費レベルではあるが、各世帯の自立性もかなり高かったものと考えられる。

注

注1 浅羽町教育委員会 1991 「古新田」

注2 田中義昭 1982 「初期農耕集落の展開過程」 『島根大学法文学部紀要』文学部編 第5号—I

注3 小笠原好彦 1989 「古墳時代の竪穴住居集落にみる単位集団の移動」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集

注4 宮本長二郎 1991 「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」 『弥生時代の掘立柱建物』一編編—埋蔵文化財研究会

注5 柴田 稔 1991 「周溝墓と集落—団子塚（北山）遺跡—」 『静岡の原像をさぐる/』

注6 柴田 稔 1987 「北原遺跡」 浅羽町教育委員会

注7 柴田 稔 1992 「団子塚遺跡（I）」 浅羽町教育委員会

注8 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」 『考古学研究』第6巻第1号

近藤氏は丘陵上の小集落の在り方を、技術的に低位な段階という前提の中で捉えようとしており、短期的、技術的レベルの違いが当遺跡には、そのままあてはめることはできないが、集落数の増加と当地域に起きやすい洪水などの自然災害の被害を最小限にするため、分村化がはかれるのではないかと考えている。

注9 注8文献に同じ。

考 察

2) 古新田遺跡出土須恵器からみた 遠江地方の須恵器について

柴田 稔

1 出土須恵器の概要

遠江地方最古と考えられる須恵器は、浜松市下滝遺跡(注1)、磐田市明ヶ島10号墳(注2)などから出土しているTK73型式併行の例である(注3)。つづくTK216型式に併行する例には、磐田市浜部遺跡(注4)、同池之谷5号墳(注5)などがある。また、豊岡村大手内3号墳(注6)、磐田市京見塚古墳(注7)出土の須恵器もTK216型式に近いものとも考えることもできる。しかし、いずれも資料的には多くはない。特に、古墳以外の遺跡から出土する例は極めて稀である。

TK208型式に併行する須恵器は、それ以前と比較すれば発見例は多い。たとえば、浅羽町内に限定しても、古新田遺跡(注8)、新堀遺跡(注9)、五ヶ山A-1号墳(注10)、浅羽中学校グラウンド(注11)などがある。また、浜松市伊場遺跡(注12)、袋井市坂尻遺跡(注13)などの5世紀後半の主要遺跡からは、量の多少はあっても発見される。今、5世紀後半と考えられている古墳以外の遺跡は、それ自体の調査例が少ないことを考えれば、ある程度普遍的に須恵器が普及していたといえるが、各遺跡で発見される量は多くはない。また、伊場遺跡などの例を見ると、一般的な生活用具としての供給ではないように思う。

この点は、古新田遺跡においても考えて良いであろう。古新田遺跡から出土した須恵器は、他の遺跡での発見の出土量や、細片の量などが確認できない状況ではあるが、遠江地方の通例から考えれば多量といえる。しかし、すでに報告したように、堅穴住居跡で使用された可能性を持つものは少なく、さらに、使用痕を顕著にもつものも少なく、土坑内あるいは堅穴住居跡の廃棄後の窪地から出土する例が圧倒的に多く、祭祀に使用した後に投棄されたと考えるのが妥当と思う。

さて、当遺跡出土の須恵器の内、型式判断が比較的容易と考えられている蓋坏及び若干の他の器種を重点的にみてみると、個別には32-1・22のように、TK216型式に併行すると考えるのが不可能ではない資料がある。また、32-28などは、やや小型化すると同時に底部の鋭削りの範囲も狭く、TK23型式的な要素があるとみることでも可能かも知れない。高坏でも、33-8などはやや新しい要素と考えると良いかも知れない。したがって、大半はTK208型式に併行するものの、その前後の型式がまったく含まれないとは言いつけない。特に、TK216型式といえる資料が少量でも存在するという点は、この型式の資料自体が、遠江地方で出土することが少ないということを考慮に入れると、遺跡の存続時期を考える上では重要になると思う。

しかし、TK208型式の前後と考えると良い資料は、いずれも典型的なTK216型式あるいはTK23型式ではないことから、ここでは、第36図に示したような明らかに新しい資料以外は、TK208型式に併行すると考えて置きたい。したがって、デスクワークをほとんど行わないままに、ある程度時期が限定された一括資料としての扱いも可能であり、それに伴って幾つかの点も指摘できる。

このことを以後において若干検討してみる。

甕の概要

甕は、小破片では型式の判断が出来ず、坏・高坏など比較的型式判断が容易な資料を伴わない一部の破片などは報告書に掲載されることも少ない。

甕の生産量について 甕は、中村宏氏の指摘によると、第I型式第2段階では「大半」であるが、第I型式第3段階では「85%以上」となり、第I型式第4段階では「2分之二以上」となる。また、「第II

型式にあっては、甕の全生産器種に対して占める割合が減少の傾向を示す」(注14)というように、除々全器種に占める甕の割合は減少しているようであるが、少なくとも5世紀には半分以上を占めている。これを消費地である古新田遺跡でみると、やはり甕の破片が目立つ。しかし、口縁部の破片に限ってみると、20個体に満たない。これは、実測図化できた坯の量よりもはるかに少なく、全器種の50%に達するようなことはない。

このことをもって、ただちに甕の生産量が少ないという指摘にはつながらない。これは、恐らく生産の段階では多数を占めるという所見であるから、大型製品の焼成などでの失敗が小型の坯などに比較して多いということで、生産跡の灰原では、古新田遺跡と全く逆な現象になっていると予測することができる。したがって、生産跡での所見が、ただちに消費地での所見と一致するものではなく、生産跡での甕の量の減少は、生産技術の向上なども考慮しなくてはならないのであろう。

甕体部の調整について 古新田遺跡から出土した甕の体部の調整は、一口に言えば外面は平行叩き、内面は擦り消し及び半擦り消しで、内面が同心円叩きのままの例は稀である。

外面の平行叩きには、極端に細い例は含まれないが、全体に細い例が多い。

内面の叩きは、明らかに同心円になる例と半円以下になるいわゆる円弧叩きとがあるが、ここでは両者を含めて同心円叩きと呼ぶが、量的には後者が圧倒的多数を占めている。叩きには細くて直径の短いものと、太く直径の長いものとがあり、後者の場合にはいわゆる円弧叩きとなる。また、後者を円に直すとかかなり直径の大きなものになることから、当て具に刻まれた沈線自体が同心円でない可能性が高い。

また、同心円叩き痕内にこれに直行する凹凸が顕著な例と、全く見られないものがあることから、年輪に伴行して沈線が掘られたものと、柁目と交差して沈線が掘られたものがあると考えられる。

外面調整は大略で3類ある。

A類 丁寧な擦り消しで、叩きの痕跡が全く見られない。出土数は破片でも多くはなく、焼成状況から見ると2～3個体であらう。

B類 平行叩きを施した類で、資料的には最も多い。叩きは、やや左下がりの例が多いが、直下の例、やや右下がりの例もある。体部の上半では部分的に回転カキ目、あるいは横撫でを施す例が多く、カキ目は文様効果も持っている。体部下半では、叩きが交錯して格子目になることが多い。

C類 格子状叩きを施した類である。この類は比較的多いともいえるが、叩きの高い部分にまで交差する線が入る例はなく、低い部分に凹凸ができる程度で明らかに平行叩きの一種である。

内面の調整も大略で3類ある。

a類 丁寧な撫で調整で、叩き目が完全に擦り消された類である。擦り消しは、皮・布のような工具を使用しているようであるが、乾いた指のようなものが動いて、一見筥削り状になるものが極少量含まれている。

b類 撫で調整で叩き目の一部が消えているいわゆる半擦り消し調整の類である。この半擦り消しは、ほとんど叩きが見えない程度に擦り消されたものから、叩きの痕跡がはっきりと観察できるものまで幅広い。また、小破片になると、同一個体でも片方は擦り消し、他の一方は半擦り消しとして扱うような場合も生じているので、器面の凹凸がなくなるほどに擦り消されたもの以外は半擦り消しと呼べば、この類が最も多い。

c類 叩き目がそのまま残っている類である。この類は比較的に少なく、4-2Dの上面付近で採集した同一個体の一括資料を除くとほとんど見られない。

以上の各類の組み合わせは、Aa、Ba、Bb、Bc、Ca、Cbの6種類であるが、明ヶ島10号

填例のようなA bはみられない。

襷の体部の調整は、以上のように観察できるが、内面の調整に擦り消し・半擦り消しが圧倒的に多く、同心円叩きをそのまま残した例が少ないこと、体部外面の格子状叩きが見られる点などは、TK 23型式よりも古く、TK 216型式よりも新しいという特徴であろう。

なお、襷の口縁部は、図に示したものが13例あるが、これを見ると多彩なバリエーションがあり、分類できる状況にはない。

蓋環の概要

口縁端部の調整 蓋環の口縁端部は微視的になるがかなり多様な形態がある。

A類 (32-1・22) 丸い端部を有する類である。極少量の例がある。

B類 やや内傾する平坦面を有する類である。厳密には平坦になるものはなく、やや丸味を持つか、やや凹面となる。いずれも端部をほぼ水平に切り落としから、皮・布を使って水引きを行ったもので、中央に力を掛ければやや凹面をなすが、その分として内外に肥厚する。やや丸味を持つ例は、両側を揃むようににして水引きを行ったもので、技術的にはA類に類似している。

C類 内傾する凹面を有する例である。内傾の度合い、凹面の深浅など様々であり、A類に類似したものからD類に類似したものまである。量的には最も多い。

口縁端部をほぼ水平に切り落としてから、内面を主体に水引きしたもので、外側により多く肥厚する傾向にあるが、内面の斜め上から力が増えられることから、内面にも肥厚する。したがって、凹面の深いものは内外に肥厚する度合いが高い。また、この肥厚した部分に対してさらに調整を加えて肥厚部分を少なくしているものも多い。

D類 内傾する段を有する類 C類との区別は困難であるが、口縁端部を切り落としてから、外側半分を引き上げるように調整した結果できると思われる。典型的な例は少ない。

環受部の調整 形態の違いからa・bの2類に分けたが、基本的には同一手法と考えられる。

a類 上外方に伸びる類である。端部は比較的丸く、立ち上がりとの境に浅い沈線に伴うものが多い。

b類 水平に伸びる類 厳密にはやや上外方に伸びているが、立ち上がりとの境に沈線がないことから水平に見える。端部は鋭い感じが強い。

a・b類ともに、手法的には同じと考えられるが、水平に伸びる方が容易に成形できるように思われる。

底部・天井部の調整 筧削りを基準にしてI・II類に分けたが、筧削りの観察からI類はさらに細分できる。

I類 回転筧削りの施される類 基本的には大半がこの類であるが、筧削りの単位が狭い例や多回起の例も多い。筧削り痕に波があり、極端なものは静止筧削りに見える例(I a類)、筧削りの単位が狭く、一部には一度筧削りをした上にさらに筧削りを行う多回起の例を含む(I b類)、筧削りの単位が広く、筧削り痕が鮮明に観察できる例(I c類)、などがある。これらは、型式内の段階差とみることができ、I a・I b類はON46段階、I c類はMT84段階と考えられる。

II類 カキ目調整を施した類 全資料中で2例しかないが、その内の32-25は下半分は筧削りであり、32-23は筧削り痕も観察できることから、櫛状の工具によるカキ目ではない。

蓋稜の調整 一般的に蓋の稜は捻り出しによって成形されるが、その方法には2類があるように思われる。

I類 稜の下側に沈線に伴う類 稜の下側(轆轤上では上側)に外側の指を置いて、内側から押し

出すようにして稜を作ると、稜の上側はそれほど凹面を作らないで稜ができる。典型的例は、32—4・7である。

2類 稜の上下に凹面を有する類 外壁を摘み出すように成形したもので、特に稜の上側（軸上では下側）に外から力を入れるために、内面が膨らむ。これを防ぐ意図でその部分に内側の指を当てるために、かえって稜の正反対側が内面に膨らむことがある。32—8のように、稜の大きいものにこの特徴がでる。また、32—1などは、稜の上側の凹面端を篋削りしているために、形態的には凹面がはっきりしないものもある。

1・2類は、稜の作り方としては異なっているが、基本的には両者は併用されている。しかし、定期的に下る例では、異なった技術となるようである。

篋削り調整 この点については後項で他の時期の例も含めて整理する。

篋削りは、蓋環、高環、器台などに見られる。外面調整としてのへら削りは、すべて回転篋削りで、静止篋削りは存在しない。ただし、高環の脚孔部に関しては、孔部を篋で切り落とした後に、内外に残るバリ状の粘土層を静止篋削りしている。孔部外面のいわゆるバリ取りは、すべての例に観察できるが、内面は一部に観察できるだけである。

蓋環の底部・天井部、高環の坏部・蓋天井部の篋削りは、先に記したようにI a—I c類、II類があり、I類に関しては段階差と理解した。これらの篋削りの回転方向は、はっきりと観察できる52点の内44点が右回り（時計回り）で、左回りは8点であり、右回りの占める割合は約85%である。

高環の概要

高環には有蓋高環と無蓋高環とがある。

有蓋高環であることか確認できた資料は2点だけであるが、坏部は蓋環の坏部と変化しないため、坏として報告しているものの中にも有蓋高環が混入していることは十分に考えられる。

無蓋高環は、脚まで続く資料は3点だけであるが、破片は多い。坏部は、半球形を呈し口径に比較して深い。坏部にはすべて文様帯が見られ、文様は波文である。また、文様帯の上端は、2本の隆帯で区画されているが、下端には区画が見られないものが少なくない。

脚部はすべて短脚であり、孔は、3—4で台形であるが、一部に三角形の可能性のある例が含まれている。脚端部は、33—6のように丸味を持ったものが多く、33—7のように鋭いものは少なく、全体にシンプルである。

壺の概要

破片では高環よりやや少ない程度であるが、口縁部から底部まで連続したものは採集されなかった。大型と小型の2種類があり、大型壺に関しては、個体数が少ない。小型の壺の口縁端部は、坏の端部と類似した調整が行われている。器形がはっきりと解る資料は少ないが、扁球形で底部がやや尖っている。穴の位置は最大径よりやや上にあり、文様帯に穿孔している。文様帯は上下を沈線と区画しているが、下側の沈線を伴わない例も多い。小型壺の文様はすべて擬状文である。

体部から底部外面の調整は、平行叩きの上から撫で消しを行った後に一部にカキ目を施したものと、カキ目を伴わないものがあるが、篋削り調整を施した例はない。

その他の器種の概要

把手付き壺（33—13）、壺（33—11・12）、器台（34—8・38—32）などがある。

器台の台部は破片が小さいために、器形の復元に自信はないが、数箇所計測した結果で図のようになった。

2 須恵器の篋削りについて

浅羽町古新田遺跡からは、TK208型式併行の須恵器が多数出土し、遠江地方の同型式併行の資料を一気に増加させた。また、古新田遺跡の大きな特徴として、前後の時期が欠落していることから、一括資料としての扱いも容易である。したがって、伴出した他の遺物の研究にも有効であるが、ここでは、須恵器の篋削りの方向と、轆轤成形の観察に伴って考えられる若干の問題点を整理してみた。

静止篋削りから回転篋削りへ

須恵器生産における篋削りは、須恵器成形の重要な技法である。篋削りは、静止篋削りと回転篋削りとに大別されるが、基本的な流れとしては前者から後者へと発展する。これは、成形における轆轤技術の進歩と理解される。

静止篋削りから回転篋削りへの変化は、一気に行われるものではなく、ある期間のオーバーラップがある。また、器種によっても変化の時期に違いがある。蓋環に例をとれば、陶色古窯跡群では、TK208型式に至って回転篋削りがほぼ全てに行われるようになるが、古い段階では、基本的には回転篋削りであるが、一周の間に回転が止まったかのように観察できるものが少なからずみられる。これをON46段階と理解している（注15）。このような資料は、古新田遺跡にも認められる。

静止篋削りは、TK208型式の蓋環にはほとんどみられないとはいえ、より古い特徴の残存として、現実には存在し得る。このことは、TK208型式に限ったことではなく、6世紀の須恵器であっても同様である。顕著な例として埼玉県榑山窯跡群がある。8号窯の須恵器は、TK10型式に併行すると考えられるが、その蓋環の篋削りには静止篋削りが少なからず認められる（注16）。また、湖西市西笠子64号窯跡でも、TK209型式併行ともいえる資料に静止篋削りが認められる（注17）。

したがって、静止篋削りは、あくまでも古い須恵器の特徴であり、その古い特徴が新しい時期まで残存することに関しては、残存であり、古い特徴をもって古い時期であるという結論にはならないことを示している。

このような現象は、篋削りに限定されるものではなく、器種の変遷のなかにもみられる。若松良一氏の研究は、この点を良く表現し、磐田市飯塚古墳の無蓋の長脚一段透かしの高坏をTK10型式に併行させている（注18）。いうまでもなく、長脚一段透かしの高坏はMT15型式に至って出現する新器種であるが、これは、MT15型式であることの立証にはならない。この他にも、古い特徴の器種が新しい時期まで残存する例は多いが、篋削りの観点にもとりたい。

回転篋削りの方向について

回転篋削りは、蓋環に関してみれば、模式的には徐々に削りの範囲が狭くなり、やがて底部・天井部だけとなり、さらに篋切り未調整と併用になった後に、篋削りが観察できなくなる。もちろん、篋切り未調整が主流を占めて以降も、回転篋削りの技法は消滅するのではなく、遠江地方などでは8世紀に至っても行われているし、極端な表現としては現代も行われている。

回転篋削りに関しては、その削りの範囲や方法が、蓋環の時期を決定する程に重要であるのとは別に、回転方向も注目されて久しい（注19）。

しかし、この点については、一部で検討が試みられているが（注20）、現在に至っても新たな発見は見られない。

陶色窯跡における回転篋削りの方向（注21）は、表1で見えるようにTK208型式では、右回りが多数を占めているが、次第に左回りが増加し、TK209型式では左回りが圧倒的数となる。

これは、篋削りの範囲が徐々に狭くなり、篋切り未調整に変化するのとはほぼ同じ動きとして見られ

表一 陶器窯跡群での篋削りの方向

窯 名	右回り	左回り	計測個体数
TK208	92.4%	7.6%	118個
TK 23	68.7	31.3	99
TK 47	43.6	56.4	55
MT 15	23.8	76.2	105
TK 10	13.0	87.0	353
TK 43	11.8	88.2	68
TK209	0	100	43
※ 注5の文献から引用したが、本稿に合わせる用語の一部を変更した。			

小林久彦氏の調査した資料は表一2に示したが、対象物が比較的多い久居2号窯は、TK23型式に併行するものであろうが、篋削りの方向は約63%が右回りである。その他の資料もおおむねでは、TK208からTK47型式の数値に近いものであり、少なくとも氏の調査でも5世紀代の資料は右回りが多いという結論は得られる(注23)。

表一2 伊勢湾周辺の古窯での篋削りの方向

窯 名	右回り	左回り	個体数	備考
東山11号窯	100 %	0 %	13	TK23
久居2号窯	63.2	36.8	52	TK23
久居4号窯	60.1	39.9	165	TK23
小杉大谷窯	30~40	60~70		TK47
水神1号窯	63.6	36.4	11	TK47
水神3号窯	94.1	5.9	17	TK47
※ 注6の文献から引用したが、用語の一部を変更した。また、久居窯跡の数値は、計算方法に疑問があるがそのまま掲載した。				

となる。

湖西古窯跡群でも、先の資料とは正反対の数値を示す資料もある。

西笠子第64地点の資料(注25)は、TK43型式からTK209型式を主体としているが、圧倒的多数が左回りである。

峠場第1地点と西笠子第64地点の資料に見る違いは、先の前提に立てば、異なった技術の存在を考慮に入れなくてはならない。

異なった技術に起因するものであるとはいえないが、豊岡村新平山A4号墳から出土した特異な須恵器杯(注26)は、底部の調整技法からみればTK209型式に併行するとみて良いが、12個体すべてが左回りである(挿図1-1~4)。また、浅羽町北山1~4号墳出土の須恵器(注27)は、TK43型式併行では、右回り1(8%)左回り12(92%)であり、TK209型式併行では、右回り1(9%)左回り11(91%)である。また、遠江色の強いTK217型式併行では、右回り4(50%)左回り4(50%)である。

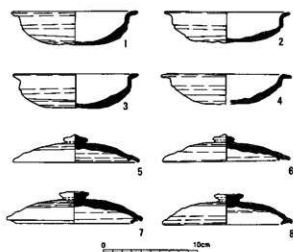
るわけで、これも成形技術の発展のなかで捉えることが可能ではないかと思う。

浅羽町古新田遺跡出土のTK208型式に併行する須恵器蓋環、および高坪の内、篋削りの確認できる資料は52体であるが、この内44個体は右回りであり、約85%を占めている。この数値はTK208号窯跡の数値よりは小さいが、右回りが圧倒的多数であるという点からは、同程度と理解できる。一方、湖西古窯跡群の峠場第1地点のTK47からMT15型式の蓋環でみると、右回りが約83%であり、これもTK208号窯跡に近い数値を表している。峠場第1地点のTK209からTK217型式併行の蓋環も右回りは約80%である(注22)。

湖西古窯跡群に戻るが、峠場第1地点での篋削りの方向は、陶器窯跡群のそれとは明らかに異なっていると同時に、TK208型式での数値に近いものが、新しい時期まで認められることが指摘できる。

湖西古窯跡群の場合には、さらに新しい段田第4地点(注24)のTK46型式併行の資料でも右回りが70%を占めている。したがって、7世紀後半に至っても篋削りの方向に関しては右回りが優位な例もある。

この篋削りの方向が、須恵器の成形技術と関連するという前提に立てば、湖西古窯跡群での技術の一部は、5世紀代から大きな変化がなかったというこ



挿図1 須恵器の回転方向と形態の差

いえ、成形痕・篋削りの方向の違いが形態にも現れている例であり、将来、工人集団との関係の研究に発展する可能性もある。

成形痕と篋削りの関係

成形痕と篋削りの方向に関しては、すでに内藤氏によって指摘されているが(注29)、篋削りの方向が、須恵器工人の利き腕の違いからくるものでないことは、生産跡である西笠子第64地点と峠場第1地点でも示しているが、それが成形技術に起因する可能性が高いという点は、次のような資料からも指摘できるかもしれない。

豊岡村新平山古墳群A・B群(注30)から出土したTK46型式からTK48型式に併行する壺坏の内、一般にノタ目といわれている須恵器の内外面にみられる、渦巻き状の凹凸を見せる軸轆成形痕(以後単に成形痕という)の方向と、篋削りの方向とが同一の個体で観察できる資料から、両者の比較を行ってみた。

表-3 成形痕と篋削りの関係(新平山A・B群)

型式名	成形痕(右) 篋削り(左)	成形痕(左) 篋削り(左)	成形痕(右) 篋削り(右)	成形痕(左) 篋削り(右)	計
TK46	0 (0%)	4 (15%)	4 (15%)	18 (69%)	26
TK48	0 (0%)	11 (55%)	2 (10%)	7 (35%)	20
計	0	15	6	25	46

この時期の須恵器は、篋削りが行われないものや、痕跡が浅くて観察ができないものも少なくない。したがって、両者が確認できた資料数は、合計46点であるが、これらを表-3にしてみた。

この表で、成形痕の方向が篋削りの方向と逆になる例が意外に多いことが理解できる。成形痕の方向と篋削りの方向が逆になる例は、古新田遺跡のTK208型式併行の須恵器にもみられるが、古い時期の例では観察が困難な場合が多い。

表で見るように、成形痕が右回りで篋削りが左回りの例は、調査した資料中にはみられない。また、両者共に右回りの例も少なく、基本的には左回りが優位である。

この古墳群への須恵器の供給は、大半が湖西古窯跡群と思われるので、その状況を繁栄しているであろう。このことは、篋削りだけを取り上げれば、TK46型式併行では右回りが85%を占め、殿田第4地点の資料と類似した傾向を示すことでも理解できる。

ちなみに、新平山A・B地点の奈良時代に属する壺坏を見ると、成形痕・篋削りは、左・左が7 (47

%)、右・右が6(40%)、左・右が2(13%)であるが、奈良時代では、両者共に同一方向になる例が多いことがわかり、古墳時代の須恵器とは大きな違いを見せている。また、新平山古墳群では、左・左の須恵器と、右・右の須恵器とは出土位置が異なっているために好例ではないが、他の遺跡の資料などを参考にとすると、篋削りは左回りが圧倒的に多くなる。

T K208型式から奈良時代までの資料を、断続的ではあるが篋削りの方向という観点から概観してみたが、次のような点を指摘したい。

- ① 遠江地方でも、陶邑古窯跡群とは時期的な整合はないが、篋削りの方向は、除々に左回りが多くなる。
- ② 篋削りの方向に右回りが多い時期には、成形痕の方向と逆になる例が多い。
- ③ 篋削りの方向の変化は、遠江地方全域で均一に進むのではなく、隣接した生産跡でも全く異なった状況になることもある。

まとめ

冒頭で記したように、古い特徴が新しい時期まで残ることは十分に有り得ることであるが、篋削りの方向も、遠江地方では古い特徴が残存した事実として理解したいが、ここでは一部のまとめを行う。

① 古新田遺跡出土の須恵器が、陶邑古窯跡で生産されたものであるか、湖西古窯跡群のような地方窯で生産されたものかは別として、一部の資料を除けば、陶邑古窯跡の製品に類似している。また、篋削りの方向という成形技法の一点も類似していることが理解できた。

遠江地方には、T K208型式併行にさかのぼり得る窯跡は発見されていないが、従来から、遠江地方にもT K208型式併行の窯跡の存在は予測されている(注31)。もし、存在するとすれば、古新田遺跡出土の須恵器は、その窯跡で生産されたものといえるかもしれない。しかし、この須恵器には、定形化以前の影響をON46号窯跡よりも多くは残していないので、古新田遺跡の須恵器と係わる須恵器生産が地方窯であったとしてもその開始は、T K208型式の時期と考えて良いであろう。

② 東山古窯跡群のように、比較的規模の大きな窯業跡であっても、生産開始後もまもなく地域色がみられるようになる(注32)が、同様なことが湖西窯跡群にも篋削りの方向という技法の側面から指摘された。このことは、峠場第1地点の須恵器は、形態的には坯蓋の稜の作り方に古い特徴や、坯身立ち上がりの成形に稚拙さを感じたりするような古い特徴を残し、篋削りの方向は、TK208型式とほとんど変化しないなどで確認され、峠場第1地点の須恵器は、T K208型式の時間的延長上で生産されたとみてよいこととなる。

③ 湖西古窯跡群での古い技術の踏襲は、T K43型式以降も続いていることは、峠場第1地点や殿田第4地点でも指摘され、新平山古墳群などの資料を参考にとすると、奈良時代の直前まで続いたと考えられる。

したがって、湖西古窯跡群の須恵器生産は、T K208型式以降、地域色を深めながら進展しているが、その技術の一部はほとんど発展していなかった。しかし、一方では西笠子64号窯で認められたように、全く異なった成形手法も認められ、少なくともT K43型式頃に、湖西古窯跡群にない技術が加わったことも指摘できる。この、新成形手法の導入が、長脚一段造りの高坏が、磐田市飯塚古墳(注33)などの例から、少なくともT K10型式併行には出現していることなどから、その時期だとすれば、陶邑古窯跡群の動向と一致するのであるが、それにこだわる必要もないであろう。というのは、湖西古窯跡群では、その後も独自の発展をし、遠江色の濃い須恵器の生産を行っているからである。

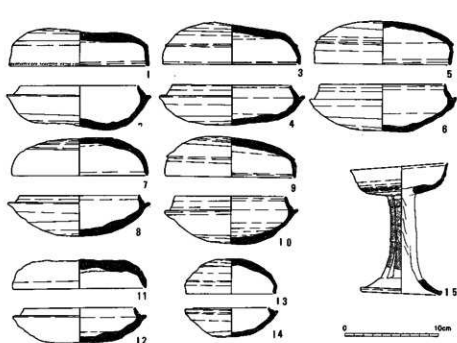
④ 遠江地方で発見される須恵器は、このような理由から、同一の個体の中に古い特徴と新しい要素とが混在することが多い一方で、そのような個体に混じって、新しい特徴が極端に目立つものがあることが考えられる。

この点を少し指摘して見る。

挿図の1～6は、磐田市飯塚古墳出土の蓋坏である。飯塚古墳は、TK10型式併行(MT15に極めて近い例が含まれる)からTK217型式併行までの須恵器が出土しているため、図に示した6個体がすべてTK10型式併行であるという指摘は、デスクワークによるものであることを明記しなくてはならないが、1・2は、一部が窯着していた痕跡がありセットであることは確実である。蓋の縁は消失し、口縁端部は丸く造られているが、段にあたる部分には、わずかな変化線がみられる。また、口縁端部外面には、叩き痕が残存する。坏の立ち上がりは、内上方に伸び、端部は丸く、断面は三角形になる。この両者は、一部に古い特徴は残るが、よりTK10型式に近いものと理解できる。3・4は、多数の中から抽出したものであるが、蓋の縁は丸くなるが残存し、口縁端部には内傾する甘い段がある。坏も同様に口縁端部には内傾する甘い段がある。この両者は、TK10型式併行であるという前提で、古い特徴を多く残しているといえる。また、胎土・焼成を見ると、両者の生産地が異なっていることが予測される。5・6は、参考資料であるが、飯塚古墳出土の尾三系のTK10型式併行の須恵器である。

7～10は、磐田市馬坂上22号墳(注34)から出土した資料である。出土状況からみれば一括資料であるが、古墳出土である点は考慮しておく必要がある。7・8は、他にセットになるものがない。蓋の縁は完全に消失して丸くなり、口縁端部は形骸化した甘い段を有している。坏の立ち上がりは低く、断面は三角形である。9・10は、5個体の内から2個体を抽出したものであるが、蓋の縁は沈線化して丸く、口縁端部には内傾する形骸化した段を有している。坏の立ち上がりは、8に比較すれば高く、口縁端部には形骸化した甘い段を有している。この両者は、TK43型式であろうが、比較すれば前者に対して後者の方が古い特徴がある。この両者も生産地は異なっていると考えられる。

11～14は、浅羽町貫名地A6号墳(注35)から出土したものである。13・14は、遠江色の強いTK



挿図2 胎特徴をもつ須恵器

46型式併行の須恵器であるが、11・12は、一見するとTK209型式併行の蓋坏と見えるが、2個体だけ出土している。蓋の天井部は、篋切り後粗雑は撫で調整が行われているが、篋切り痕が明瞭に残っている。坏の底部も同様である。TK209型式併行でも、完全に篋削りが省略さ

れる例は極稀であり、TK217型式以降の特徴であろう。この須恵器が、TK46型式まで下るかは検討を要するが、少なくともTK217型式より古いことはなく、一風変わった資料である。

以上の資料は、いずれも古墳出土であり、「私の考え」が介在しているが、遠江地方の須恵器の中には、このようなバラエティーがあるという点を考慮に入れて欲しい。

須恵器の大きさや形は、それなりの要求により変化するものであろうから、ある時期を考えた場合には、一定の決まりに近いものは存在し得る。しかし、この考えにしたがってすべてを解決することは困難であり、成形の技術も時期を考える基準とすべきであるという見解はすでに示しているので(注36) その補強であると理解して欲しい。

⑤ 成形痕・篋削りの方向の観察をする折に、カキ目の方向や波状文の方向、あるいは、横撫で水引きの方向なども調査してみた。これらは、確実に観察できる例は少ないが、いずれも篋削りの方向と一致し、陶器古窯跡群での所見と同様であった。

以上のような検討から、篋削りの方向、あるいは、成形痕と篋削りの方向との関連は、成形の技術的な側面と係わるであろうことを指摘したが、具体的には解決しなくてはならない点が多い。

実験的には、小轆轤を使用して個体の成形を行っているが、これから得られた結果が、ただちに本稿で指摘した内容になるものではなさそうであり、今後の課題が多いことを強調して稿を終わりたい。

注

注1 浜松市教育委員会 1985 『下滝遺跡』 浜松市教育委員会

注2 中嶋郁夫 1992 『磐田市史 史料編1 考古・古代・中世』「49 明ヶ島古墳群」 磐田市

注3 明ヶ島10号墳は、横穴式木芯粘土室を埋葬施設とした後期の古墳であるが、墳丘および周溝から埴輪と共に出土した甕は先の埋葬施設とは関連しないようである。また、下滝遺跡の史料は出土遺構がはっきりしない。

注4 前田庄一 1987 『浜部遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会

注5 竹内直文 1991 『池之谷古墳群発掘調査報告書』 磐田市教育委員会

注6 柴田 稔 1993 『豊岡村史』 資料編Ⅱ 「考古・民俗」 磐田市豊岡村

注7 注2文献 「30 京見塚古墳群」

注8 本書掲載

注9 1991～1992年に静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査

注10 山本義孝 1992 『五ヶ山A-1号墳』 浅羽町教育委員会

注11 グランドから生徒が採集した。このグランドの埋め立てに使用された土は浅羽町五ヶ山付近のものであり、そこから運ばれたと思われる。

注12 浜松市教育委員会 1987 『伊場遺跡』 遺物編4

注13 吉岡伸夫 1985 『坂尻遺跡』 袋井市教育委員会

注14 中村 宏 1978 『陶器』Ⅲ 大阪文化財センター

注15 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店

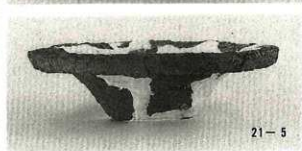
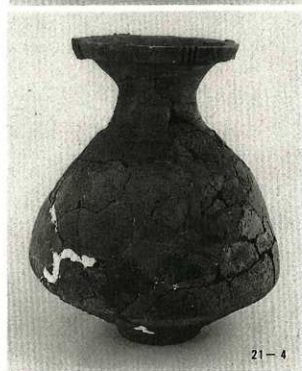
注16 水村孝行ほか 1982 『桜山窯跡群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書7 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

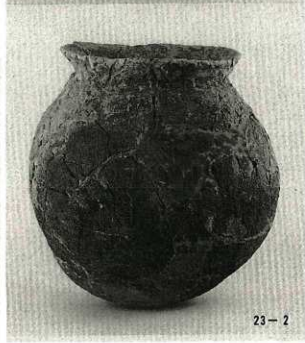
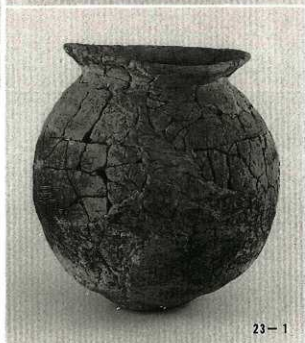
注17 後藤建一ほか 1987 『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』 湖西市教育委員会

注18 若松良一 1990 『調査研究報告』 「造り出し出土の供献土器について」 埼玉県立きたま資料館

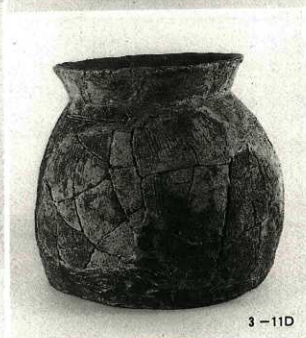
- 注19 田辺昭三 1966 「陶邑窯址群Ⅰ」 平安学園考古学クラブ
- 注20 小林久好 1987 「水神古窯」 「第6章・考察」 豊橋市教育委員会
- 注21 窺削りの方向は、個体に表れた軌跡で見た。したがって、轆轤の回転方向とは逆になる。また、窺削りの方法については、通説に従った。
- 注22 後藤健一ほか 1992 「湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書」 湖西市教育委員会
- 注23 注20文献
- 注24 注22文献
- 注25 注17文献
- 注26 1992 「新平山遺跡」 (写真図版編) 豊岡村教育委員会、注6文献
- 注27 柴田 稔 1987 「北山遺跡」 浅羽町教育委員会
- 注28 注22文献
- 注29 内藤 匡 1962 「古陶磁の科学」 原本に当たる機会を得ていないので、注5文献から引用した。
- 注30 注26文献
- 注31 1979 静岡県のシンポジウム2『須恵器—古代陶質土器—編年』での討議の中で、川江秀孝氏が発言したのが最初と思う(71頁)。
- 注32 1983 斎藤孝正 「名古屋大学文学部研究論集」第86号 「猿投窯成立期の様相」
- 注33 1992 「静岡県史」資料編3などに掲載されているが、一部に表現の違いがあるので挿図2—15に掲載した。
- 注34 中嶋郁夫 1992 「雪田市史」資料編Ⅰ「第4章 古墳時代」 遺物の実測図は、柴田が作成したものを用了。
- 注35 注27文献
- 注36 柴田 稔 1983 「王子遺跡」 浅羽町教育委員会

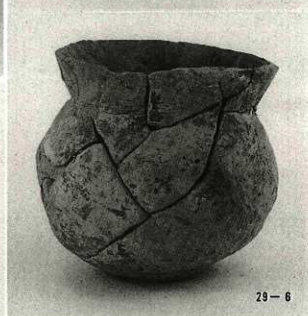
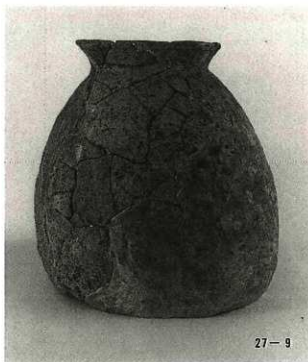
写真図版













29-11



29-14



29-15



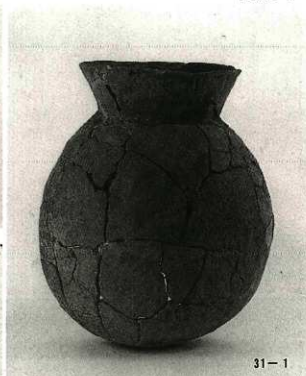
29-13



29-17

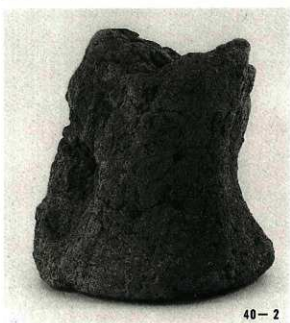


30-1











39-13



39-3



39-7



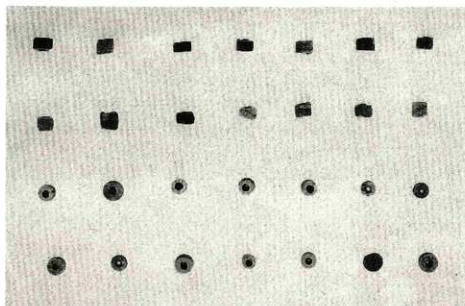
39-4



39-2



39-1



別 編

別編 1

古新田遺跡建築遺構の復原的考察

宮本長二郎

古新田遺跡の古墳時代中期の集落遺構は、集落規模としては大きい方ではないが、掘立柱建物を中心とする建築構成は他に類をみない斬新さを示すとともに、建築形式についても時代の最先端を行くものとして、考古学上、建築学上に重要な位置を占める。

本稿は、最も高揚した建築活動を示す古墳時代中期における古新田遺跡の掘立柱建物について分析し、その時代的特性を明らかにする。とくに当遺跡に特徴的な屋内棟持柱付きの大型平屋建物は、他の類例を含めてその成立と展開を記すことにする。

1. 古新田遺跡の掘立柱建物

平面規模 古墳時代中期にかかる掘立柱建物遺構52例について、その平面規模と面積、桁行・梁行柱間寸法の最大・最小・平均値を表わしたのが表1である。

古墳時代の掘立柱建物跡52棟のうち総柱建物10棟とそれ以外に分けて、桁行×梁行柱間数による平面規模別に表わし、弥生時代の10棟の掘立柱建物例についても古墳時代との比較のために加えた。備考欄には庇付き建物6例と、屋内棟持柱付き建物9例の規模別棟数内訳を示し、庇付き建物の規模は庇を含めない身舎規模で表わした。

平面規模は桁行で2間から7間まで、梁行は1間から6間までである。桁行で最も多いのは3間15棟
表1 古新田遺跡の掘立柱建物形式別分析表

平面規模 (間)	棟数	面積 (cm)			桁行柱間 (m)			梁行柱間 (m)			備考
		最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	
2×1	3	15.7	10.3	12.8	2.15	1.56	1.86	3.64	3.34	3.49	庇1 屋内棟持2 庇3
2×2	2	18.3	15.4	16.8	2.37	2.24	2.31	1.93	1.71	1.82	
3×1	1			33.3			2.48			4.48	
3×2	8	31.3	12.2	18.9	2.12	1.29	1.71	2.50	1.32	1.80	
3×3	4	27.5	15.4	22.4	2.12	1.47	1.77	1.52	1.17	1.40	
4×2	1			31.0			1.80			2.15	
4×3	7	31.1	21.4	26.4	1.89	1.28	1.59	1.50	1.30	1.43	
4×4	1			25.8			1.30			1.24	
5×2	1			20.2			1.12			1.80	
5×3	1			13.8			0.86			1.07	
5×4	10	50.3	21.5	28.0	1.63	1.06	1.35	1.59	1.00	1.38	屋内棟持4、庇1
6×5	2	66.7	35.7	51.2	1.48	1.10	1.29	1.50	1.08	1.29	屋内棟持2、庇1
7×6	1			58.1			1.22			1.15	尾内棟持1
2×2	8	19.1	10.5	14.1	2.11	1.67	1.86	2.26	1.57	1.85	総柱建物
3×2	2	21.4	20.6	21.0	1.74	1.73	1.73	2.06	1.96	2.01	総柱建物
2×1	4	10.5	7.1	8.3	1.72	1.21	1.47	3.24	2.39	2.84	弥生時代
3×1	6	17.9	8.5	13.4	1.71	1.02	1.33	3.83	2.13	3.15	弥生時代

で、以下2間13棟、5間12棟、4間9棟、6間2棟、7間1棟となり、3間以下の小規模なものが28棟で過半数を占める。梁行では2間22棟が最も多く、3間12棟、4間11棟、1間4棟、5間2棟、6間1棟であり、梁間2間以下と3間以上が半々となっている。とくに、桁行4間以上の24例のうち、梁行が桁行と柱間が同数か1間少ない規模とするのは21例と多く、古墳時代の平屋建物の平面規模の決め方を特徴づけている。

壁面構成 平屋建物の側柱配置の状況によって側壁面の軸部がある程度推定される。古新田遺跡の桁行3間以上、梁行3間以上の建物では、柱間数が増えて規模が大きくなるほどに柱間寸法は狭くなる傾向がある。すなわち、規模別の平均柱間寸法を求めると、桁行では3間1.73m、4間1.58m、5間1.29m、6間1.29m、7間1.19m、梁行では2間1.86m、3間1.39m、4間1.37m、5間1.29m、6間1.15mとなっている。

規模の小さい建物は柱間寸法をできるだけ大きくとって面積を広げようとする意識は、自然発生的な感覚である。いっぽう、表1で明らかなように、桁行4間以上の柱間寸法は1.0~1.6mの範囲にあって狭いことが特徴であり、建物規模が大きくなるほど柱間寸法を狭くして、柱間数を増やす形式は、弥生時代以来のものであるが、とくに古墳時代中・後期に顕著である。

次に、平面規模と柱径の関係についてみると(表2)、総柱建物では平屋建物よりも高い柱を用いるために平均柱径が22cmと

表-2 建物型式別柱径

建物型式	棟数	最大	最小	平均
総柱建物	10	28 ^m	18 ^m	22.0 ^m
桁行3間	10	28	16	18.6
4間	7	24	14	18.4
5間	11	24	12	17.2
6間	2	18	14	16.0
7間	1			14.0

最も大きい値を示し、平屋建物では、桁行3間18.6cmから桁行7間14.0cmまで漸次縮小している。つまり、建物規模が大きくなるのに反比例して柱間が狭くなり、かつ柱径の細い柱を用いているのである。

以上のような傾向は、7・8世紀とは全く異なるもので、7世紀以後は梁行2~3間、柱間寸法は6~7尺が一般的で、宮殿・官衙では規模に比例して柱間も柱径も大きくなる。

柱間を狭くして細い柱を用いた側壁面の軸部形式がどのようなものであったか、平面的な遺構からのみでは窺い知ることはできない。

家型埴輪では、5世紀後期以後の平屋建物の場合には柱形を表現しない例が全国的に多い。柱形を表わすものは板壁や土壁の真壁であり、柱形を表現しない例や、粘土紐や朱線・刻線などで上下数段に区画する例は草壁で、区画線は草壁を外から押えて固定する押縁を表わしているものと考えられる。

古新田遺跡の平屋建物の側壁の柱配置の間隔の狭さと柱径の細さは、草壁構造に適した形式であり、家型埴輪の傾向にも符合していると云えよう。

総柱建物 総柱建物は2×2間8棟と3×2間2棟の10棟であるが、最小規模の2×1間3棟はいずれも棟通りが後世の擾乱を受けて桁行側柱列のみ検出された結果、梁間1間となっているもので、2×2間総柱建物の桁行柱間、梁間寸法とはほぼ近い値をとっていることから、2×1間は2×2間総柱建物であったと考えられる。したがって、総柱建物は上記の2×2間を含めて13棟となる。桁行2間規模の建物は主として総柱建物としていたようである。

古墳時代の桁行2間総柱建物と弥生時代の2×1間を比較すると(表1)、平面積で古墳時代は弥生時代の1.5~2倍となり、桁行3間規模では平均で1.5倍となっている。弥生時代の2×1間、3×1間の掘立柱建物は全て高床建築と考えられるから、両時代とも高床倉庫とすれば、古墳時代総柱建物は弥生時代より面積で1.5倍以上に収納能力が増えたことになる。

総柱建物は、屋内に立てて床を支えるための東柱の位置を、側柱と梁行方向の一直線上に揃えるのを通例とするが、当遺跡では2×2間10棟のうち3棟は、棟通りを3等分する位置、すなわち、側面2

間に対して棟通りを3間に割り付けて東柱を立てている。

この場合の床組は当然、棟通りの東柱上に大引または台輪を引通していたことになる。また、古墳時代の高床式家型埴輪では床の位置に突帯やへ字形突帯を巡らせて、長押や台輪ともとれる表現がみられることから、総柱建物の床組構造は桁行の両側面と屋内に横梁材（大引・台輪・長押など）を渡して床材を受ける形式であったと考えられる。

弥生時代の梁間1間の高床建築の床組構造は、大引貫式、際束式、分枝式、造出柱式、屋根倉式の5型式があり（注1）、造出柱式（登呂型）のみ側柱通りに台輪を架ける以外は、梁行に大引を架け渡す形式と推定されるのに対して、総柱式高床建築は、梁間を拡大して東柱が加わるのみでなく、床組構造も全く新しい形式として古墳時代に登場するのである。

屋根形式 総柱建物のうち2×2間6棟と3×2間2棟の妻側中央柱は、妻側柱筋よりも約柱1本分を外側にはずして立つ近接棟持柱となっている。すなわち、総柱建物の屋根は切妻造が主であったことを示している。

平屋建物で近接棟持柱をもつ例は3×2間（3-11H）と4×2間（4-6H）の2例のみであり、その他の平屋建物は前記のように梁行3間以上が多いことから、平屋建物の屋根は入母屋造あるいは寄棟造が主であったと考えられる。

近接棟持柱は弥生時代にはすでに平屋建物と高床式建物に使用されているが、古墳時代に入ると平屋建よりも高床建築に多く用いられるようになる（注2）。このような傾向は家型埴輪についても同様である。

古新田遺跡の総柱建物の機能は、3×2間規模のものはその配置状況から祭祀にかかわる高殿と推定されるが、桁行2間規模の例は穀倉の役割を荷っていたと考えられる。

穀倉の場合は、収納効率を高めるために側面には出入口を設けず、切妻屋根の切妻壁面に開口部を設けていたものと思われ（注3）、当遺跡の総柱建物に近接棟持柱の例が多いのも、切妻屋根の構造上の安定性を高めるほかに、穀倉としての機能に依るところ大であったと思われる。

2. 屋内棟持柱付建物の成立と展開

種類と分布 棟持柱には、伊勢神宮社殿のように屋外に独立して立て、棟木先端を受ける独立棟持柱と、出雲大社本殿のように妻側側面に接して棟木を支える近接棟持柱、および建物内部で棟木を支持する屋内棟持柱がある（注2）。いずれの形式も弥生・古墳時代の独立柱建物に採用されて、大型建築や特殊な高床建築にみることができ、検出例も少なく、一般的に普及していたとは云えないが、それだけに高度な建築技術を駆使した建物の一形式であったと想定される。

屋内棟持柱には桁行の長い建物の場合に棟木を鑑ぎ足した接合点上に立てたと思われるものや、独立棟持柱と共用している場合もある（注4）。これらの例は中継式棟持柱と呼ぶべきもので棟持柱の数は1～3本の例があるが、本項では建物内部の中央棟通りに2本の柱を両側面から等位置に立てる中柱2本式棟持柱の場合について取り上げ、その構造形式を明らかにしたい。

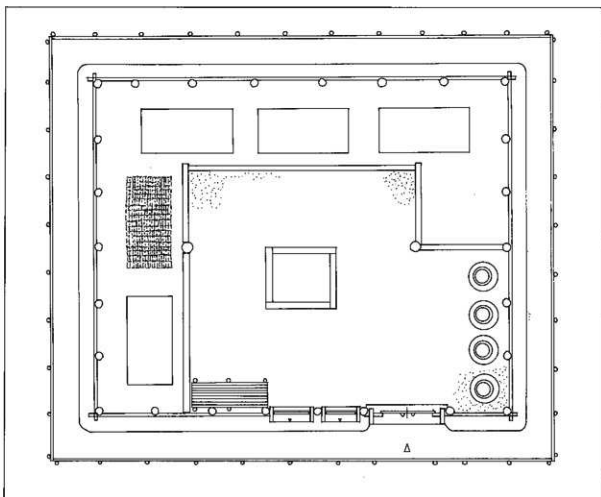
中柱2本式の屋内棟持柱の発掘遺構例は福岡市吉武高木遺跡（弥生時代中期初頭）、古新田遺跡・東大阪市登池東遺跡・大阪府高石市大園遺跡（以上5世紀後期）、大阪市難波宮下層遺跡（5世紀中～後期）、大阪市山之内遺跡（6世紀）、奈良県桜井市阿部丘陵中山地区遺跡（6世紀後～7世紀初期）の7遺跡24遺構例である（表-3）（注5）。吉武高木遺跡を除いてすべて古墳時代であり、7世紀以後の例はない。したがって、この形式は弥生時代に出現して古墳時代中・後期に盛期を迎え、畿内を中心に分布している。

柱に接して梁を前後の母屋桁間に架け渡して、妻側屋根の垂木掛けとすれば良い。中柱2本式棟持柱でこの母屋桁柱を伴う例は難波宮下層遺跡以外にはないけれども、架構形式は母屋桁柱の有無にかかわらず同様であるとすれば、母屋桁柱に代わる母屋束を梁で支持する方法を探れば解決する。

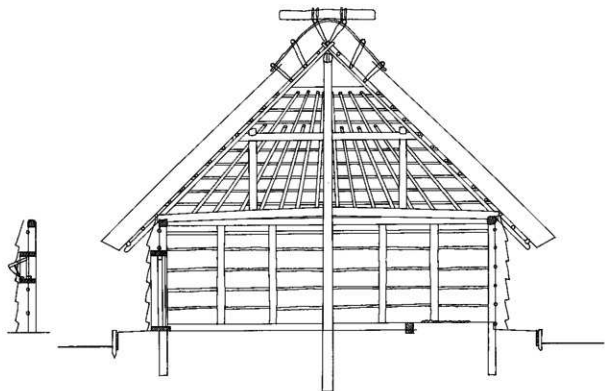
中柱2本式の場合は、梁間が長過ぎて、梁上に合掌あるいは東立てによる棟木支持の方法が採れないことから発生した架構法であると考えられるから、梁を側桁間に一木の太材で架け渡すのではなく棟持柱から両側面に梁を二本に分けて架け渡せば良い。すなわち、棟持柱で梁端部を桟差して受け、他端は側桁に渡し架ける方法である。この場合の梁端部の桟は蟻落し、あるいは込栓によって棟持柱と仕合わせる形式も考えられる。現在のところ、建築材以外で送り蟻や込栓の形式が弥生時代後期～古墳時代に成立しており（注10）、建築材で使用された例はないが、使われた可能性は指摘できよう。

以上のように中柱2本式棟持柱の入母屋造屋根の小屋構造を想定することによって、古新田遺跡3-1H建物址を復原すると図1-5のようになる。9m前後の大梁を架ける技術をもちながら、古新田遺跡の梁行4.6～7.5mの中柱2本式棟持柱付き建物の全てが2本繋ぎの形式であったとは考えられない。恐らく梁行6～7mは2本繋ぎで、6m以下は1本の大梁で母屋束を支持していたと思われる。

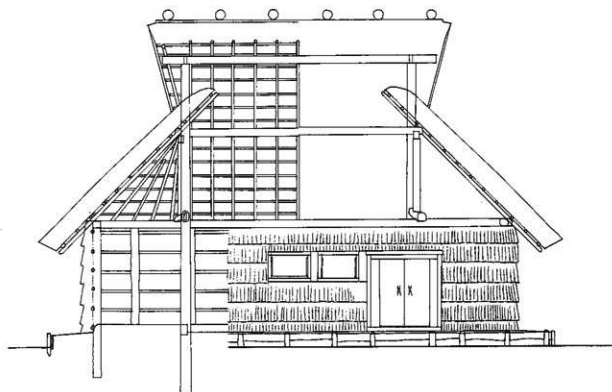
中柱2本式の成立と展開 現状では中柱2本式の成立は弥生時代中期初頭の吉武高木遺跡大型平屋建物を初現としたが、以後の弥生時代から古墳時代前期にかけての時期には現われず、古墳時代中・



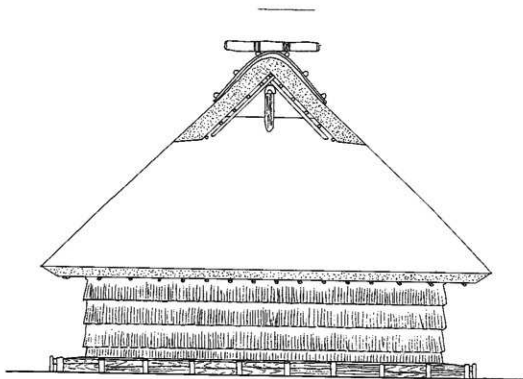
第1図 3-1H平面図 1/80



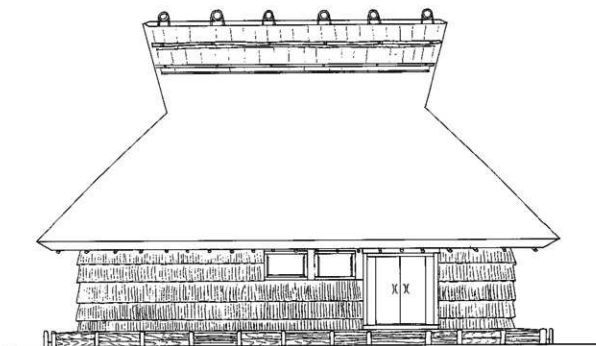
第2図 3-1 H梁行断面図 1/80



第3図 3-1 H桁行断面図 1/80



第4図 3-1 H側立面図 1/80



第5図 3-1 H正立面図 1/80

後期に再出現する。このような事実からみて、吉武高木遺跡の中柱2本式構造の形式は時期的に成り立つかどうか疑問が残るところであるが、大型建物址に近接する王墓群から出土した多鈕細文鏡、細形銅剣などは朝鮮半島製とみられ、さらに周辺から半島南部の無文土器が出土しており、大型建物もまた朝鮮半島渡来の新しい建築様式と技術によって建設された可能性が高いとみられる。

いっぽう、古墳時代中期以後の時代は、朝鮮半島渡来の土器製作技法による須恵器製作が4世紀末から5世紀初頭頃からはじまり、これと時期を合わせて、弥生時代終末期に成立した総柱建物の高床建築技法が5世紀以後に急速に全国的に普及している事実は、朝鮮半島系の文化が古墳時代中期に入って急進展したことを示しており、それにとともに中柱2本式の朝鮮半島の建築技術が再移入されたことは明らかであろう。

弥生時代中期初頭と古墳時代中期では時期的な隔たりが大きいが、吉武高木遺跡の寄棟造形式に対して、古墳時代の入母造屋根の小屋構造は前述のようにはるかに発展した形式をもつ。また、吉武高木遺跡と同じ福岡市内の久保園遺跡の中柱1本式棟持柱の例のように、大型建築の架構技術が定型化されず、初期段階にあることを示し、吉武高木遺跡とともに、朝鮮半島に近接した北九州にのみ例があることも、この時期的な隔たりによって吉武高木遺跡の大型建物の中柱2本式の成立を否定する理由とはなり得ないであろう（注11）。

中柱2本式が古墳時代中・後期の豪族居館の大型高床倉庫や大型殿舎として使われたことは想像に難くない。建物の規模が格段に大きいことは、建物の屋上を飾る勝男木や千木とともに支配者層の権威の象徴として重要な要素であったからである。

しかし、7世紀以後になると身舎の梁間が7mを超える大型建築は殆んどみられなくなる。これは、6世紀末の飛鳥寺建設に象徴される新しい建築様式や、7世紀に入って遣唐使・遣唐使による新しい大陸文化の移入にとともに、建物の格が従来とは異なる形式で表わされる。すなわち、身舎の2辺あるいは4辺に庇を付し、また、従来の高床建築とは異なる技法による全面床敷きとする大型の住居建築が、土間床を中心とする従来の住居に代って支配者層に採用されたことに起因するであろう。

弥生・古墳時代の超大型建築の出現は、権威の象徴としてその建築架構技術を極限にまで高めて、7世紀以後の建築技術に決して劣るものでないことは明らかであるが、古墳時代文化とともに衰退するのである。

注

(注1) 「高床建築の成立と展開」 東アジアの古代文化73号、大和書房 1992年10月

(注2) 「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」「弥生時代の掘立柱建物」埋蔵文化財研究会、1991年2月第5節棟持柱に詳述。

(注3) インドネシアのバリ島テンガナン村・ロンボリ島ジュンガ村・サデ村の高床倉庫は屋根倉式で入母屋屋根の切妻上部に小さな開口部を設けている。スンバワ島デサボト村では屋根倉式でなく網代壁の高床倉であるが入母屋屋根の切妻部に開口部がある。稲を収納する時は穂束を投入し、取出すときは梯子を掛ける。

(注4) 群馬県三ツ寺遺跡2号建物址（5C後半）は13×2間で、屋内棟通りに5本の棟持柱が立つ中継式の例である。独立棟持柱と屋内棟持柱を共用する例は鳥取県大山池2・8号住居址（弥生中期）、群馬県原之城3号建物址（6C）、岡山県七井1号建物址（古墳時代）などがある。

(注5) 「吉武高木遺跡」は福岡市教育委員会より資料提供。「堂池東遺跡の概要」1992年9月 東大阪市教育委員会。「大園遺跡発掘調査概要Ⅲ」大阪府教育委員会1975年。「難波宮址の研究第九」大阪市文

化財協会1992年。「阿部丘陵遺跡群」桜井市教育委員会、1989年3月。

(注6) 「久保園遺跡」福岡市教育委員会、1983年。

(注7) 「伊勢遺跡現地説明会資料」守山市教育委員会、1992年9月。

(注8) 吉武高木遺跡の大型掘立柱建物址は1992年11月16日の報道発表によると規模は桁行5間12m、梁行4間9.5mで、四方に縁束がめぐる高床建築として若林弘子氏の復原案とともに公表されたが、弥生時代の高床建築の平面形式は梁行1間とする拙論(注3)から、当遺跡の大型建物址は平屋建築にすべきである。報道発表後に福岡市教育委員会から遺構実測図の提供を受けて検討したところ、縁束址とされた柱掘形と身舎の柱掘形の軸線方向が異なり、また、掘形深さは同じであるが、身舎の二段掘りに対して外側掘形は一段で形式も異なり、かつ外側の南側柱列は未検出であること、また、身舎内部にはこれらの柱掘形より深い柱穴2個があり、この2個の柱穴は外側柱と柱筋が揃い、かつ東西柱筋の中央通りにあるのに対して、身舎とされた内側柱筋とは合わず、棟通りともずれる位置関係にある。このような事実関係からみて、内外の柱穴は2棟の異なる建物が重複関係にあるものとみて、外側を桁行6間、16.5m、梁行5間13.0m、中柱2本式榑持柱付き建物であると考えたい。但し、この考えは南側柱が未検出と仮定しているため、近い将来の未発掘部分を含めた再調査の結果が待たれるが、いずれにしても平屋建物の大型建築であることには変わりはない。

(注9) 伊勢遺跡S B 1建物址についても、現説資料(注7)では4×2間総柱建物の高床建築としているが、床束柱とする3本の柱掘形は軸線が棟通りと方位を若干異にし、柱間も側柱間よりやや広く、また掘形深さが側柱と同じで側柱と同様に斜路をもっていることは、地上高さが側柱の半分前後で足りる束柱としては不自然であることから、この3本の柱掘形は桁行2間、梁間1間の高床建築の南側柱で、北側柱は北方未発掘区に想定される。もし仮りに総柱建物とすれば、弥生時代終末期(福岡県甘木市平塚川添遺跡)を最古例とし、古墳時代以後に盛行する総柱式高床建築の最古例となる。したがって、北方未発掘区の調査結果を待たなければ当遺構を高床建築か平屋建築か判断できないが、上記の理由で平屋建の可能性が高いと考える。

(注10) 送り蟻は和歌山市鳴神II遺跡(弥生時代末～古墳時代)の屋根形木製品に円孔軸を送り蟻納で板材に取付けている(『昭和45年度阪和高速道路遺跡発掘調査概報』、和歌山県教育委員会、1971年3月)。未発表資料としては奈良県天理市稲向遺跡(弥生時代中期)出土材に蟻仕口をもつ丸太材があり、三重県上野市高賀遺跡(古墳時代前・中期)には板材の蟻溝に板材と直角に同厚の板を取付ける仕口があり机や台の脚取付仕口と考えられる。

込栓仕口は小さな家具調度品の類と推定されるもので、納差込込留とした例を2～3実見したが、未確定資料のため紹介を控える。

(注11) 平成5年4月4日の毎日新聞によると、福岡県粕原町江辻遺跡で縄文時代終末期の環濠集落が発見された。この集落の中央には桁行10m、梁行5.5mの中柱2本式平屋建物があり、周辺には主柱2本、円型平面の竪穴住居9棟と、梁行1間の高床建築址5棟がある。竪穴住居の形式は韓国松菊里遺跡の竪穴住居と同形式であることから松菊里型と呼ばれ、この集落遺跡と朝鮮半島との関連を窺わせる。中柱2本式大型平屋建物が吉武高木遺跡に先立って縄文時代終末期に北九州に出現していることは、松菊里型竪穴住居とともに中柱2本式平屋建物も同時に朝鮮半島から移入され、吉武高木遺跡に受け継がれたものとも考えられる。

1993年3月発行

浅羽町立浅羽東小学校建設工事に
伴う埋蔵文化財調査報告書

古 新 田 II

遺 物 編

編集発行 静岡県浅羽町教育委員会

印刷 磐田市二之宮251

株式会社 山田印刷所